
異世界で我が儘に

片翼の龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で我が儘に

【Nコード】

N8462U

【作者名】

片翼の龍

【あらすじ】

大学の帰りに交通事故に遭った主人公：桐谷龍司（22）

なぜか目が覚めた異世界で、ひ弱な現代人である彼の戦う手段は何か？神が創った世界に蔓延る、多種多様な魔物達。二度目の生を謳歌するために『世界の守り手』であるギルドに所属します。

主人公の行動は、作者の力量不足ゆえ平凡です。

RPG風最強を目指します

最新話までの概略：小さな我が儘を通すため、小市民は今日も生き

てます。あと、ちょっとだけ強くなりました。

第一話 異世界の森で（前書き）

作者の暇つぶしによって書かれた妄想小説です、ご注意ください。
作中に登場する人名、地名、その他固有名称はすべてフィクション
です。

初めて小説を書いた上、文才もないため、不快に感じた場合は速やかに退避してください。

第一話 異世界の森で

風の音がする。

寝ぼけたような状態から意識が覚醒するにつれて、それが風で揺れる木々が鳴らす音だとわかる。

穏やかな陽光に照らされながら、はっきりと目が覚めると自分が全裸で森の中に寝転んでいたことに気づいた。

「……………なんぞなもし」

口をついて出た第一声。

風を受けた時の肌寒さ、そして直射日光の暖かさ、そして背中いっぱいを感じるチクチクとした感触と土の柔らかさ。

わけがわからない。

誰か説明してほしい。

現状を把握するためになぜここにいるのか思い返す。

覚えているのは、サークルの帰りで自転車に乗っていたこと。

そして、真っ赤なスポーツカーが視界に入っ

…………… ああ、事故ったのか。深夜、信号が点滅する頃だったし車に注意するんだったなあ。

過ぎたことは仕方ない。

では、なぜ事故に遭った記憶のある俺が。

こんな森の中で、服も着ないで目覚めるはめになったんだ。

とりあえず実際に自分に起きたことを確認し、考える。

事故に遭ったのは間違いない。

感じたことのない強い衝撃を受けた記憶がはっきりとある。

そして、気づいたら見知らぬ場所。

考えられるのは、死体遺棄とか拉致とか、犯罪に巻き込まれた可能

性だが、そう決め付けるにはおかしな点があった。

事故にあったはずの体には目立った外傷はなく、特に痛みも感じられない。

それだけではない。

「あれ…眼鏡が」

幼稚園児の頃から嵌ったテレビゲームという誘惑によって失われた健全な視力。

最近のコンタクト派ではなく、面倒だからという理由で度のキツい眼鏡を愛用している。

しかし、その眼鏡は見当たらない。

掛けるのに気づかなかった、なんてこともなく顔に手を当てても眼鏡はない。

そして、眼鏡がないはずなのに視界がよく見える。

一新されたような体、見知らぬ場所、事故にあった記憶。

もしかしたら。

もしかしたら、俺は死んでしまったのではないだろうか。

ここは現世ではなく俗にいうあの世で、しばらくしたら鬼か天使かなにかができて案内されるんじゃないか。

そう考えていた。とりあえず俺の理解の範囲の外にある出来事に巻き込まれたのだと。

こんな意味不明かつ理解不能な状況に陥れば、これは夢だと思っただが、肌で感じるのは紛れもないリアル。

相変わらず人気のない森の中、日光浴を続けていると徐々に生きていく実感が湧いてきた。

あの世では、足があつて心臓が動いている幽霊が一般的なのかもしれない。
だが、ここまで生を感じられるなら少しくらい動き回ってもいいだろう。

とりあえず誘拐、ドッキリ、超常現象などの可能性を頭に入れつつ周囲の探索を試みよう。

できるなら、どうか

家族の元に帰れますように

そう願つて

第二話 ファーストエンカウンター

森の中を歩きながら、この後どうするか考える。

もしもここがああの世なら他の霊が、誘拐されただけなら民家が見つかるはずだ。

最悪、神隠しに遭っていて、妖怪なんかでできたとしても構わない。

いや、できるなら出てこないでほしい。

とりあえず現状を打破するために、自分以外の生命体を発見するのがもっとも手っ取り早い。

一応、沢や小川を探してはいるが、ほぼ手探りのまま森を進んでいく。

緩やかな斜面を下りながら歩いてるから、いずれは麓にたどり着ける。

大森林で遭難という可能性もあるが、希望を持って歩を進める。

歩を進めて30分ほど経っただろうか。

足元に流れる小川を見つけた。

とても澄んでいて、上流のほうで湧き水になってそうだ。

山くだりで喉が渴いていたため、すくって飲む。

おいしい。

疲れが吹き飛んだような気がして、さらに二口ほど口に含む。

この後は、この小川に沿って下っっていこう。

流れに足をとられないように注意しながら進んでいくと、徐々に水しぶきのあがる音が聞こえてきた。

この先に滝でもあるのだろうか。

だったらまっすぐ進むのは危ないと考え、水の流れる方向を確認してから進路を斜めにとる。

予想通り傾斜がきつかったが、あのまま進んで断崖絶壁に出くわすよりはいいだろう。

さっきまでいた場所より7mほどの高さをくだったところで、また小川の方向へ歩き出す。

水しぶきの音はより大きくなる。

きつとこの先をいけば滝が見える。

そしたらまた川に沿って歩き続けよう。

そう考えながら進むと、木々が開け、大きな滝つぼが見えてきた。流れも続いているみたいだし、ほっと一息ついたところでそれは聞こえた。

「な、なにをするつもりですか。変態！」

大声をあげなかった自分を褒めてやりたい。

別段肝が据わってるわけではない俺が醜態をさらさなかったのは、たまたま息を吐くのではなく思いつきり吸ったためだ。

胸が圧迫されあばらが軋んだ気がしたが、まさかの第一村人発見である。

すぐに声がした方向に目を向ける。

「キケケッ！」

「いやっ、離してよ！この化け物っ！」

「ゲッホ！ゴホッ……あ、肋骨が」

おい不意打ちはやめろ、俺の肋骨がやばい。

見つけたのは水場を挟んだ向かい側。

緑色のちっちゃいおっさんが、少女を押し倒している。

ぼろきれを纏い、ヤバい雰囲気濃厚に伝わってくるおっさんと、時代錯誤な洋服を着た少女。どこの原住民だよ、もしかしてここは地獄であれば鬼か？などと考えながら少女を助ける方法を探す。

実際にこんな場面に出くわしても、喧嘩なぞしたことのない小市民には対処が難しかっただろう。

しかしこちらは一度死んだ（かもしれない）身。多少は気が大きくなっていたのか、足元の石を拾い上げ全力で投げる。

「でええい！！」

向こうまで距離は約15m。

鬼が少女に覆いかぶさっているため、少女にぶつかることはないだろう。

俺が投げた握りこぶし大の石は、奇跡的にまっすぐ狙い通りに飛んでいく。

それはそのまま、綺麗な放物線を描いて鬼の後頭部に吸い込まれていった。

「ギャン！？」

頭をおさえて動きが止まる鬼。少女を逃がすなら今しかない。

「早く逃げる！早く！」

声を張り上げる。

こちらに気づいたのか、少女は鬼を突き飛ばして窮地から抜け出した。

少女は涙に濡れた顔でこちらを一瞬見た後、急いで逃げていく。きっとあつちに人の住む場所があるんだろうな。

そう考えつつ、第二投に備える。

緑の小鬼はまだダメージが響いているのかうずくまったまま動かない。

二投目を投げる。

当たらない。すぐに次の石を拾う。

三投目を投げる。

ケツに命中。大したダメージはなし。

「グアアッ」

鬼が復活したようで立ち上がり、こちらを向……く………！？

第三話 小鬼との鬼(つっこ)

「やっぱ人間じゃないよな……」

ブルドックのようにいかつい顔。口から覗く犬歯。高等な知性が感じられない赤い目。そして緑色の皮膚を考慮するに、ゴブリン、小鬼、オーク、オーガといった物語の中の化け物なのだろう。

今まで喧嘩したことなんてなかった俺に、狂人の相手すら出来ないのに、相手は狂った化物。

そんな奴がこちらを威嚇するように睨みつけている。

流れ出る嫌な汗を感じながら次の行動を考える。

あんなのと戦うなんて最後の手段だし、走って逃げ切れる自信もない大学に入ってからめつきり運動しなくなった今、持久力はなく、短距離走も100mを15秒はかかる。

対して相手は未知数。少女が抵抗していたことを思えば、筋力は体格通りか。

奴の注意が完全にこちらに向いた今、逃げ出した少女はもう安全だろう。あとはいかに自分の身を守るか。

奴が落ちていた棍棒を拾い上げ、奇声を発しながら水場を迂回しながら向かってくる。直接距離はおよそ20mだったが、おかげで倍以上の時間を稼げる。

対して俺は、助走をつけて滝壺の中に飛び込む。

思ったより深いが足はちゃんと底につく。水は澄んでいて冷たく、とても気持ちいい。

そのまま化け物のいる岸と距離を離していく。

ギヤアギヤ騒いでる奴の方を見ると、棍棒を振り回しながらも追ってこない。

どうやら運はよかったみたいだ。

水に入ったのには理由がいくつかある。

一つは奴の武器が刃物ではなく鈍器だったこと。

地上なら効果を遺憾なく発揮するかもしれないが、水中では踏ん張りが効かず、水の抵抗で打撃は弱まる。

もう一つは身長差だ。俺の身長は178cm。対してあつちは140cmといったところか。

低身長のため、深いところでは取っ組み合いが不利なのだ。

戦えない、逃げ切れない俺に残された唯一の逃走経路が、この滝壺だったのだ。いつまでも名前がないのは不便だし、あの緑色の化け物を『ゴブリン』と呼ぶことにする。

水に入ってから二分ほどしただろうか。

今ゴブリンと睨み合いの状況が続いている。

石をぶつけられ獲物まで逃がされたゴブリンはひどく立腹の様子だし、そう簡単には諦めてくれそうにない。

殺意を込められた視線なんぞ受けたことのない俺にとって、この状態は非常にづらい。

ただ水中で立っているだけで、精神的に参りそうだ。

そのままさらに時間が経過する。

彼女は無事に人がいる所まで行けただろうか？

目の前のコイツを見てからは、この世界が決して安全とは思えない。まだ他に化け物があるかもしれないと考えると不安に駆られる。

まあ人の心配よりも自分の身を案じる方が大切だよな。

即刻死に繋がるわけじゃないけど、はつきりいつて詰みだし。水に入ったおかげで戦闘は避けられたが逃げ切れたわけではない。我慢比べでもあるが結局はジリ貧だ。

となると、あの女の子が走っていった方に行くしかない。現状で頼れるのは、やはり同じ人間しかいない。

ゴブリンとはどう頑張っても友好的関係になぞなれないだろうし。

これからの行動予定を考える。

まずは少女が走り去った方向へ逃げる。

そして人間を探して助けを求めよう。

箒でも物干し竿でもいいから、撃退できるだけの武器代わりになるものが見つかればそれでいい。

あとは覚悟を決めて行動に移るだけ。

失敗したら命を賭けた殴り合いが始まり、その結果命を落とすかもしれない。

もしかしたら勝てる可能性もあるが、生死を賭けた戦いには卑怯もクソもなく、目つぶしや金的を繰り出す度胸が必要だ。

あいにくと自称ひ弱な俺には想像も出来ない。

投げる、突き飛ばすといった自衛手段をとるのが精一杯に違いない。捕まったときは、そのとき考えよう。

さあ始めよう。

これがホントの鬼ごっこってやつだ！

大きく息を吸い込み、そして潜水を始める。

水は澄んでいるため上から見ればどこにいるかわかるが、岸にいるゴブリンの身長だと水面が反射する角度になる。

水底のゴツゴツとした石や岩に手を伸ばし、深い場所を泳ぐ。

目的の岸まで10m弱。

一息で泳ぎきり岸へ上がる。

振り返ると、ゴブリンがこちらに気付き狂ったような奇声をあげな

がら駆けてくる。どうしようもなく恐怖を感じながら、こちらも追いつかれないように全力で走り出した。

「はっ、フツ、ハツ、ハツ……」

全速力の9割ほどで走るとゴブリンとの距離は少しずつ離れるようだ。

最もそんな速度は一分も維持できないため、今はつかず離れずだいたい20〜30mを維持するようにしている。

当然立ち止まれば数秒で追いつかれるだけに気を抜けない。

三分はそのまま走っただろうか。

今までの獣道のような細い道から、急に木立を抜けて開けた場所に出た。

塗装されていない田舎の道路程度には整った道も続いている。

ここを行けば、街か町か村か、なにせよ人がいる場所につくはずだ。

振り返ると今まで追ってきていたゴブリンは影も形もない。

人のテリトリーが近くなつて諦めたのかもしれない。

そこそこ走り続けたおかげでかなり胸が苦しい。

最初すぐ逃げ出して、より深く森に入っていたら間違ひなく逃げ切れなかったらう。

周囲の森は静かで気持ち良い風が吹いている。

危機は去つたと思ひその場に腰を下ろす。少々疲れすぎた。

息を整えるのにも時間がかかりそうだし休憩を取ろうか、などと考えている最中。

森から先ほどのゴブリンが飛び出した。

「!?!」

だらけていた脳は瞬時に覚醒し、逃走に移れと体に指示をだす。

心臓は全力で血液を送り出し逃走を促す。
しかし、すでにトップスピードの追跡者と今から走り出す逃走者。
その場から駆け出して10mも進まないまま、背後からの衝撃で地面に打ちつけられる。

「ったあ！？くそっ痛え……」

「グギャギャギャ！」

タツクルをかましたゴブリンはすかさず追いつき、俺の背中に飛び乗る。

その手に持つ不格好な棍棒も、今の俺には地獄の鉄槌に見える。とっさに両腕を頭に回し守る。

頭をかち割られて死ぬのは想像もしたくない。

が、衝撃は予想外の場所に来た。

最初の一撃は臀部：ようは尻だ。

尻は衝撃に強いと思っていたがやはり痛い。

コイツ、石をぶつけられたお返しをしゃがった。

痛みに唸る俺を見て気をよくしたのか、先ほどよりもさらに大きな声をあげる。

この体勢はマズいと、両手を地につけ力を込め起き上がろうとした瞬間、理解できない衝撃が叩きつけられた。

第四話 情けは人の為ならず

朦朧とする意識の中、無意識に右手で後頭部を触る。

その手を見ると、指先が赤く染まっている。

徐々に覚醒する意識と共に激しい痛みがやってきて、頭部を殴られたことを知る。

初めての刺激に頭がいつぱいになる。

分かっているのは、ついに死が想像から一步現実に近寄ったことだけ。

このままでは本当に死ぬ、反撃しなくてはと思っても、頭の痛みが邪魔をする。

視界は涙でぼやけ、握る拳にも力が入りきらない。

だが。

「こんな…ことで…終われるか！」

ありつたけの力で足掻き、裏拳がゴブリンにあたる。

肉と肉が激しくぶつかり骨を通して振動が伝わる。

殴った俺も痛いんだ、あっちはもっと痛かるう。

ゴブリンが衝撃で横に転がったところを見て、俺は痛みに負けて意識を手放した。

side:ゴブリン

ツテテテ。

最後ニ一発デカイノモラツチマツタ。

セツカク美味ソウナ雌ヲアジワツテカラ喰オウトシテタノニ邪魔シヤガツテ。

シカシオカシナ人間ダ。
裸ノママ戦イヲ挑ムヤツ八間イタコトモナイゼ……マア美味ク八ナ
イガ食料ニカワリナイ。
頭ヲツブシテ持チ帰ルトシヨウ。

セーノ！

グシヤ

side:???

「全く、あのハゲ！面倒な仕事ばかり押し付けるんだから〜もう
」

村を出て少し歩いたあと、通いなれた小道を通ってお気に入り
の場

所に出る。
ここは精霊が休んでいてもおかしくなくらい綺麗な場所。

その証拠に栽培が難しい貴重な薬草も生えてるし、水も澄んでいて
水浴びにもってこい。

薬師を営む両親の手伝いを始めたころ、おばあちゃんに教えてもら
った秘密の場所。

おとうさんとおかあさんには内緒なんだって。

教えたら薬草全部もっていきそうだって笑ってた。

今はもう知ってるのはわたしだけ。

だからこの薬草が必要になったときは、おとうさんがとってこいっ
て五月蠅いんだ。

いやになっちゃう。

今日も渋々薬草を取りに来ただけど、ここは落ち着くわ。
いい香りのする花に囲まれて自然を満喫する。

わたしが知る最高の贅沢。
せつかくだし少しお昼寝しましょう……QoOo

なんだか嫌な匂いがして目が醒めた。
知らない匂いだ。

なんだろうと目をあけると世界が緑色に染まっていた。

「キケケッ！」

(ゴブリン!?なんでこの場所に魔物が)

ゴブリンが私に馬乗りになって、私の顔を覗き込んでいた。
私が目覚めたのを確認して、その手を伸ばし私の服を掴んだ。

「な、なにをするつもりですか?。変態！」

ナニをされるかわからないが、嫌悪感が体中を駆け巡る。
手を振り払おうとするが、馬乗りのまま体重をかけられて上手くいかない。

「いやっ、離してよ!この化け物っ!」

絶望的な状況に目が熱くなる。

頼りになる両親も村を守る自警団もここにはいない。
私しか知らないのだ。

誰かが通りかかることもない。

おかあさんの顔を思い出す。

いつも優しく、薬師として村を守る立派な母。

おとうさんの顔を思い出す。

冒険者を引退してからも村を守り、母の手伝いをし、私に厳しくも愛情を持って世界について教えてくれていた父。

(神様。精霊様。私の願いをお聞き届けください。どうか助けて)

もう一度両親に会いたい。

ハゲだなんだと悪態をつくのはやめよう。

早く薬師として認められるように頑張ろう。

だから…お願い、助けて…

「ギャン!?!」

「早く逃げろ!早く!」

男の人の声がして、拘束が緩んだことに気づく。

何が起きたのかわからないが、逃げると言われたことを思い返し、

ゴブリンを突き飛ばしてやっとその姿を確認する。

涙でよく見えなかったが黒髪で裸の男性が対岸に立っていた。

とりあえず今は逃げないと。

お礼を言うのも忘れて村の方へと駆け出す。

小道を抜け、村が視界に入ったところで息を切らせて走ってきた私を見た見張りの二人もこちらに気づく。

慌てて私に駆け寄り、

「どうしたアンナ!?!何か合ったのか?」

心配して声を駆けてくれる。

全力で走ってきたせいで呼吸がづらい。
なんとか一言、「魔物が…」としか言えなかった。

顔を青くした二人だったが、すぐ自分たちの仕事を思い出し、

「おい見習い、クレアさんとこ行って旦那呼んでこい」

「り、了解しました」

一人が指示を出し、残った方が質問する。

「まずはこれ飲んで落ち着け。それで一体どうしたんだ。魔物を見たのか？」

腰に掛けた水筒を私に手渡して、私が息を整えるのを待ってくれる。
「ありがとう」と言って一口飲み、水筒を返す。

森でゴブリンに寝込みを襲われたこと、怪我はないことを彼に話したころ。

「アンナー!!!」

大声で私の名を呼び、凄い速さでこちらに向かってくるおとうさん。

「アンナ、無事か？怪我はないか？」

おかあさんの手伝いをするときのエプロンをつけたまま、私の方を揺すりながら聞いてくる。

いつもなら恥ずかしがってエプロンを人前でつけるなんてこと、絶対にやらないおとうさんを見て嬉しくて涙が溢れる。

そして私を助けてくれた存在を思い出す。

「大丈夫だよおとうさん。魔物に襲われたけど、精霊様が助けてくれたんだよ」

「なに？精霊様を見たのか？」

「うん！真っ黒な髪でおとうさんくらい身長が高くって、裸だったけど格好良かった」

私が精霊を見たと言ったときは驚いたような顔をしたおとうさんだったけど、次の瞬間、急に厳しい顔になった。

「おい若造。武器を貸してもらえるか」

「構いせんが……」

おとうさんが見張りの人から槍を受けとる。

「お、おとうさん、一体どうしたの？」

おとうさんは村で一番強い。だけど、一人で魔物を退治しに行くのは危険だ。自警団のみんなが集まるまで待たないと。

「急がないと間に合わないかもしれん。」

「間に合わないって何が……」

「アンナ。精霊様に黒い髪をしたものはいない。可能性があるとしたら、異国の血をひいた、同じ人間だ。」

サーッと、全身から血の気がひく。
武器も防具もなく魔物の注意を引いてくれた男性。
てつきり人ではない存在だと思っていた。
そして魔物に殺されることもないと。
そして気づく。

私の代わりに死ぬかもしれないことに。

「おとうさん！」

「道案内を頼めるか、アンナよ」

「うん！」

私を抱えて、おとうさんは走る。

足の遅い私は代わりに槍を持っている。

恐怖はない。

おとうさんの存在がとても心強い。

滝に通じる小道に近づいたとき、ゴブリンがああ男性を殴りつける
ところが見えた。

まだ生きてる！

ここまで逃げてきたのだろう。

しかし、まだ助けられない。

「おとうさん、急いで！」

私を下ろし、おとうさんは槍を受け取る。

さっきまでよりも速い速度で駆け出すおとうさん。

彼の方を見ると、ゴブリンが棍棒を振り下ろしたところだった。

ここからでもわかる酷い怪我だ。

叫び声をあげそうになったが、彼がゴブリンを殴りつけたのを見て、まだ死んでないことに安堵する。

しかしその後、ピクリとも動かない。

ゴブリンが起き上がり彼にトドメを刺そうと再び棍棒を振りかぶる。まだおとうさんとゴブリンの距離は20m以上離れている。

間に合わない。

絶望が頭をよぎる。

その時、おとうさんの声が響く。

『我に運命の祝福を与え給え：プレス』

魔法が発動し、おとうさんが一瞬光に包まれる。

そして手に持った槍をゴブリン目掛けて投げる。

祝福を受け、投擲された槍は真っ直ぐにゴブリンに向かっていく。そして、棍棒が振り下ろされる直前に、グシャッと音を立ててゴブリンの頭蓋骨を貫通し絶命させる。

槍を受けた衝撃で、小柄なゴブリンは弾き飛ばされ、ゴロゴロと転がった。

おとうさんと私は、急いで男性に駆け寄る。

頭から血を流し、意識は戻っていない。

このままでは危険だ。

急いで手当てしないと。

傷を見て渋い顔をしているおとうさんを見る。

傷が深いことに気づいてる。
だから、お願いする。

「おとうさん、傷を治す魔法は使えない？」

「無理だ、俺には時間をおいて一度使うくらいしか魔力がない……あとは薬で治療するしか……」

「ここからじゃ家まで間に合わないよ。だから……ついてきて」

おとうさんに頼んで袖を裂いてもらい包帯代わりにする。
止血のため傷口を塞ぐが、すぐに赤く染まり始める。

おとうさんに彼を背負ってもらい、あの場所を目指す。

あそこに生える薬草ならきつと治せる。

待ってて、私を助けてくれた勇者さん。

今度は私が助けてみせるから……！

第 話 夢 の 中 で

一面の闇。停電したみたいに、光が消えた世界。ただそこに自分しかないような感覚。気づいたらここにいた。

(どうしてこんなところに？いつから？自分はどくなった？日常から非日常に足を踏み入れ、女の子を助けた後どくなった？殺されたのか？誰に？化け物に…？)

そこまで思考が巡った途端、周囲にいくつもの気配が現れる。否、埋め尽くされる。

ゴブリン、オーク、コボルド、オーガ、サキユバス、ヴァンパイア、ヘルハウンド、ケルベロス、ワイバーン、ドラゴン…植物のような物もあれば、岩石のようなものもある。自分が知るおとぎ話や伝説、伝承の中に出てくる悪役達。それらは闇の中にあっても、濃厚な死と闇を纏いながら、存在している。

そして、声が聞こえてくる。内容は理解できない。理解してはいけない。なぜならそれは、呪詛。世界のすべてを呪って余りあるほどの想いが込められた言葉。

頭が痛みだし、喉が乾き、胸は締め付けられ、腕は焼け、足は潰される。

そうか、ここは地獄なのだろう。どうやら二度目の死にはチャンスを与えられなかったようだ。このまま苦痛のうちに消えるのか。すべて終わるのか。もうどうでもいいことだ。だがひとつ、気になり出している。

なぜこの声はこんなにも泣きそうに

なぜこの声はこんなにも辛そうに

なぜこの声は助けを求めているのか

瞬間、闇の中に光が生まれる。自分の中に温かい力が声を伴って流れ込む。

ああ、『あなた』もそうなのか。なら…死にかけの俺だけど、お手伝いしましょう。何ができるかわかりませんが、『女の子』を泣かせたままなんて嫌だからね。

そして、光に抱かれたまま俺は意識を失った。

第五話 田舎に泊まる

「ふぁあつ……眠い……」

心地良い感触と柔らかな暖かさに包まれ目を覚ます。目覚まし時計代わりの携帯アラームがならなかったな、と不思議に思い辺りに意識を向け、ここが自分の部屋ではないことに気づいた。

「え、なに……ここどこ？」

呟くようにでた独り言に答えるかのように、その部屋の入り口の戸が開く。入ってきたのは、長い金の髪に西洋風の穏やかな表情の女性、年はよくわからないが自分の母よりも若く見える美人だった。ゆったりとした白いロープを着ていると、まるで魔法使いのようだった。

「ふふつ、おはようございます。よく眠れましたか？一応、傷は完治したと思うんですけど」

こちらの様子を見た女性が話しかけてくる。流暢な日本語で話しかけられたことに戸惑う。いくらグローバルな時代とはいえ、まるで日本で育ったかのような発音。そして忘れてはならないのが、ここは自分の知らない土地であり、ゴブリンのような化け物がある世界であること。

「あ、あの、えつと」

なんと答えるべきかわからず焦って出た意味をなさない言葉。命は助かったらしく体に痛みもない。痛くありません、とでも答えるか

？日本語でいいんだよな？
化け物のことを先に聞くべきか？

「えっと……あつ、この服どうしたんですか？」

見慣れない服を身に着けていたことに気づき聞いてしまう。すると、その女性はニコニコしながら答えてくれる。

「ああ、それは夫のよ。裸のままじゃ大変だろうから、治療が終わったあとに着替えさせたのよ？」

「は、裸…？」

言われて思い出す。自分はこの土地に何も持たずに来て、服も例外でなかった。少女を助けたときも、ゴブリンから逃げるときも、そして怪我を治してくれていた間もずっと裸だったのだ。急に恥ずかしくなって赤面する。

「あら？その様子じゃわざと裸でいたわけじゃないみたいね」

と女性は愉快そうに言ったあと、真面目な顔になる。

「困っているなら何があつたか話してくれないかしら？」

急に尋ねられ、正直に話すべきか、それとも不審者扱いされない別の話をでっちあげるほうがよいのか悩む。受け入れてもらいやすいのは作り話だろう、化け物がいる世界だ。荒んだ世界なら山賊だっているに違いない。身ぐるみはがされて逃げ出したことにすれば解決だ。ただし、今後無知が問題になり嘘がばれる可能性も十分にある。

などと考えていると、

「まあ、まずは食事にしようかしら。ちょうど二人が帰ってくる頃合いね」

そういつて部屋を出て行く。置いてけぼりにされ、現状把握に努めぼーっとしていると、

「ついてらっしゃい」

と声がかけられたのでいそいそと部屋を出る。その際目につくのは、どれも非現代的な物の数々。金属製の物が見当たらないし、電気もなさそうだなと思いつながら先ほどの女性のあとを追いかける。廊下に出て、次はどこに行けばよいのか左右を見ていると、ちょうど左手奥の玄関らしき扉が開く。

「ただいま〜おかあさん。あの人の様子はど…う…!?」

テレビでしか見たことのない、俗に言う金髪美少女が現れ、大きな声で帰宅を告げると共にこちらを見て固まる。たっぷり三秒経つてからダダっところちらに駆け寄る。

「あ、あの。お怪我は大丈夫ですか？」

「う、うん。怪我はなんともないよ。大丈夫、大丈夫」

見知らぬ女の子から話しかけられて動揺したが、なんとか返事に詰まらず答える。少女は安堵したように息をつき、家の奥側の扉に向かい開く。

「もっつおかあさん。目が覚めたら伝えに来てくれる約束でしょ」

「さつき起きたところよ。今からご飯にするから手伝ってちょうだいね」

「はい」

そんな会話が聞こえてくる。そういえばだいぶお腹が減っている。死んでからまだなにも食べていなかった。お呼ばれたし食事にはありつけそうだけど、先のことを考えると気が重い。財産のない状態は死活問題だな……

「あの、何かお手伝いすることはありますか？」

大したことはできないが形式的に聞いておく。配膳なら任せろーバリバリ、ヤツテ。

「病み上がりなんだし座っててくださいな」

はい、初アクションは失敗しました。おとなしく席につくことにします。

木製のテーブルにつき椅子に座る。

する事がないため、先ほどの続きを考える。非常に親切にしてくれる人に嘘はつきたくない。手をさしのべてくれる人は味方だ、とよく考えるのでできれば正直に話したい。よくよく考えれば不審者甚だしい自分を助けてくれたのだし、変なことを言っても受け入れてくれるのではないか。よし、まずは世間話から始めよう。なんで日本語が通じるかも聞きたいし。

考えをまとめている間に食事の準備が整ったらしく、いい匂いが広がる。少女がテキパキと配膳をし、三人でテーブルを囲む。

『いただきます』

「…いただきます」

並べられたサラダとスープ。二切れのパン。現代人にしたら物足りない食事だ。二人の様子を伺いつつ、味わって食べる。が、やはりというか味付けが薄い。コンソメもなければ、塩も少ないのか。昔は塩って貴重品だったもんなあ。

二人の食べる早さを見て調整しつつ、同じタイミングで食べ終える。

『ごちそうさまでした』

揃って発声。

「さて、それじゃあ自己紹介から始めるわね。」

突然、少女の母親がそう切り出した。

「私の名前はクレア。姓はアラベルよ。薬師を営んでいるわ。その子の母親よ」

「私はアンナ。家の手伝いで薬師を目指してるの。さっきは助けてくださってありがとうございます」

助けた？なんのことか考えると、納得した。ゴブリンに襲われていた少女か。

「いえ、どういたしまして」

死にかけたけど、助けられたなら恩人だ。お互いに迷惑をかけても互いに助け合えたならいいだろう。優しい気持ちになっていると、次はあなたの番よ、と促してくる。

「俺は」

あ、名前どうしよう。そのままでもいいのか。カタカナっぽくする必要あるのだろうか。やばい、何も思いつかない。

「俺は桐谷龍司といいます」

ああ、やっちまった。どう思われるのか見当もつかねえ。と後悔しているよ、

「やっぱり東方出身の方なのね」

とクレアさん。普通に受け入れられた。呆気に取られつい、

「え？日本あるんですか？」

「なにそれ？」

今度はアンナちゃん。え、日本じゃないのかよ。どんなひっかけだよ。

「残念だけど日本というのは聞いたことがないわ。私の知る東方の国の名はゲッコウ。さてさて、名前だけじゃなく他にもいろいろ話してもらえるわよね？」

早速墓穴を掘ったらしい。残された選択肢は一つになった。予定通りありのまま話すことにしよう。

「自分でもよくわかりませんが、俺はここから遠く離れた場所から来ました。ここでの常識や知識が通じないほど遠くです。なぜか言語は共通のようですが」

「ふむ、もしかして裸なのが当たり前だったりするのかい？」

「いやそれは違いますって。」

そんな野蛮人にはなりたくない。

「遠くってゲッコウのことじゃないの？」

「ゲッコウなんて国は知らないし、俺の国はニホンっていうんだ」

「ニホンなんて国はやっぱり聞いたことがないし、そうになるとさらに海か山を越えた未開拓の方かしら？」

「きっとそれも違うと思います。理由がいくつかありますけど、聞いてもらえますか？」

決定打になるであろう事実を述べるため前置きを置く。

「ええ、どうぞ」

「なにになに？」

「えっと、まずここにくる理由になったあの化け物のことなんです
が」

「ああ、魔物のことね。ゴブリンに襲われたって聞いたわ」

ああゴブリンって名称まで同じなんだ。

「うう…」

アンナちゃんは思い出したのか嫌そうな顔をした。

「……実は、俺が知る限りあんなやつは、魔物は、存在しませんでした」

「魔物がいない…?」

「それに生活の様子が異なります。金属製のものが見当たらない、簡潔に言えば……文化、特に技術分野に大きな差があります」

ここまで言えば、何を言わんとしているか大体伝わっただろう。

「それはつまり……」

「はい、俺は」

「伝説の古代人ね!」

「異世か…ええっ!?!」

伝わらなかった。なんだよ古代人って。むしろ現代人だよ。

「えっとどういうことでしょう、その…古代人って」

クレアさんは目を輝かしている。ふと横を見るとアンナちゃんもだ。なんだよ古代人って。むしろ珍獣だよ。

「ええつとね、古いお話があるのよ。この世界の歴史にはね、遙か昔、神々といくつもの種族が共に暮らし平和を謳歌した時代があったとされてるのよ」

「街の神官様が時々お話してくれるよね」

え、神様いるのかよ。生き返った時点でファンタジーに足を踏み入れたとは思ったけど、どんどんスケールが大きくなるな……

「そうね。それで、その頃は魔物もいなくて、世界は今よりもっと繁栄してたの。きっと家も服も食べ物も医療も、いいえ、何もかもが優れていたはずよ」

だからあなたは古代人よ、じっちゃんの名に賭けて。残念違います、わたくし神様なんて見たことありませんし、宗教は人生における世渡り論だと思ってました。

「あー多分いや間違いなく違うと思います」

声小さく否定してみる。ガンとシヨックを受けて落ち込む二人。悪いけど真実はいつも一つなんだ。誤解を解くついでに伝説とやらの続きを聞いてみるか。

「それで、どうして魔物なんかができるようになったんですかね？神様がいなくなっちゃったとか？」

適当なことを言ってみると、クレアさんが復活し答えてくれる。

「いい質問ね。確かに平和な世界だったんだけど、ある事件が起き

たのよね」

「事件？」

「そ。一番偉い神様の双子の娘。ルナとアウラっていうんだけど、なぜか喧嘩が始まって、やがて大きな争いが始まるの。ルナが光を、アウラが闇をかたどって、他の神々も思い思いのほうに味方してね」

「なんとも壮大な姉妹喧嘩ですね……」

「ふふつ。それでね、闇の女神になったアウラは、世界に魔物を解き放つの。世界は荒れに荒れたわ。だけど、光の女神になったルナが、闇を封じ込めて魔物は数を減らした。ただ争い傷ついた神々は二つの陣営に別れてこの地を去った。今日は雲もないし夜になれば見えるかもしれないわね」

長かったおとぎ話（もしかしたら実際の話かもしれないけど）が終わり、気づいたらアンナちゃんがテーブルに突っ伏して眠っていた。

「あらあらこの子ったら。リュウジさん、悪いけど寝室まで運んでくれないかしら？お話はまた明日ね」

などと仰います。……俺が運んでいいのだろうか。クレアさんに尋ねると、

「あら、か弱い私に運ばせる気？」

強かな女性に印象修正したが、反論できないため、ごめんねと寝ているアンナちゃんに謝り体を持ち上げる。思ったよりも軽く、これなら余裕で運べそうだ。

「その子の部屋は二階に上がって一番手前よ。しっかりね」

やけにニコニコしている。俺みたいなイケメンでもない男に触られて、迷惑するだろうし、さっさと運んでしまおう。部屋について戸を開けようとしたとき、階下から、

「一人で寂しかったら一緒に寝てもいいわよ」

何も聞こえなかったことにしよう。

アンナちゃんを部屋に寝かし下に降りると、ちょうど玄関の扉が開く。

「母ちゃん、今帰ったぞ」

筋肉質な男性が入ってくる。特徴といえば薄いことだが、個人の名誉のため言及はさける。先ほどの発言からしてクレアさんの旦那さんなのだろう。

「おお、お客人。元気そうじゃないか」

「ああえつと、お陰様で」

「いやー良かった良かった。娘の恩人を見殺しにしたとあれば、村中の笑い者、母ちゃんもブチ切れただろうからな。ガッハツハ」

見殺し……？見殺しというと危険なとき近くにいたってことだよな？
つまり……

「もしかしてゴブリンをどうにかしてくれたりします?」

「おう、危機一発ってやつだな。怪我の治療は母ちゃんとアンに任せたがよ」

おお、化け物を倒せる英雄のご帰還じゃ！

「そうだったんですか！ありがとうございます」

「なに、気にするな。娘の恩に報いただけさ」

いいなあ憧れちゃうなあ、強い男ってやつだな。

「あらおかえり。自警団の方は落ち着いたの?」

「おう、魔物に備えて見回りと警備は万全。武器の手入れも忘れずにやらせといたぜ」

「そう、ご苦労様。アンはもう寝ちゃってるから静かにね」

「むっ。てえと酒盛りは無理か。せっかく村長脅して一本頂いてきたのによ」

「明日になさい。そうそう、これが私の旦那よ。ほら挨拶しな」

「いけねえ、忘れてたな。俺はグラン」

夫婦の会話にすっかり気をとられていて反応に遅れた。

「……あ、俺は桐谷龍司といいます」

「そうか、リュウジ。何もないとこだがゆっくりしていけ」

そつだ、すっかり忘れていた。俺にはここに置いてもらう理由はないのだ。傷も治り服ももらった。いつまでもゆっくりしてはもらえない。今後を考えないと。

「あの、でもそんなお世話になることは……」

心残りだが、すぐに出て行くのが礼儀だと思っただが、予想に反した言葉に引き留められる。

「ハツ何をいつてんだ。そんなの気にしなくていいんだよ。家主の俺がいいっていえば問題ねえだろ？」

「でもアンナちゃんを助けた分はもう頂いてます、傷を治してもらって服も貸していただいて……」

「あら、遠慮しちやってるのね。うーんそつねえ。こう考えてはどつかしら。あなたの傷を治したのは、娘を助けるためのもの。それ自体は等価かもしれないけど、まだ私たちはあなたに報いなければならぬものがあるの。アンナを助けてくれたその勇気に対して、ね」

と最後にウイングまでつけて言われて、気恥ずかしくなって何も言えない。

「そついうことだ。俺たちの気が済むまでゆっくりしていくしかなさそつだな」

グランさんも豪快に笑いながら同意してくれる。自分の勇気をほめられたことなんて今までであっただろうか。何もない自分が異世界で初めて認められた気がして、嬉しくてちょっぴり恥ずかしくて、気づいたら目頭が熱くなっていた。

「あ、ありがとうございます」

止まらなくて泣き声になってしまったが、二人は「気にすんな」「泣いてスッキリしな」と声をかけてくれた。

こうして異世界初日の夜は更けていった。使わせてもらった部屋から見える月を眺めながら、今日一日を思い出し、気づいたら眠ってしまっていた。

第五・五話 田舎に泊まるう・裏

side:アンナ

彼の応急治療が済んで、すぐに家まで運ぶ。家にはおかあさんがいる。治療の腕前も設備もあるし、心配はない。

ただ気がかりなことがあって……

私が彼に助けられたとき、逃げるのに必死だったし彼は精霊様だと思っていた。私たちが彼を助けたとき、傷の手当てに集中していて他に気をやれなかった。でも今は落ち着いて彼を観察できる。そして、彼は同じ人間で、服を身に着けてないことを意識してしまった。

肌は綺麗で、傷はないし日に焼けてもいない。おとうさんとは何もかもが正反対に見える。髪もよく手入れされていて羨ましい。異国の人ってこれが普通なのかな……

後頭部の怪我だったからうつ伏せのままだったんだけど、手当てして村に運ぼうとしたときが問題だった。さすがに全裸だと…その…私が困っているのに気づいて、おとうさんが上着を脱いで彼の腰に巻きつけた。その際、

「アンナも気にする年頃になったか」

なんて寂しそうにいった気がする。

村についたら、おとうさんが見張りの人たちに少し話をしていた。どうやら自警団のみんなを集めて話し合いをするらしい。家の診療用のベッドに寝かせた後、

「後は任せた」

って、おかあさんと私に言って集会所に向かっていった。

おかあさんに事情を説明して、治療に参加させてもらう。薬草をすり潰し染み込ませた布を、打撲の痕があるところに巻いていく。頭部の傷には信仰呪文を唱えるみたい。対象を限定することで効果を高めることができるらしい。私が生まれる以前は、おとうさんと冒険者をしていたおかあさんは、魔法が使える。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒せ：キュアウーンズ』

薬草の効果と癒しの魔法で、もう完治に近い状態まで回復した。あとは経過を看るだけなんだけど、ちょうどおとうさんが帰ってきた。ゴブリンを見た私の話を聞きたいらしい。ほんとはずっと彼の看病をしていたんだけど仕方ない。彼が目覚めたらすぐ知らせてね、とおかあさんをお願いして、おとうさんと出掛ける。自警団のみんなに話をして、一人で薬草を取りに行かないことを約束し家に戻る。おとうさんは、みんなのリーダーとして見回りの指示や村の防備の確認のため残るらしい。

家のドアを開けると、心配していた相手と目が合った。いつの間にか見慣れた服も着ている。ビックリしちゃったけど、すぐに状態を確認する。本当に大丈夫みたい。そのあとは、三人でご飯を食べ、初めて彼の名前を聞いた。私の知らない国の人らしい。名前の順番も逆で、私たちの流儀だとリュウジ・キリタニ。忘れないようにしなきゃね。

そうしているんな話をしていると、おかあさんの悪い癖が始まった。

知識に自信があるからか、人に教え始めると止まらないの。小さい頃からよく聞かされた伝承だったから、だんだんと眠くなって……

気づいたら次の日の朝だった。そのあと、リュウジさんが私を部屋まで運んでくれたと知って、ちよっと嬉しかった。

第六話 初めてのお使い

スッキリと目が覚めた。昨日は死にかけてというのに、以前よりもむしろ体調がよくなっている気がする。固いベッドから抜け出し、安いボロ靴を履く。服とついでにこれも頂いた。窓から外を見て、太陽の位置から大体8時くらいかなあとぼんやりと考える。この世界で時間を確認したり、お金を稼いだり、ようは生きていくための常識を得るにはどうしたらいいのだろう。普通に考えて、この一家にお世話になりながら、一般常識を教えてもらうのが最善だろうか。部屋でゴロゴロしているわけにもいかないし、今後の相談をしよう。と夫妻に会いに部屋を出る。部屋の向かいにはアンナちゃんの部屋があるが、もう起きて薬師として手伝いにいってるだろう。階段を下り居間を抜け、作業場に向かう。薬の匂いが広がる中、薬品を調合しているクリアさんを見つける。

「おはようございます」

「あら、おはよう。よく眠れました？」

「はい、体調の方も、前より良くなったくらいで」

「それは良かったわ。今アンナと夫が薬の材料を取りに出掛けているから手が放せないの」

「あ、いいんです。何か手伝うことがあるか聞きたいだけですから」

「あらそう？ん〜…えっと、薪割りってできる？」

「…経験がないので判断しかねます」

「慣れないうちは危ないから、薪割りはだめね。じゃあ水汲みに行つてもらおうかしら」

「水汲みというと、井戸ですか？」

「ここは近くに澄んだ小川が流れてるからそちらに行つてもらおうね。場所は村の正面から見えるくらいだし大丈夫でしょう」

つまり以前見つけた滝から続いているのかな。あれは確かに冷たくて澄んだ水だった。

「わかりました！さっそく行つてきます」

「家の裏手に水瓶と運搬用の小さな桶があるから」

「ラジャー〜！」

初めてのお使い（異世界版）に気合いが入った俺は、勢いよく駆け出した。クレアさんが驚いた顔をしているのにも気付かずに。

「桶と聞いて、風呂のやつを思い浮かべても悪くないよな……」

予想より大きな水瓶と予想より遥かに大きな桶が、俺の目の前に存在している。まあ仕方ないか、多少きつくてもお仕事なんだし。まだ軽い桶をもって村の正門を目指す。木製の家が建ち並ぶ穏やかな村だ。時折小さな子供たちが遊んでいたり、農作業に精をだす大人

を見かける。正門らしき場所を見つけ近寄ると、二人の武装した男性が目に入る。簡単な防具と手には槍を持っている。防具は皮製なのか、ゲームでしか連想できないが。

向こうもこちらに気付き、まずは挨拶をしようと口を開いた瞬間、

「おお昨日の不審者じゃないか」

「ええっ!?!」

いきなりの不審者扱いに度肝を抜かれる。どうしたかかとわたわたとしている、

「先輩だめですよ。あんまりからかつちゃ。俺は構いませんが、旦那にぶつ飛ばされますよ」

「冗談に決まってるじゃねえか……。俺は軽く緊張をほぐしてやるうとだな」

「はいはい」

どうやら軽いジョークらしい。村を追い出されるフラグかと思って焦ったぜ……

「えっと、初めまして。君のことは聞いてるよ、アンナちゃんを助けたんだって」

「もしくは裸で行き倒れていた病人ってな」

ああ、確かに裸で頭に怪我して運ばれてたなら、不審者に見えるわ。

今の境遇が非常に恵まれていることに改めて感謝しよう。

「まあ旦那のところに世話になるらしいし、自己紹介しとくか。俺はサント、この村の自警団の一員で家は、ほらすぐそこだ。んでこいつがトラン。はい自己紹介おわり」

「……って俺にはさせてもらえないんですか!？」

「名前だけ分かればいいだろう別に」

仲のよいコンビなのだろうか。息があったいい漫才師になりそうだなあ。

「はは、ええと俺は桐谷龍司です。リュウジが名前なのでそちらで呼んでください」

「へえ、髪の色が真っ黒だから珍しいと思ったが、姓名逆と。東方出身の方だったか」

「ええ、訳あってこちらにいますが」

「そうか。深くは聞かねえ。あんた悪いやつには見えないしな。水汲みなら、ほら向こうに見えるだろう。ここで見てやるから安心していってこい」

「はい、ありがとうございます。魔物に襲われたら助けて下さいね
笑いながら任せると言ってくれるサントさん。さっそく水を汲んでこよう。」

「ではまたあとで」

「おっ」

別れを告げ、桶を持ち直す。川まで50mくらいか。一分もかからず水辺に到着し桶を川に浸す。一度水を大量に入れたら持ち上げるのにも苦労したため、半分程度で様子を見る。これでだいたい20kgくらいか。

「お、重いけどまだ平気かな」

とりあえず距離は近いのだから足りない分は往復するでしょう。ヨイシヨイシヨと門に戻る。頑張れよ、と笑いながら励ましをもらいそのまま家まで向かう。大きいほうの水瓶に中身を注ぎ込み、一息つく。そういえばどれくらい必要か聞くのを忘れていたな。ちょっと聞いてくるか。

「すみませ〜ん、クレアさん。今大丈夫ですか？」

家の中に声をかける。少しして返事があつたので家に入る。

「ちょうどキリがいいから休憩にしたわ。水汲みはどうだった？」

「問題ありませんでした。門の見張りをしてる方もいい人達でしたし」

「そう良かったわ。じゃあ昨日のお話の続きをしましょう」

「え、あの、まだ水汲みが」

「いいのいいの。急ぎじゃないから。一回分あれば昼食の用意は大丈夫よ」

強引に引き留められてしまった。またありがたいOHANASHIが始まるのか……

「それで昨日の続きというのは？」

クレアさんはすでに気合い十分でスタンバっている。

「昨日は神々が消えた話までしたわね？」

「はい」

「そして向かったさきが空に見える双子月なのよ」

なるほど、だから夜に見えると言っていたのか。しかし、

「月が二つあるんですね……」

新たな常識にカルチャーショックを受ける。しかも月にはウサギではなく神様が住んでいるのか……

「そうよ。で、これからが本題なんだけど、神々が地上から去ったときに他にも失われたものがあるの」

失われたものか。なんだろう。

「それって何なんですか？」

「『言語』よ。それもただの言語じゃなく神々が使っていた言葉。その失われた言語は光の女神ルナを表す月語と呼ばれているわ」

なるほど、ゲームでよくいう古代　語ってやつか。じゃあ今話してる日本語はなんなんだろう？聞いてみるか。

「それじゃ、今使われている言葉は？」

クレアさんは質問を受け、さらに目が輝く。ああ黙って聞いてたほうが良かったかな。でも一般常識を知るいい機会なのか。

「ふふふ。そう、今話している言語はその時代、神々と縁の薄かったとされる東方の国、ゲッコウを発祥とする言葉なの。月語が人々の記憶から薄れ、代わりに必要とされたために世界中に広まり、今では共通語になったわ。そして、月語と共通語の間にもう一つ。月語を辛うじて記憶に留めた人達によって作られたのがルーン語。私たちの名前を表したり、魔法を使うために利用されたりするわ」

なるほどなあ、日本語かと思っただけどやはり似て非なる言語なのか。ゲッコウってところは日本みたいな文化なのかもしれないな。そうかそうか。月語とルーン語と共通語か……名前を表すというと、アンナ、クレア、グラン、サント、トラン……カタカナってことなのか。ルーン語もわかりやすくいいや、魔法にも使えるしなあ。

……魔法だと!?

「クレアさん!」

「ひゃー!」

勢い余って身を乗り出す。驚かせてしまったようだ。

「魔法が使えるって本当に!？」

「え、ええ使えるわ。というかそのことについて話すつもりだったのよ」

「ん?どんな話なんです?」

「リュウジくん、出掛ける時に『ラジャ〜』なんていったじゃない」

「確かに言ったような……」

「あれ、共通語じゃなくてルーン語よ」

「へ?」

どういうことだ。共通語があって神様言語の月語があって、その間にルーン語があるんだよな。この場合変換すると

共通語・日本語(平仮名・漢字)、ルーン語・カタカナ、つまりその先は

英語・月語

なるほど、この世界は英語が落ちぶれて日本語の時代が来たのか。元の世界と似た言語が主力なのは嬉しいが、世界中で日本語が通じるってのが日本人として一番嬉しいな。

「あのクレアさん、ルーン語と月語って大きな違いがあるんでしょうか？」

英語をカタカナで読めるようにしただけならあまり変わらない気がするのだが。

「大きな違いどころか全くの別物よ！ルーン語が魔法に使われるのは話したわね？魔法についても知らないみたいだから教えてあげるけど、神々がいたころの魔法は今よりも遥かに優れていて、その理由が月語による魔法発動率なのよ」

そろそろ置いてけぼり感がしてきた。魔法があるよーと言われても使い方もわからなければ仕組みもわからない。

「すみません…魔法について全くわからないのもっと簡単なところからお願いします……」

「コホン。…魔法とは生命がもつ魔力を媒介に世界へと意志を伝え、思いのまま世界を改変する技術、をいうわ。簡単にいえば魔力を使って望んだ効力を得るということね」

「先生、魔法が使えるれば何でもできるんですか？」

「（先生…いい響きね）本質はそうなんだけど、そのためには方法に問題があります。それが先ほどの魔法発動率です。私たちの意志を世界に伝える際、ちゃんと伝わらないことには魔法は使えません。最も認識されやすいのが月語、ついでルーン語、最後に共通語ですが、月語とルーン語には大きな差があり、また共通語も発動補助程度の効力しか得られません」

「つまりルーン語で魔法を発動させるけど共通語はおまけなのかな？」

「そう考えるのが普通だけど、共通語には他の使い方があるのよ」

「他の使い方？」

「言語は世界に対しての魔法発動率に関わるけど、共通語はさらに伝える意志をより明確にするために使われるの。あなたの怪我を治したときもそうだったのよ」

傷がすっかりなくなってたのは魔法のおかげだったのか……

「その魔法というのが『クリアさん、急患だ〜！』……ちょうどいいわね。実際に見せてあげましょう」

玄関に大声をあげた人と、その人に支えられながら苦しそうにしている男性がいる。

「いったいどうしたの!？」

クリアさんが駆け寄る。

「村の外壁の補強をしてたんだが、老朽化してたのか、材木ごと崩れてきやがって、脚を挟まれたんだ」

そういつて怪我をしている男性のズボンの裾を捲ると、赤黒く変色した肌が見えた。

「ひどい内出血ね。骨も折れてるかもしれない」

「ぐづつ…いつ…てえ」

うめき声をあげる男性。

「リュウジくん、あなたは知らないかもしれないけど魔法というのは私たちの生活にとつてとても重要なもの…。ひどい傷には薬師の腕をもつてしても対応できないこともあるわ。そして、魔力は無限ではないの。いまから使うからよく見てるのよ」

クリアさんが男性の足に向かって手をかざす。そして力ある言葉が紡がれるのを目撃する。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒し給え：キュアウーンズ』

呪文とともにクリアさんの手が淡く発光し、男性の怪我に変化が表れる。まず赤黒い皮膚がみるみる健康な状態へ戻っていく。それと共に呼吸も落ち着き、怪我が確かに治っているのだとわかる。

「これでいいかしら。もう痛みはない？」

「はい、大丈夫です。どうもありがとうございました、クリアさん」

「お代は自警団の経費に上乘せしておくわね」

礼を言って帰っていく二人を見送って、クリアさんがこちらに向き直る。

「どうだったかしら？初めてみたんでしょ魔法」

「ええ、凄かったです。正直気持ち悪いくらいです……」

映像の逆再生をみて凄いなーと思うことはあるが、それが現実に体感できるところで行われると得体のしれない恐怖感もある。

「なるほど、面白い感想ね。今見せたのが信仰呪文よ。傷を癒す目的を持った呪文がキュアウーンズなんだけど、効果範囲を限定することで必要魔力をコントロールすることができるわ」

「今のは手が光っていましたが、共通語の『我が手をかざす』ってのが意志に反映されたんですか？」

「その通り。個体全部に作用するのが普通なんだけど、あなたのと きや今回みたいに、一部分がひどい怪我を負ったときはこうやって魔力の節約をしてるの」

「そうだったんですか」

魔法だけで全部治してるわけじゃないのか。それで薬師の技術も必要なんだなあ。だけど、今のでまた聞きたいことができたな。

「えっと、また知らない言葉がでてきたんですけど、信仰呪文ってなんですか？魔法を使う呪文を信仰呪文っていうんでしょうか？」

「半分正解、半分外れね。信仰呪文のほかに、魔術呪文があるのよ。その違いについても知りたい？」

知りたいかと聞かれて、考える。無用の知識なら別に聞かずとも問題ない。しかし、重要な点がひとつある。

「俺も魔法が使えるんでしょうか？だとしたら知っておきたいです」
クレアさんはこちらをじっとみて答える。

「魔力がある人なら誰でも魔法を使うことは可能よ。そして人に限らず全ての生命は魔力を持って生まれくる。だけど、リュウジくんは魔法を知らなかった。つまり魔法を使えない、使う文化ではないところから来たのよね？」

そのとおりだ。俺はこの世界で生を受けていない。生まれは地球で、そこには魔法なんてなかった。いや、確かに怪しげな儀式とか伝承とかはあったけど一般社会にはありえなかった。そして、意志を世界に伝えるなんて考えはどこにも存在しなかった。……おそらく、世界の仕組み自体が違うのだろう。そう考えると、俺は魔力を持っていない。魔法は使えない。

「昨日、神様のお話を聞いたときうやむやになっちゃったけど、たぶん俺はこの世界とは別のところから来ました。ちゃんと言ってますけど古代人じゃないですからね」

だから残念そうな顔をしないでください。このカミングアウトだって結構重要なことなんですから。

「俺の世界は魔法とは無縁とまでは言わないけど、あくまで空想の産物で、実際にはありえないものでした。だから、その世界で生まれた俺には魔力なんてないと思います」

「そうね、そう考えるのが妥当かもしれないわ。だけど、可能性に賭けてみるのも悪くないはずよ」

「なにか方法があるんでしょうか？」

「まあ試してみるのが早いわね」

「それはまたなんとも」

しかし、これで魔法が使えるようならこの世界でやっていく足掛かりになるかもしれない。いや、なってもらわないと困る。そう思った矢先、

「だけど、今のあなたには魔法を教えることができないの。正確には権利を持っていないといったところね」

いきなり問題が発覚した。

「えー、それはどういう……」

クレアさんは困った表情を浮かべ、こつ続ける。

「一番の理由は人材確保、ついで安全保障といったところかしら。ようは魔法を使える者を必要とする組織があるのよ」

「その組織って一体……？」

そして俺は、これからこの世界の争いに足を踏み入れる、最初の入り口の名前を知ることになる。

「『神に守られぬ残酷な世界の守り手（God・Unassistent・Illi・Land・Defender）』、通称ギルドよ」

第七話 クレア先生のパーフェクト教室

「ギルド……」

ギルド、中世において商人達が自分達の利益を確保するために発足した団体を指すんだっただけかな。

「ギルドとはその目的から冒険者ギルドとも呼ばれ、その下部組織として戦士ギルド、盗賊ギルド、そして問題の魔術ギルドがあるわ。そして目的は、神の直接的な加護が届かない世界で、魔物から生命を守ること」

そうか、この世界では利益を確保する以前に自分達の命を守ることが重要なんだ……

「リュウジくんが魔法を使うためには、魔術ギルドに加わり、承認されることが必要になるわ」

「わざわざそうしないとだめなんですか？」

「まあ、はぐれ魔法使いなんてのもいるけど、登録をする理由が魔物との戦いに備えるためというのが大きいわ。急な要請があったときに一人でも多く力がある人が必要なのよ。そのためギルド側は情報を管理しておく一環として、特殊な技能に優れた人材を発掘する意味も兼ねて、魔法を志す人には登録を義務付けているの。」

「そうだったんですか……」

「まあギルドの一員になれば、生活していく上である程度融通が利

くようになるし、組織の目的も理にかなったものだから登録すること自体は悪くないわ。私と夫もギルドに登録しているし……」

そういつて懐から免許証サイズの金属のプレートを取り出して見せてくれる。

「ほら、これがギルドに登録した者に与えられる証明書、ギルドカードと呼ばれているわ。これは自身の身分を証明することもできるし、ギルド関連の組織を利用する際にも役立つわ」

「じゃあ、クレアさんもグランさんも依頼を受けて魔物を倒してるんですか？」

「私たちも昔は冒険者として戦っていたわ。夫が戦士、私は魔法使いとしてコンピを組んでね。アンナが生まれてからは、母の跡を継いでこの村で薬師を始めたの。今じゃもうこの村の一員だから、冒険者に戻ることはないわね」

クレアさんはこの村出身で、冒険者の頃、夫であるグランさんと知り合い、寿退社みたいな形で故郷に戻ってきたらしい。冒険者としてはぼちぼちの実力で、この村の守護という理由で、ギルドから招集がかかったりはしないそうだ。つまり、力を示して有名になればなるほど、人々の期待と共に義務と責任がついてまわるのだろう。

「ギルドについては分かったかしら？あとはあなたの意思に任せるわ」

ギルドに登録すれば、戦いの技術を学び、命をかけた戦いに加わることになるだろう。もしくは、どこかの村に所属し商いを始めるか、誰かに雇ってもらうのが生きていく糧を得る手段になるはずだ。ギ

ルドに加入し、魔物を倒して富と名声を得るのは憧れるがリスクとリターンを考えないと。絶対条件は自分の命を守ること。逆にいえば、そのための自衛手段を確保することも必要になってくる。そして、手っ取り早く生き残る手段を得るにはギルドで魔法や戦闘の基礎を学び、死なない程度に鍛えてもらうことだ。魔法については、魔力がそもそもどうなっているのか分からないが、体力面で普通より劣っているのは漠然と分かる。なんせ生きていた世界の事情が異なるのだ。わかりやすくいえば、子供の頃から筋トレをするのが当たり前の人達の中に飛び込んだようなものだし。

いつまでもこの一家のお世話になるわけにもいかないし、何か自分に合った働き口が見つからない限りはギルドに登録することを目指そう。そう決心して、では肝心のギルドはどこにあるのか、という疑問がわく。

「クレアさん、俺、とりあえずギルドに登録するだけしてみます。魔法にも興味があるし、自分に何ができるかもわからないから。それで、ギルドに登録するにはどこに行けばいいんでしょうか？」

俺がギルドに参加する意思を聞いたクレアさんも、それが今の最善だと思っていたのか安堵の表情を浮かべる。

「ギルドは大きな街や村に行けば、だいたいは支部が設けられているわ。あいにくこの村にはないけどね。最寄りのギルドなら村を出て、街道から東にあるパールワットという隣町に行けばいいわ」

そういえば地理については東の果てに日本ぽい国があることしか知らないけど、一人の人間の行動範囲なんてたかが知れてるし必要になれば聞けばいいか。

「その隣町にはどれくらいかかります？」

「早朝に出発してちょうど昼頃って感じね。仮にすぐ出発したくても、明日まで待ってね。まだまだ教えないといけないことがあるし、アンナも寂しがるだろうし」

「わかりました。まだまだご教授よろしくお願いします」

「そうと決まれば仕事は休みね。さっそく続きを教えるわよ」

さらなるヒートアップを遂げるクリアさん。薬師の仕事は大丈夫なのか。

「あの、さつき休憩だって言ってますでしたか？」

「大丈夫大丈夫。町に卸す分はできてるし、急患でもこない限り問題ないわ」

「さいですか……」

クリア講師による一般常識講座の途中、アンナちゃんが帰宅した。グランさんはまた自警団の集まりに向かったようだ。夕方まで続けられた結果、さしあたって生活に困らないだけの知識を得ることができた。お金の数え方、国家及び都市の関係、魔物による治安の影響などといった内容だ。戦う上で重要になることがあるらしいが、それはギルドで直接聞いてこいとのこと。

順序立てて説明された内容はこのようなものだった。まず今いる場所について。ここは、大陸の東部で国家体制は共和国の形で、明確に権力は存在しない。大きな都市は自治領で、周辺の村と互いに協

力関係にある。国会のない日本のような状態かな。東海岸の港からは離島であるゲッコウに行けるのだが、船が魔物に沈められるかどうか運任せのため、交流が難しいようだ。そのほかにも、南部には古代に強大な魔物を打ち倒した英雄を王とした王国が、西部には小国家を併合した帝国が、そして北部には亜人の国家が存在するらしい。

お金についてだがギルドは全ての権力に対し距離をおくため、ギルドが主体に共通貨幣を生産している。そのため国ごとに貨幣が変化することはないが、国は一種類の名誉硬貨を作成し、それはギルドで一般貨幣に交換できる。貨幣の種類は、金貨、銀貨、銅貨が存在し、金貨が一万円、銀貨が千円、銅貨は十円程度の価値を表している。価値比率は金：銀：銅＝1000：100：1となる。先ほどの名誉硬貨は金貨の上の価値になるらしい。

そして魔物について。発生原因はよく分かっていないが、おおよそ無尽蔵に発生しているらしい。また、その死骸は利用できるものも多く、ギルドでは冒険者への依頼で討伐、護衛、探索、採取などを通じて、より安全な世界を目指している。古代遺産の優れたアイテムも存在し、単に魔物を倒すだけがギルドの仕事ではないところが重要だ。

グランさんが帰宅し、一家全員プラス俺で夕飯を食べる。必要な情報はあらかた集まったわけだし、明日にでも隣町に向かうことをみんなに話す。クレアさんには事前に話してあったし、グランさんも事情がわかっていいのか了承してくれた。だがアンナちゃんはこちらをじーっと睨みつけたまま何も言ってくれない。そして、そのまま自室に戻ってしまった。なぜに怒らせてしまったかわからず困ってしまい、クレアさんに助けを求める。

「あの、俺なにか怒らせるようなことしてました？」

グランさんとクレアさんは笑いながら、

「まあ寂しがつてるんだろつよ」

「そうね。お兄ちゃんができたと思ってたのに急に家を出て行くなんて言われたらね」

「あ……それは考えてませんでした」

日本でも親戚の子供達に会ったときも同じようなことが何度かあったのを思い出した。まさかアンナちゃんにお兄ちゃん認定されたことには気付かなかったが。

「ちょっと話してきます」

二階に上がり、アンナちゃんの部屋の前に立つ。

「アンナちゃん聞こえる？」

「……」

返事はないが、ちゃんと聞こえているはずだ。

「えつと……急にあんなこと言ってごめん。だけど、お別れなんてことはないんだよ。この家のみんなは俺の命の恩人だし、これからもお世話になるかもしれない。もしギルドに行って一人でやっていくようになるっても、忘れずに顔を出すよ」

残念ながら反応はない。あとはそっとしておくべきかと思って、そのまま自分の部屋に戻る。明日には機嫌直してくれれば助かるんだけどな……

第八話 旅立ちの日

side: アンナ

今日は朝からおとうさんと薬草集めに出掛けている。

秘密の場所も危険だから、一人でいけなくなっちゃったからおとうさんに付いてきてもらう。

森に深く入らないように、安全を確認しながら自生する薬草を採取してまわる。

おかあさんは家で調合作業をしてるから、リュウジさんの様子を見るようにお願いした。

やけにおかあさんの機嫌が良かったので、どうしたのか聞いたら、

「家族が増えたみたいで嬉しい」んだって。

そしたら、私のお兄ちゃんになるのかな。

一人っ子だった私はお兄ちゃんがどんな存在かわからないけど、あの優しくて私を助けてくれた人がお兄ちゃんになるのは、とても嬉しい。

一緒に遊んだり、勉強したり、また私を助けてくれるかもしれない。それに、彼の近くにいとなんだか気持ち安らぐのだ。まるでおかあさんみたいな優しい存在に包まれているような。

家に帰ると、昨日みたいにおかあさんが彼にいろいろ話をしていた。やっぱり当たり前のことを知らないみたいで、お金のこととか物の値段を聞いたりしてた。

昨日、遠くから来たっていったから、すぐいなくなっちゃわないか心配だったけど、いろいろ勉強してるってことはきくと、ずっとここににいることにしたんだよね。

それじゃあ、明日から『お兄ちゃん』て呼んでみよう。

驚くかな？喜ぶかな？できれば嫌がられないといいな。

ただどその夜、思いがけないことになった。

お兄ちゃんはこちらをでて、隣町にいくつて言い出した。

私たちの家をでて生活していけるように、ギルドに向かうんだって

……

私は何も言えず、ただじつとお兄ちゃんの顔を見ていたんだけど、泣きそうになるのが我慢できなくて急いで部屋に駆け込んだ。

そしたら、お兄ちゃんが追いかけてきてくれてドア越しに声をかけてくれた。

これはお別れじゃない、いつでも会える。

わかってる、わかってるけど、なんだか胸のもやもやが取れない。

別に離れたってお兄ちゃんはお兄ちゃんだ。私を助けてくれて、死にかけて、それでも私を大切にしてくれる。

そして思い出した。お兄ちゃんが怪我をしたとき、私が何を思ったか。

あ那时候私は……

「おはようございます」

居間にいくと、クレアさんがグランさんに弁当を持たせているところだった。

「おう、おはよう。俺はこれから出るから見送りできなくてすまんな」

「いえ、お気になさらないください」

村の近くに魔物が出たせいで、安全が確保されるまでは忙しいらしい

い。

「あの子、今日はまだ起きてこないのよ。拗ねてないでお見送りくらいついてあげればいいのに……」

「昨日のうちに、伝えたいことは言っておきました。きっと笑って見送ってくれますよ」

やれやれといった感じのクレアさんだが、すぐに本題に戻る。

「さて、出発にあたってお願いがあるわ。バルワットには馴染みの薬剤店があつて商品を卸しているのだけど、注文を受けてる分を届けて欲しいの」

そういつて共通語（俺にとって日本語）が書かれた紙と、ナップサック程度の袋を渡してくる。

「構いませんがこの紙は？」

「注文書よ、その紙と袋を渡せば報酬が貰えるわ」

「分かりました。ギルドに向かった後、お返しにきます」

半日かかる距離らしいが恩人からの頼みを断る理由にはならない。

体力が心配だが最悪お金を借りて次の日に帰ろう、と考えていると、

「いいのよ、急がなくても。家計には余裕があるし、リュウジくん
の好きなときにまたこの村に来たときで」

「それって……」

「どこまでやれるか頑張ってみなさい。もちろんいつ帰って来ても構わないけどね」

つまりこれを俺の支度金にしてくれると言っているのだ。もしかしたらもう戻らないかもしれない自分に。俺としては世話になった恩を忘れるつもりはないので杞憂だが、今後何かあるかわからない。クレアさんの心遣いに感謝し、ちよっぴり気合いが入る。

「それじゃ。行ってきます。お世話になりました」

頭をしっかりと下げる。そして、玄関の扉を開けようとしたところで大きな声をかけられる。

「待って！」

「アンナちゃん?!」

階段を駆け下り、背中にリュック、腰にポーチ、遠出用のしつかりとした衣装に身を包み姿を現したアンナちゃん。見送りに来てくれただけとは思えない様子に面食らう。

「えと見送りありが……」

「私も一緒にいく！」

「…えっ!?!ど、どういふこと?」

もしかや心優しいアンナちゃんは、俺を心配して道案内をかってくれるとでもいうのか。

「おかあさんいいでしょ？」

「いいでしょ、ってすっかり準備してるのを見ると断っても聞かないでしょうに」

アンナちゃんの問いに半分笑いながらクリアさんが答える。

「アンナちゃん。道案内役ありがとう。でも家の手伝いとか大丈夫？」

「何いつてるの？道案内はするけど、家の手伝いはいいわ。だってしばらくは帰らないんだし」

一緒に行くってそっちの意味か！

「一緒になって急にまた……」

「昨日、ドア越しに話してくれたから。会おうと思えばいつでも会えるって。けどね、そうじゃないって思ったの」

こちらを真剣に見つめていう。その真剣さに息を呑む。

「森で手当したとき思ったの。絶対にこの人を死なせはしない、私の命の恩人が死ぬなんて許せない。何がなんでも助けるんだって。そのときはちゃんと助けられたけど、心配なの。この家を出て行って、昨日までこの世界のこと何も知らなかった人が生きていけるのか」

はっきりと言われるとあまり自信はない。頼りにできるのはこの家族しかないのも事実だし。

「だから、私が近くにいてあげる。大したことは出来ないかもしれない。だけど、私の知らないところで、お兄ちゃんが危険な目に合うのはだめなの！」

想いを爆発させて宣言したアンナちゃんの言葉。頼りない俺を見てられないとも取るのが普通だろう。そして頼りないのは自覚している。今俺が取る行動は一つしかない。

「クレアさん、本当にいいんですか？」

「仕方ないわ。大切にしておいてあげてね。あと、いつでも言ったくなるべく早く顔を出すように」

「はは、わかりました。…じゃあアンナちゃん。これからよろしくお願いします」

「うん！」

アンナちゃんがニツコリと笑って返事をする。今後の身の振りが決まるまでアンナちゃんと一緒に生活することになるのかな。宿の手配とか大丈夫かな……

「そうそう、住所なら心配しないでいいわよ。例の薬剤店に住み込みで働けばいいから。本当はリュウジくんの部屋だけ借りる予定だったけど、二人でも問題ないでしょうし」

「ほんと何から何まですいません……」

その薬剤店の空き部屋を借りて、俺はギルド通い。もしくは、何か

職探し。アンナちゃんは住み込みのアルバイトみたいになるのか。
……拠点が隣町に移っただけで相変わらずお世話になりっぱなしな
気がする。

「では、これで出発します。グランさんにもよろしくお伝えくださ
い」

「ええ。二人とも元気だね。アンナも満足したら帰ってくるのよ？」

「はい」「わかった」

短い間だがお世話になった家を後にする。今日も見張りをする自警
団の二人にも挨拶し、別れの言葉を告げる。

「何もないとこだけど、また来いよー！」

「どうぞお元気で」

二人に見送られ村を出る。さあ、隣町のパールワットまで出発だ！
多少舗装された街道を目指して歩き始めると、アンナちゃんから声
をかけられた。

「あの、リュウジさん」

「ん、なに？」

「えつとですね…これからはお兄ちゃんて呼んでいいですか？」

「お兄ちゃんか。うん、いいよ」

年齢的にもそれくらい離れてるし、生前妹がいた身としてはあまり違和感はない。家族を思い出し、俺が死んで迷惑かけたなと少し後悔する。

「では兄妹らしく、私のことをアンナ、って呼んでくださいね、お兄ちゃん」

「う、わかった。えと…アンナ？」

「はい！これからよろしくお願いします、お兄ちゃん」

義兄弟の誓いならぬ義兄妹の誓いか……てことはあと一人枠があるな、なんてことを考えながら再び歩き始める。新しくできた小さい妹に、あまり迷惑かけないように頑張らないとな。

隣町そしてギルド。不安だけどアンナがいてくれれば何とかなる気がする。そして、そういえばアンナが出て行ったことをグランさんはどう思っただろうとふと思った。

第九話 隣町パールワット

あれからしばらく歩くと、地面が多少舗装された場所にでた。舗装といってもコンクリートとか、ましてや石畳ですらなくただ草が生えていない程度だ。道中、分かれ道があつたりしたが東へと迷わず歩く。少し気になったのでアンナに聞いてみる。

「なあアンナ。この分かれ道の先はどこにいくか知ってる？」

「あつちの道をいくと、コズという村がありますよ。果物を栽培しているのが特徴ですね。たまにおとうさんが買いに行っていました」

果物というと林檎とかをイメージするけど、この世界の果物はどんな味がするのか興味があるな。町にいけば手に入るのだろうか？食料事情も気になるところだ。現代みたいに豊富な調味料や保存料とか存在しないのは、クレアさんの料理から想像できる。料理は確かに美味しいのだが、それはあくまで素材の味と料理の手際の良さからくるものだ。味噌や醤油など、親しんだ味はこちらには流通していない。もしかしたらこの世界の日本ポジションのゲッコウにいけば近いものは見つかるかもしれない。……あれ、でも味噌醤油の発祥って日本で合ってるのか？

アンナといろいろ話をしながら、1時間ほど歩いただろうか。話の内容は専ら世間話、主に俺の教養のためだが。そして、だんだんと景色が変わってきたことに気付いた。

「木が少なくなってきたな。森を抜けるのかな」

「このあたりからは草原が広がってますね。もうしばらく歩けば町

が見えてくると思います」

アンナは両親と何度か隣町に来たことがあるとのこと。これから向かう薬剤店の主とも顔見知りだそうだ。

「そのお店の人ってどんな人なの？」

「おかあさんの友達で美人な方ですよ。冒険者の頃から付き合いがあつたって聞きました」

「もしかして、その人も元冒険者？」

「はい。リゼルさんっていうんですけど、とっても強かったらしいです。これはおとうさんから聞いたんですけどね。何回か大ゲンカしてひどい目に遭つたって」

「グランさんと喧嘩して、いい勝負するの……」

なんか凄そうな人だな。性格わかんないからどうともいえないが、うまくやっていけるだろうか。これから会うその女性のことをあれこれ想像していると、

「あ、見えてきました。あれがパールワットですよ、お兄ちゃん」

言われて前を見る。見えない。目を凝らす。……見えた。かなり遠くにだが。そうか、もうしばらくでつくんじゃないかと、見えるっていつてもんな……

「あはは……まだ結構あるんだね」

「そうですか？お兄ちゃんと一緒にだとすぐついちゃいそうだけどもあ」

話しながらだと退屈はしないけど、歩き通しだと足腰に負担が来るよ……。ギルドで働ける以前の問題として、体力作りが必要になりそう。それに話自体も、今は教えてもらうことがたくさんあっていいけど、それが終わると話題に困る。ただでさえ話題を見つけないのが困難なのに、ましてこの世界でのコミュニケーション力なんて全然身につけてない。アンナといつまでも仲良くしていければ文句ないけどな。

「まだ時間はあるそうだし、今度はあの町について教えてもらっていいかな？」

「うん。何が聞きたい？」

「うーん。建物の場所とかは、直接探したほうがよさそうだし、どんなものがあるか知りたいね」

「そうだね。おにいちゃんがいくギルドでしょ、それに最初にく薬剤店、町の入口近くには宿屋があつて、大きな食堂もあるね」

「ほうほう」

「あと、まわりの村でとれた物を集めて販売している市場があるよ。それと領主様が住んでるおっきな館も」

へえ、市場か。なにか売り物があれば利用できそう。まあお客さんとして顔を出すくらいだろうけど。

「わかった。他にもいろいろ教えてな？」

「はい」

魔物との遭遇もなく、途中馬車と一度すれ違った程度で、ようやく町の入り口にたどり着いた。町には8mほどの外壁が備わっており、出入り口は制限されている。この門は幅5mくらいで、横に衛兵の詰め所も見受けられる。ここにも見張りが立っていて、その格好は体の要所を含めた広い範囲を鈍い色の鉄製の防具に覆われ、如何にも衛兵という気配を漂わせていた。顔が分かる距離まで近寄ると声をかけられた。

「ようこそ、バールワットへ。お二人は近くの村の人かい？そつちの君は東方の出身のようだが」

おや？東方って単語がここで出るということは、やはり黒髪は珍しいのか。困ったな。そんなやつが急に村に沸いたなんて少し怪しく思われるか……

アンナにチラリと視線を向けると、任せてと言わんばかりに一歩前に踏み出した。ここはアンナの機転に任せてみよう。

「はい、私はラピの村から薬剤を届けに来た薬師です。この人は私の村に滞在されてた商人の息子さんなんですが、先日現れた魔物に襲われた私を助けようとして……」

そうきたか。いや無茶振りじゃないかこれ。えーっと、子連れの人人が不慮の事故で亡くなつたと、あと俺は商人の息子か。アンナを助けたときの俺が父親の設定か。じゃあ、俺がこなす役割は……

「私、この少女の村にてお世話になっておりました、リュウジ・キラタニと申します。父のツテもなく商人として生きていけず、また父の無念を晴らしたく、冒険者になろうと出向いた次第です」

「それは…、なるほど商人の。ご親族の勇氣に敬意を表します。つらいでしょうが、冒険者になろうと決意されるとは。一人の男として応援します」

「ありがとうございます。立派な父に負けぬよう頑張りたいと思います」

「冒険者を始めるとなるとギルドに登録なさるのですね？ギルドの場所をご存知でしょうか？」

「いえ、よければ教えていただきたいです」

「ここから見える大通りの先に、棘のついた盾をあしらった看板を掲げた建物があります。勘違いされやすいのですが、冒険者ギルドは盾の看板を、戦士ギルドは剣の看板を掲げております」

「わかりました。盾の看板ですね」

「ええ、ではご健闘を」

「どうもありがとうございました」

一連の会話をこなし、門を抜ける。見張りの方に声が届かないあたりまで歩いてからアンナに話しかける。

「さっきのは緊張したよ。なかなか際どい振りだったね」

「そう？お兄ちゃん完璧に役になりきってたと思うけど」

「ああいう状況はいろいろ経験してるからね、知識の上でだけ。今後は打ち合わせなしにはやらないでくれると助かる」

「はい」

「さて、それじゃリゼルさんのお店に向かおう」

「お店は宿屋の裏通りにあるよ。ついてきて」

アンナの案内を受けて家々の間を歩く。やがてアンナの家で嗅ぎなれた匂いがしてきた。ついたよ、というアンナの声に答えその建物を見る。二階建てで周囲の家とあまり変わり映えしない。これからお世話になる大家さんとうまくやれますようにと祈りながら、その家の扉をノックした。

第十話 冒険者ギルドへ

「はーい、どちらさま？」

芯の通ったハスキーな声と共に扉が開けられる。顔を出したのは、金髪ロングの女性で、クレアさんに負けず劣らずの美人だ。クレアさんはお母さんオーラが出ているが、この人はまだお姉さんで通じるだろう。こちらを見て一瞬怪訝な表情を浮かべるが、俺のすぐ後ろにいたアンナに気付くと途端に笑顔になる。

「あーら、アンナじゃない！よく来たわね。今日はお母さんと一緒にじゃないの？」

と凄い速度でアンナに抱きつき、辺りを見回す。なんだこのお姉さん、アクティブすぎるぜ……

「リゼルお姉ちゃん、お久しぶりです。今日はお母さん達はいません」

「あら、あのハゲがないのは構わないけど、クレアがないのは残念ね」

ハゲって言った！今ハゲって言ったよ！

「でー？こちらの冴えない野郎は一体何様なんだい？」

「えーっと自己紹介の前にこちらを。クレアさんからの預預かり物ですっ？！」

クレアさんの名前を出した瞬間、依頼書が奪い取られる。なんだよ畜生、速すぎて手が見えなかったぞ…怖え。

「なになに……。ああ、薬剤の搬入か。それにまだ付け加えてあるな……」

気付かなかったが、裏面にはクレアさんがなにやら書き足していたらしい。それを呼んでリゼルさんは溜め息をつく。

「はあ…アンナがうちに泊まってくのは大歓迎だが、なんでこんな奴まで面倒みないといけないんだい」

と言いつつ、こっちを見てくる。やべえ、フレンドリーとは無縁だよこのお姉さん。今すぐ追い出されるんじゃないだろうか。などと内心ビクビクしていると、

「リゼルお姉ちゃん、リュウジお兄ちゃんは私の命の恩人なんだよ！お願いだから仲良くして！」

とアンナが救いの矢を放ってくれる。そして、リゼルさんはなぜか絶望したような顔をしてアンナと俺を交互に見ている。

「あ、あの〜どうかしたんですか？」

「…ハッ、いや、な、何でもないよ。ちょっと嫌なことを思い出しただけさ。そうかい、アンナの命の恩人ねえ。そういうことなら多少の便宜を図ってやってもいいか」

何かのショックから立ち直り、そう言ってくれる。どうやら泊めてもらうことには成功したようだ。

「それじゃ空いてる部屋に案内する前に、持ってきた荷物出しな」

言われて、リュックから薬劑をまとめて出す。確認が終わったのか、リゼルさんが部屋に入っていった。戻ってきたときに、その手に何枚かの銀貨が握られていた。「面倒だから細かいのは、サービスしとくよ。とりあえず銀貨8枚、無駄遣いすんじゃないよ!」

薬代を受け取り、ポケットにいれる。その後、アンナは二階の、俺は一階の部屋にそれぞれ案内された。アンナが、俺も二階の隣室に泊まるようにお願いしたが、

「冒険者として働くんた。疲れきったやつに階段はきついだろ」

とのことで認められなかった。じゃあ一緒の部屋で、なんて言われたら俺の一生が終わりそうな気がしたので俺からもアンナを説得した。

とりあえず一息ついて、早速ギルドに向かおうと思う。時刻は昼過ぎ。先ほど町の中心から大きな鐘の音がしていた。時計はあるにはあるのだが、個人が所有するものは数が少なく精度が悪い。俗にいう時計塔がその町の時間を管理しているらしい。冒険者ギルドは、役場の受付みたいなもので、依頼の受注、斡旋、素材の売買まで何でも屋に近い形態で運営しているらしい。朝は依頼の斡旋、夜は依頼報告や素材の買い取りで忙しくなるからスムーズに登録したければこの時間がベストだとリゼルさんに教えてもらった。

「えっと、初期登録及び訓練に銀貨3枚を忘れず、しっかりと説明を聞いてくること、か」

俺は今、銀に輝く盾の真下にいる。冒険者ギルドを表す看板のすぐ真下だ。リゼルさんに言われたことを思い出し、勇気を出して扉を開け放つ。

「す、すいませ〜ん」

……反応がない。これは想定外だ。あれ？ここギルドだよ、空き家とかじゃないよね？気合いが空回りし、呆気に取られていると、広いロビーの向こう側、カウンターに見える場所で誰かが突っ伏している。……あれ寝てるのか？一応、声をかけようと近くに行く。

「あ〜起きてください」

呼んでも反応がないので、仕方なく揺すって起こそうと思い、肩に手をやる。そして頭をわずかに揺すった瞬間、

「ね、寝てません！だからお給料下げないで！」

「グハツツ！？」

いきなり顔をあげたため、俺の顎に華麗な頭突きが炸裂する。畜生、心配してやった礼がこれか！己の不幸を恨みながら痛みがひくまで地面にピクピクとうずくまる。

「あ、あ〜大丈夫ですか？」

そんな俺を見て声をかけてくる居眠り事務員。顎に受けた衝撃がひくまで、もうちょっと待ってください。

「はあ…酷い目にあつた」

「あう、すいません…てつきり上司が起こしにきたのかと……」

身長は小さく、アンナより少し大きいくらいか。髪はショートで、薄い水色の髪が綺麗だ。日本人の俺からしたら、西欧人に見えるこの世界の人は大概美人に見えるが、彼女は綺麗というより可愛いと表現すべきか。

「まあ悪気があつたわけでもなし、痛みもひいたからよしとします。で、ここは冒険者ギルドで合ってますよね？」

「すいません…。確かにここは冒険者ギルドですよ。私は職員のミルザと申しますが、本日はどのような御用でしょうか？」

「よかった。ギルドに登録したくて来たんですが」

「な、なんと！冒険者志願者さんでしたか！」

いきなりテンションをあげてくるのはなぜだ。志願者が珍しいのだからか。

「そんなに驚いて、志願者が珍しいんですか？」

「いえ、ノリで驚いてみただけです」

誰だよこの子可愛いとか言ったの。アホの子じゃねえか。……いや、アホの子だから可愛いのか？

「……まあいいか。それで登録の方は大丈夫ですか？」

「はい、ご覧の通り暇ですので早速始めましょう」

そういつてカウンターの下から冊子を取り出す。

「それでは説明させて頂きます。まず、ギルドの名称・及び目的についてですが」

「あ、知ってます」

先ほどのお礼に少しからかってやろうと茶々を入れてみる。

「あにゃ？なら飛ばしてもいいですね」

……いやよかないだろ！？そこ一番重要なところじゃないの！？だめだこの子、下手に弄ると不利益を被りかねん……おとなしく聞いているか。

「で、ですね。ギルドには関連組織として戦士ギルド、魔術師ギルド、盗賊ギルドが存在しております。あ、これも知ってます？」

「いいえ、全く知りません。詳しく説明お願いします」

とキツパリ言うと、残念そうな表情でこちらを見たあと手元の冊子をせつせとめくりだす。お前、やっぱりサボりたいだけなんじゃないかろうか。上司とやらに会ったら一言文句を言ってやろう。

「ええつとですね。冒険者ギルドは多岐に渡る業務内容のため、専門分野ごとに関連組織が存在しております。戦士ギルドは、冒険者の育成から武具の販売・強化まで、主に戦闘に関連する組織です」

「冒険者の育成ってどういうものでしょうっ」

「ああ、それは熟練した戦闘技術を広め、若手の戦力の増強を目的としたものですよ。戦士ギルド所属の人なら安い料金で参加できます」

「なるほど」

「では次に魔術師ギルドですが、個人の魔力を測定したり魔法の基本を学ばせることで強力な魔法使いを育成し、知識の収集により薬学や錬金術などの発展にも貢献しています」

目当ての魔術師ギルドは魔法学校みたいなものなのか？これなら魔力があればなんとかなりそうだ。

「最後に盗賊ギルドについては、泥棒集団ではなく、特殊な技術や情報を扱い、戦闘以外での補助を扱う組織です。中には非常に高額で取引されるものもあります」

盗賊ギルドはよく盗品を売りさばく場所ってイメージがあるけど、ここでは情報屋の側面が強いな。特殊な技術つてのが気になるけど、よくある鍵開けとか罫解除とかなのかな？

「以上の組織が冒険者ギルドの下位に存在しており、冒険者の基本は冒険者ギルドに登録後、自分に合った分野にも続けて登録ですね。登録料が増えますが複数の組織に所属も可能です。登録までは以上ですが、続けてギルドランクの説明に移ってよろしいでしょうか？」

「ギルドランクですか？是非お願いします」

「はい。ギルドランクとは主に冒険者の格を表す基準であり、依頼実績、ギルドへの貢献などにより左右されます。高位のランクになれば、組織での権限も増します。ランクはS A B C Dの月記号のどれかと1から5の数字で表記され、D5が駆け出し、S1が最高実力者、権限でいえば下っ端とギルドマスターの違いがあります」

「冒険者をやっているれば自然とランクが上がっていくんですか？」

「ランクの査定方法ですが、各ランクで1000P^{ポイント}を獲得したら昇格試験を受けることができます。これに受ければ晴れて次のランクになります。高ランクは実力に見合った報酬に加え、名声を高めることにもなるため、是非最高ランクを目指して頑張ってくださいね。まあ才能がないとA5になることも難しいですけど」

D5から始まってS1まで目指すと24回も試験があるのか。まあ才能なんてないし、冒険者やってくならよくてB1が目標かな。

「わかりました。他に聞いておくことってありますか？」

「あとはギルド加入の注意事項ですね。え〜と、ギルドは冒険者の怪我や死亡に対して責任を持たない、ギルドに不利益をもたらす者は警告のち追放、ギルドからの正式な依頼は断つてはいけない、などなど…」

「いやいやいや、省略しちゃだめですよそこ」

「うう、だって無駄にたくさん書いてあるんですよ！重要そうなやつだけわかれば問題ないです！」

「重要だから記載されてるんじゃない……仕方ない。ちょっと見せてく

「ださい」

駄々をこねるミルザさんから冊子をひったくるように奪い文章に目を通す。……確かに似たようなありきたりな内容だな。オンラインゲームでよく規約とか読んだけど、それとあまり変わらないかな。

「はい、ちゃんと読んだので大丈夫です。これで終わりならギルドに登録したいのですが」

「わかりました。では登録料として銀貨三枚いただきます」

銀貨三枚をポケットから取り出し、カウンターに置く。

「はい。ではついてきてください」

そういつて席を立ち、横にある扉から別の部屋に移動する。置いて行かれないように後ろを歩く。隣の部屋は広めの部屋で、地面に英語で掘られた魔法陣があった。英語もとい月語は失われたのではなかっただろうか？なぜこんなところに……

「来ましたね」

いきなり背後から、落ち着いた男性の声。ビビってその場を飛び退く。

「ああ、驚かせてしまい申し訳ない。私、このギルド支部の代表を勤めます、シグナムと申します。ギルドカード発行に立ち会いますゆえよろしく願います。ミルザくんは受付に戻ってくれたまえ」

現れたのはひよろりとした体格の男性。歳は四十代くらいか、よく

漫画に見る執事のような穏やかな感じがする。素敵なおじ様ってやつか。ミルザさんが一礼して部屋をでる。

「あ、はい。よろしくお願いします…」

しかし、立ち会いつて何かあるのかな。そういえばこの魔法陣ってギルドカードに関係あるのだろうか。

「それではこのカードを持ち、あの魔法陣の中心にお立ちください。カードは絶対に手放さないようお願いします」

差し出されたのは、クリアさんに見せてもらったのと同じカード。だが、名前など何も書いてない。触ってみてわかったが、プラスチックのような軽い金属でできていた。とりあえず言われた通りカードを受け取り、魔法陣の中心に立つ。

「よろしい。では始めます」

『神々の英知よ、我らを写す鏡の欠片よ、彼の者の真実を刻み給え：イノセントミラー』

シグナムさんが唱えた呪文に呼応して、足元に光が満ちる。その光はやがて光の筋になり俺の体を這いずるように照らしだす。初めて魔法を見た俺は、最前列でマジックショーを見たかのように感動しその光景に圧倒されていた。やがて光は体を通って手元に集まり、そのままカードに吸収されていく。光がおさまり、立ち尽くす俺にシグナムさんが声をかける。

「ご苦労様でした。無事ギルドカードの発行が完了致しました。どうぞご確認ください」

言われてカードを見る。左側に自分の名前、性別、職業などが彫り込まれ、右側には大きくD5と表示されている。

「ではギルドカードについて説明致しましょう。素材は魔力鉱を溶かし込んだ鉄でできており、軽く丈夫でかつ魔力伝導率に優れています。傷がつきにくいため多少は粗野に扱っても問題ありませんが、紛失にはご注意くださいませ。その際は再発行にお金がかかります」

特別な金属なのだろうか。じっくりカードを見てみると、裏面にも何か書いてある。アルファベットと数字が表のように分けてあつて、よく見るとそれはSTRやVITと書いてある。

「シグナムさん、この裏の文字と数字は一体何なんですか？」

どれも見慣れた単語であり、確かな期待を持ってシグナムさんに確認する。

「ギルドカードは、表には名前や職業、ギルドランクといった一般情報が。裏には個人の力量を表すための数値がステータスとして表示されます。一度作成されたカードは本人と魔力で繋がっており、所持していればそのつど更新されていきます。これは自身の適性を知る上でも参考になるので、よく見てみてくださいませよう」

やはりこれはステータス表なのか！スポーツテストや学力テストをしないで、自分の能力がわかるじゃないか！ああ…シャツルランでヒィヒィいいながら走ってたのを思い出しちゃった。

「STRは筋力を、INTは知性を、PIEは信仰心を、VITは耐久力を、DEXは器用さを、AGIは素早さを。そしてLUCは運気を表します。数値は0から100まであり、高いほど優れています」

るといえます。それから……」

英語を理解しているため説明は不要だったが、一応ウンウンと頷いておく。今は自分の能力を確認するのに夢中だった。予想通りといえばそうなのだが、筋力と耐久力、器用さと素早さがくそ低い。反して知性と運気は悪くないのだが、一番すごいのは信仰心だ。その信仰心なんだが……1と表示されていた。確かに異世界の神様なんて知らないから仕方ないといえるのか、この1もクレアさんの話を聞いたおかげなのだろう。

「もし、ちゃんと聞いておられますか？」

「は、はい！聞いてます！」

びっくりした。途中から全く耳に入らなかった、なんて言えずそう答えた。

「説明は以上で終わりです。何か質問はございますか？」

「いえ、大丈夫です」

「では、このあとは各ギルドで訓練を受けるのをお勧め致します。依頼は山のようにあるので、お急ぎにならずとも大丈夫ですので」

シグナムさんと部屋を出てロビーに戻る。受付にはミルザさんが、今度はちゃんと座っている。こちらに気づいて声をかけてくる。

「お疲れ様でした。これで依頼を受けることができますね。早速見

ていきます?」

「残念だけど、まずは魔術師ギルドに向かいたいんだ。場所を教えてもらっていいかな?」

「魔術師ギルドは、この通りを右に向かっていけば魔法陣を描いた看板が見えるので、そちらへどうぞ。あ、魔法陣は、ギルドカードを発行した部屋でご覧になりましたよね?」

「はい、それならすぐわかりそうですね。ではこれで失礼します」

魔術師ギルドの場所もわかったし、冒険者ギルドをあとにしようとするこ、

「あ、そういえば名前。良かったら教えてくれませんか?」

そう言われ、まだ彼女に名乗っていなかったことに気付く。これからお世話になるのだからちゃんと挨拶しておくべきだった。振り返り改めて自己紹介する。

「俺の名前はリュウジです。なれるかわからない魔術師志望ですが、よろしく願います」

「はい、リュウジさん。新人同士、これから頑張ってくださいませよ」

にこやかな表情で送り出され、これからのギルドでの活動に期待が膨らむのだった。

主人公ステータス表

リュウジ・キリタニ（桐谷龍司） 22歳 男

STR	30
INT	60
PIE	1
VIT	30
DEX	40
AGI	30
LUC	60

近接戦闘は苦手。異世界出身ゆえ信仰心が低い。ファンタジーな魔法にはゲームで慣れ親しみ、科学的な知識も多少あるため、魔法のイメージがこの世界の人間よりも遙かに得意。余談だが、信仰心は信仰呪文に、知性は魔術呪文に影響する。典型的な魔術使いになる可能性を秘める。

最初のゴブリン戦ではLUCの高さに助けられ、VITの低さゆえ死にかけた。

第十一話 魔術師ギルドへ

冒険者ギルドを出て、次は魔術師ギルドを目指す。自分のステータスを見る限り、知性と運くらいしか誇れるものがない。ゲームでいえば、知性は魔法攻撃力、運はクリティカル率とか確率調整な気がするが、実際にはどうなんだろう。あとでミルザさんに聞いて……いや、冊子を借りた方が早いな。とりあえずあとは魔力が備わっているか確かめないと。どうやら冒険者ギルドではギルドカードには魔力を表示できず、魔術師ギルドにて測定する必要があるらしい。シグナムさんの説明がうる覚えなので、まだ何か言っていたかも……

考えごとをしていると早いもので、目当ての看板を見つけた。魔法陣とさらにその中心に目が描かれた、少し不気味な看板だ。どうやらこれが魔術師ギルドの建物のようなのだ。

ギイと軋むドアを開けて中に入る。冒険者ギルドに比べて小さなロビーには紫色のローブを着た女性が一人。やはり受付は女性なのはこの世界もかわらないのか？

「ようこそ、魔術師ギルドへ。初めてみる顔ね。どんなご用件かしら？」

とりあえず魔術師ギルドにも登録しておかないとな。

「さっき冒険者ギルドに登録したばかりなんですけど、魔法に興味があつて参りました」

「そう……見たとおり新人さんなのね。ギルドカードを見せてもらっていいかしら？」

胸ポケットからカードを取り出し、彼女に手渡す。

「リュウジ・キリタニ。魔術師としての素質は高めだけど、信仰心が恐ろしく低い。これじゃあ魔術呪文専門かしらね」

また魔術呪文という言葉が聞こえた。クレアさんには聞けなかったし、ここで確かめておくか。

「あの、魔術呪文って何なのでしょう。信仰呪文というのもよくわからないのですが……」

「あら、系統をご存知なかったのね。魔法を扱うには二通りの方法があるのだけれど、一つは術者自身の意思とイメージで魔法を発現させる方法。これが魔術呪文になるわ。もう一つが、イメージしにくい効果を発現させるために、神々をお願いする方法。これが信仰呪文よ」

「神様をお願いするんですか？」

「ええ。信仰する神によって得意不得意はあるけれど、傷を癒やしたり運勢を変えたり、目に見えない現象を扱うことができるの。もつとも理解できれば同じ効果を魔術呪文で行使用することも可能よ」

理解できるってことは、体の仕組みや細胞のことを知ってれば回復魔法が使えるかも知れない。なんせ信仰心が1しかないから、耳を貸してくれる神様なんていないんだろうなあ……魔術呪文しか可能性が見えない。

「えっと、それで魔術師ギルドには登録してもらえますか？」

「まだギルドの説明もしてないのに、焦らないで。魔術師ギルドでは魔法の初歩的な訓練や錬金術の基礎を学べたり、魔法の発展を目指し協力することができるわ。魔法は高位の者になれば強力な力を発揮するため、魔法を使う者の情報を管理する組織でもあるわ。この説明を聞いて、所属する意思はある？」

「はい、是非お願いします。魔法を使えるか試したいんです」

魔法という可能性のためにここまで来たのだ。やめる道理などない。

「よし、それじゃあ魔力測定をしてカードに登録しちゃいましょう。これから別室で、魔力の測定を始めますがいいですね？」

「はい！」

「それではこちらへ」

促され、部屋を移動する。冒険者ギルドのときは魔法陣に出迎えられたが、今回もそうなのだろうか。廊下を移動し、部屋に入ると予想とは違い、小さな部屋の中に水晶のような丸い球が安置されているだけだった。

「ギルドカードには魔力値は記載されないので、しっかりと確認する必要があります。精神の成熟などによって魔力値が増大することもあるのです、定期的な検診をお勧めします。一応見届け人が必要なのでしばらくお待ち下さい。受付を空けたままにはできないので交代を呼んできます」

そう言うと紫ローブの女性は俺を置いて部屋から立ち去った。見届

け人というのも情報統制のために必要なんだな。待つてる間暇だし、気になる水晶に手を伸ばしてみる。見た目はよく占い師が持つてそうな外見で、大きさはボーリング球くらいある。重いのかな、と思つて両手で支えようとした瞬間、部屋の扉が開けられると共に、目の前に真つ白な光が現れ両目を焼かんばかりに照らした。

「うわっ!？」

焦つて手のひらを離す。雷でも落ちたような光だったが特に変化はなく、入ってきた人も気づかなかつたようだ。

「まったく。研究の最中に呼び出しやがって……。おたくが測定希望者かい？見てやるからさっさと水晶を両手で持ちな。あ、持ち上げる必要はねえぞ。触るだけだ」

今度は緑のローブを着用した男性だった。眠たそうなだるゝい表情をしながら作業の説明をしてくれる。しかし、両手で触るのはさっきやつて、凄い光が発生したような……

とりあえず言われた通り水晶に手をやるが、なんだか最初よりくすんだ光がでているような気がする。それを見た男は、

「グレイライトか、つまらん。見届けは終わったから俺は戻る。聞きたいことがありゃ受付にいるローザに聞きな」

と言い残し、さっさと帰つてしまった。……とりあえず男性がいったグレイライトの意味を聞きにロビーに戻ろう。

「それで、グレイライトって言われたんですが」

受付に戻って、新たに魔術師ギルドに登録した証が刻まれたギルドカードを受け取るついでに質問する。

「魔力値を計ったときに生じる色や輝度によって、名称が付けられるのよ。くすんだ白い光はグレイライト。ハッキリいえば魔力値としては最低クラスね。」

「最低クラスですか……」

宝くじを買うようなものだと思ってたが、どこか期待していた分残念だ。

「まだ駆け出しだから、可能性がある分悲観しなくていいわ。一応言っておくと、グレイライトの次はブルーライト、イエローライト、レッドライトと変化して輝きが増して行って、確認された最高峰クラスのピュアライトも存在するわ。ブルーライトくらいなら可能性はあるし、気を落とさないでね？」

慰められたが、やはり天性の才能というか生まれ持ったものが大きいのは仕方ないことなんだろう。まあ、魔力がゼロでないことは確認できたし、次は魔法の使い方だな。

「わかりました。頑張ってみます。それで、早速魔法の使い方について教えてほしいのですが」

「ええ、わかったわ。それじゃあ明日、朝9時の鐘がなるころにまたいらしてください。簡単な座学と昼から実習を行いますので」

「了解です。では失礼します」

魔法の講義を受けれるのは、かなりありがたい。魔術師ギルドを設立した人に感謝だな。次は明日の講習の結果を見て、魔術師の実力を考えてから身の振りを決めるとしよう。

魔術師ギルドを後にしてリゼルさんの店を目指す。気づけば、夕日が見えお腹も減ってきた。早く帰って晩御飯をいただくとうしよう。

side:ローザ

久々に新しい子が来た。ステータスと魔力値が釣り合っていないのが残念だけど、今後に期待するしかない。明日の講習に備えて資料をひっぱりだしとかなきゃね。

受付の込み合う夕方も過ぎ、あたりがすっかり暗くなるうとした頃、廊下を歩いていると部屋から光が漏れてることに気づいた。

「あら？測定室に誰かいるのかしら」

うちの誰かが使ってるのかもしれない。戸締まりをしっかりしてくれるなら問題ないし、そのときは気にせず部屋を離れた。

次の日の朝、講義室に資料を運び準備をしているとギルドの研究者の一人が訪ねてきた。

「なあ、さっき魔力測定器を使おうとしたんだが、曇ったままで光らねえんだが壊れてないか？」

「えっ？曇ってるってどういことよ」

「いやな…触ってもないのにうつすらと曇ったままだし、いざ触っても反応しねーんだわ。予備のやつ倉庫から出しといてくんねえか？」

「そういつことならいいですけど……」

「おう。じゃあよろしく頼むわ！研究室にいるから、準備したら呼んでくれよな」

じゃ、と言い残し去っていく。一体いつから壊れてたんだろう？昨日新人の測定のときは問題なかったみたいだし、もしかして昨晚の明かり……

いや深読みは意味ないわね。わざわざ機材を壊す人なんていないだろうし。はあ、余計な仕事が増えちゃった。九時の鐘が鳴る前に終わらせないと。

第十二話 魔法使い始めました

「それで、ギルドには無事登録できたわけだ」

「はい。いろいろ説明が多かったけど、なんとか」

「おめでとうお兄ちゃん！これで一步前進だね」

リゼルさんの自宅で夕食を取りながら、ギルドでの出来事を話す。リゼルさんは料理は苦手らしく、アンナが来たおかげで美味しい料理が食べれると喜んでいた。

「しつつかし、ステータスの割りに魔力が絶望的だねえ。その辺の課題をクリアしないと魔術師としてはつらいよ？」

「やっぱりグレイライトだとだめなんでしょうかね……」

「ん〜説明されたるうけど、魔法を発現させるイメージとそれを伝える手段が洗練されればされるほど、魔力の消費量は減るからね。うまくやれ、としか言えないよ。あ、ちなみに私はブルーよりのイエローライトね。中の下つてところかしら」

「はあ……つまり俺は下の下だからやりくり上手じゃないとだめってことですね」

「大丈夫、いざとなったら薬師になればいいよ！私がつっかり教えてあげる」

「ありがたやありがたや……しくしく」

アンナの方は上手く手伝いをこなしているようだ。リゼルさんはアンナに激甘で、孫を可愛がるおば……なんでもない。とりあえず問題なく過ごしたとのこと。アンナの世間話に付き合っていると、気づけばだいぶ時間が経っていた。明日は遅刻しちゃいけないし、そろそろ休むとしよう。

「そろそろ寝ますね。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。もし寝過ぎしても叩き起こしてやるから安心しな」

「おやすみなさい」

こちらに来てから規則正しい生活をしてるなあ…夜は暗くて仕方ないってのもあるけど。明日は九時に集合だし、八時前には自然に目が覚めるだろうし問題ないかな。それじゃあおやすみなさい……

次の日、何事もなく時間通りに魔術師ギルドに到着した。九時を知らせる鐘の音がまだ鳴る前に受付を済ませてしまおう。

カウンターに座るローザさんに挨拶し、講義室へと案内される。黒板といくつかの座席があり、慣れ親しんだ大学の講義室を連想させる。講義室にはすでに何名か集まっていて、こちらを見る人もいれば全く気にかけない人もいた。

「さて、今日魔法の講義を受けるのはこれで全員ね。担当官を呼んでくるので少し待っていてください」

ローザさんが部屋を出て行く。講義が始まるまで、まだ時間があり

そつだな。他の人たちに興味があり、チラつと見てみる。部屋にいた人数は三人の男女。男二人に女一人だ。まず特筆すべきはその年齢だろう。皆、俺より若く、14〜16歳くらいに見える。冒険者を始めるのは、だいたいこれくらいの年齢からなのだろうか。だとしたら俺は相当ずれてることになる。気にすることでもないけど。これで年齢が近ければ話しかけられたりもするのだろうが、一人大人びている俺に話しかける人はいなかった。

少しして誰かが講義室に入ってきた。四十代くらいのおじさんで、なかなか渋いイメージを醸し出している。

「皆、おはよう。私が本日初級指導を担当するデビッドだ。新たな同士の誕生に立ち会えて光栄に思う。まずはじめに、名前と魔力等級を自己紹介代わりに述べてくれ。では、窓際のほうから始めてくれ」

魔力等級って何だ？と考えると、一番窓際に座っていた少女が起立してしゃべり出した。

「グリシーヌです。魔力等級はイエロー」

そつ言うと席に座つた。それを見て次の少年達の自己紹介が続く。

「俺はディオ。魔力等級はブルーっす」

「僕の名はアラン。魔力等級はレッド」

アランと名乗る少年の自己紹介で、担当官を含めた、俺以外の三人が驚いたような声をあげる。

「ほう、レッドライトか。これは逸材かもしれんな」

「レッド……」

「すげえな、最初からレッドかよ」

話をまとめると、魔力等級は最初に測定したあの魔力値のことだな。しかしブルーイエローレッドと揃い踏みか。俺だけグレイってのは残念だ。

「俺の名前はリュウジです。魔力等級はグレイです」

「よし、これで自己紹介は終わりだ。魔力等級に差があるからといって差別はしないから安心しろ」

とこちらを見ながら語るデビッドさん。まあレッドとグレイを比べたら凄い差があるのはなんとなくわかります……

「では座学から始めよう。わからないことがあればどんどん質問してくれて構わん」

それからしばらく、魔法についての授業を受けた。今まで聞いたことの復習であったり新たな知識を得たりと有意義な時間だった。

魔法とは意思の力で世界を改変する術である。魔力とは意思を世界に伝える糧である。これを基本として、魔術呪文と信仰呪文、さらに精霊呪文が存在すること。精霊呪文は召還魔法のように精霊を呼び出し使用することを示す。

次に、呪文について。言語体系については以前聞いた通り、月語が最高言語、ルーン語が中級、共通語が下級の位置付けだ。魔法を使いたいならルーン語をいくつも知る必要がある。日常的に利用され

るドアとかなら認知度は高いが、火、氷などは分かるが、火炎、凍結となった途端わからないらしい。なんだか日本の年寄りみたいな語学力だ。うちの祖母を思い出した。アイスはわかっててもフリーズはわからない。ファイアはわかっててもフレイムはわからない……呪文と魔力の関係だが、簡単に表すと呪文は魔法の設計図であり、明確であればあるほど効果が高い。そして魔力は設計図を書くためのインクだ。魔力が高ければ、多少あやふやな設計図でも輪郭がハッキリするためカバーできる。もちろん設計図を読み取り実行するのは世界そのものだ。信仰呪文は、神様に設計図を作成してもらう分、魔力の消費量が増えるが、魔術呪文は完全に己の力量が試される。

最後に魔力の扱いについて。魔力はインクだと先ほど言ったが、その使い方は言葉に乗せるイメージらしい。具体的には、明確な意思を持って発声することで、言葉は魔力を伴う呪文となり、魔力が消費される。じゃあ寝言で魔法が発動したりするのかと聞いてみたが、よほど意識がハッキリしていないと無効みたいだ。が、過去に発動した実例が存在することのこと。

ここまで教わって、質疑応答の時間や休憩を取ったりしていると昼になった。

「よし、では昼休みを挟むとしよう。午後からは実際に魔法を扱う。飯食って気合い入れとけ」

ギルドには職員が利用する食堂があり、一般人も利用可能なのでそこに案内された。他の三人はすでに打ち解けたようで同じテーブルに座るみたいだ。

「おばちゃん、この日替わり定食お願い」

「あいよ。銅貨十枚だよ」

「ほい」

「テーブルで待ってな。出来たら呼ぶよ」

とりあえず料理ができるまで適当な席で待つか。そう思っていると先ほどの三人に声をかけられる。

「なあアンタ。一人なんだろう？俺たちと一緒に食おうぜ」

確か、アラン…じゃない、ディオと言ってたな。

「いいの？」

「なに遠慮してんだよ。みんな初対面だし、同じギルメンだろ。いいからこいよ」

促され同じテーブルにつく。

「で、リュウジは少し歳上みたいだけど敬語使うほどじゃないよな。俺今16だし」

「まあ俺は気にしない方だからいいけど」

「だよな！ほら言った通りだろ？意外と親しみやすいタイプだって」

「……意外」

「ディオの言うとおりであったね。ごめんごめん」

「どうやらディオの提案で招いてもらえたようだ。少し感謝。」

「しかしグレイかぁ。俺たち三人とも魔術師目指してるんだけど、リュウジも魔術師志望？難しいんじゃないか？」

「そうだね。魔力が低いというのは大きな課題になりうる」

「レッドのアランが言うのは嫌み……？」

「あはは。確かに魔力は低いけど、力仕事も苦手だからね。せめて体を鍛えるまでの繋ぎにでも思ってたんだ」

「なるほど。では僕からも聞きたいのですが、その年齢まで冒険者以外のことをやっていらしたのですか？」

「うん、何をやっていたか、ね。アランの質問に正直に答えていいかな。嘘はつきたくないし。」

「最近まで学生をやってたんだ。今は働き口を探してる」

「ほう、一体何を学ばれていたか気になりますね。その歳の学者といたとなかなかの所におられたのではないでしょうか」

「……え？どういう意味だ？もしかして学者って珍しい？」

「い、いや大したことじゃないよ。他にすることがなかっただけだし」

「では何をなさっていたかだけでも」

アランがしつこく聞いてくる。興味があることには妥協しないタイプか！適当にはぐらかすしかないか。何言ってるかわからないだろうし。

「え〜と、ファイナンスとかマーケティングとかアカウントとか…」

三人の顔が固まる。やっぱりわかんないよな〜現代の学問は。いや、古い時代からある学問だし、専門職になら通じるかもな。しかし、それは見当違いで大きな失敗をしたことに気づかなかつた。そして、次の一言で自分の失敗に気づかされた。

「あなた……ルーン語を研究してたの？」

物静かにしゃべるグリシーヌが、ひときわ小さな声で聞いてきた。

「なるほど。それで納得しました。ルーン語の学者であれば魔力等級によらず魔法に携わろうとしても可笑しくありませんね」

「お〜リュウジって頭良いんだな」

「いや、研究ってほどじゃ」

「ご謙遜を。先ほどのルーン語はどれも僕が知らないものでした。いずれご教授願いたいものです」

お、俺はいつから語学研究者（しかも英語）になったんだ……いまさら経済用語ですなんていえないぜこれ。

「そのこのテーブルの連中、料理できたから取りにきな〜」

「ほら、料理できたみたいだし取りにいこう！はやく食べないとデビッドさんに怒られるかも知れないし」

ナイスおばちゃん。いいタイミング。これ以上の追求を避けるため、いそいそと料理を運ぶ。皆も食事が先決と考えて質問は終わった。

食事のあとは逆にこちらから皆のことを聞いてみた。どうやらこの世界は成人というか一人だちするのが早く、15歳ほどで職につき始めるらしい。冒険者見習いもこの時期から、と言われいかに自分が場違いかよくわかる。

「お、戻ってきたな。それでは実習を始めよう」

講義室にはすでにデビッドさんがいた。みんな席について集中して話を聞く。

「まずは簡単な魔法で、魔力の流れと魔法の発動に必要な意思を把握してもらおう」

『我が前を照らせ：ライト』

ぼうつと小さな光の玉が現れ宙に浮いている。電球のようなシャボン玉…いやシャボン玉のような電球？

「ライトとは光を表す。これは簡易的な光源を発生させる呪文で、暗闇などでの探索に役立つ必須呪文ともいえる。まずはこれを真似てもらおう」

やってみなさいと言われ、皆が呪文を唱える。俺もやってみるとしよう。

「我が前を照らせ、ライト」

……なにも起きない。横を見ると三人の前には豆電球が。おい、お前ら。あからさまに目をそらすな、傷つくだろう。

「ふむ。リュウジといったか。呪文はただの発声ではない。言葉に意思を込めるんだ。グレイライトでもライトの呪文は発動可能だ。しっかりとした意思を持つのを忘れるな。ではもう一回」

意思ねえ…なかなか難しい。現実にはできるはずもないことをやるんだから、常識が邪魔をしているのか？

非現実的といえば、夢か。夢の中ならなんでもできそうだしな。イメージするのは夢の世界、夢の中、夢の自分…と。

不意に不思議な光景が思い出される。真っ暗闇の中で、何か不気味なものに囲まれる光景が。

黒…闇…呪…魔…渴…壊…死………

自分の体が壊れていく、死んでいく。呪文が、呪いが染み込んで、精神が病んでいく。こんな光景をいつ体験したんだ。それともただの夢だったのだろうか？

最後に光に包まれてその光景は途切れた。その時、確かに聞こえた声。

『助けて』

「おい、どうした？どこか調子悪いのか」

「はっ！？だ、大丈夫です」

「そうか？じゃあもう一度やってみろ」

先ほどの光景がまだ頭にちらつく。あときの声は…そう、こんな感じで

『我が前を照らせ：ライト』

体から何か流れ出す感覚と共に目の前に光が灯る。

「あ、でた」

皆こちらを見て安堵したようだった。

「よし、全員できたな。魔力の使い方は覚えられたか？次は今の灯りを消してみる。魔法が持続している間はある程度操作が可能だ。光を消すイメージを持つんだ」

言われたまま、光が消えるところをイメージする。すると、スウーと全ての光は消えた。

「初歩的な魔法の使い方はこんなもんだ。次は上の句と下の句についてだ。下の句であるライトはそのまま、上の句を変化させることで魔法の性質を変化させてみるぞ」

そういつてデビッドさんは再び呪文を唱え始めた。

『我が命に従い道を照らせ：ライト』

光が同じようにデビッドさんの前方に現れる。しかし、その後デビッドさんの周囲をユラユラと漂い、本人から離れたところを行ったり来たりし始めた。

「今のは、出現した光を操作することを可能にする呪文だ。操作性以外にも、光量や個数なども変化対象にできる。上の句と呼ばれる部分は、イメージを確定させるために非常に重要だ。各々が最も使いやすい呪文を唱えるのが最善だが、とりあえず今は俺の真似から始めるように」

魔法の練習が続けられる。皆が先ほどの呪文を思い出し、一斉に唱える。

『『『『我が命に従い道を照らせ：ライト』』』』

それぞれの目前に、先ほどと同じような光の玉が現れる。デビッドさんはこれを動かしていたな。光を消すときもイメージが必要だったし、これも意思によって操作できるはずだ。

光を睨みつけて、動けと念じる。眩しくて直視は難しいため、実際はそのあたりを見るだけだが。最初だからか、光の動きは緩やかでゆっくりとしたものだった。

「なんか、デビッドさんみたく自由に動かないんだけど…どうすりゃいいんだこれ？」

「俺も、動きは速いんだけど軌道が定まんねえ」

デイオも苦戦してるようだが、アランとグリシー又はすでにある程

度コツを掴んだようで、自分達の周囲で光をクルクルと回していた。

「これが才能の差か……」

「ふう。リュウジは卑屈すぎると思うよ。これはあくまでイメージの問題さ」

「重要なのは…魔法を扱うときの意思」

この二人はしっかりしてるよなあ。しっかり魔法の扱いを心得ちゃってるよ。

「その通りだ。自分が魔法を使いこなしている場面をイメージしてみろ。あとは、いかにその理想に近づけるかだ」

デビッドさんのアドバイスも受けて、訓練再開。理想とする魔法の姿か…正直、光の玉が浮いてる時点でイメージは難しい。どうやって浮いてるのか、とか、移動するときの推力はどうするのか、とか疑問があるとうまくいかない。いっそ、電球に羽とスクリーンでもつけてみるか。いやそれは流石に魔法じゃねえな……うん。ユラユラ動く光…人魂？いやいやファンタジーなら、妖精……！！そうだ、ティンカーベルっぽい妖精ならイメージできる！

ようやくイメージが固まったところで、周りが静かなことに気付いた。

「ん？どうしたの皆？」

こちらを呆れて見ているディオに声をかける。ディオはなんともいえない表情で、

「いや…お前の様子が気になって見てたらよ、その」

「僕らも驚いて声をかけられなかったんですが、まああんな光景を見てしまうと…ね」

「…意外」

「ははっ、いや、確かに驚いた。飲み込みがいいといつかなんといつか」

またなんかやらかした…？いやでも今は頭抱えて悩んでただけなのに。

「一体何が…」

「リュウジが悩んでる間がスゴかったんだよ。ほら、今はフェアリの姿になってるけどその前が」

「見たことのない造形の羽やら靈魂のような不定形、ある種の曲芸にも思えますね」

目の前、視線を上に移すと淡い光を放つ人型があった。ああ、考え中のイメージが即座に反映されたのか。そのシルエットは妖精と呼ぶにふさわしく、二対四枚の小さな羽と体にフィットした薄い羽衣。直視できなかつたはずの明るさが、今は蛍光灯程度に収まっている。

「生命の形になぞらえたところが興味深い…リュウジ、早く動かしなさい」

「飛んでいるところがみたい」というグリシーヌのリクエストに答え、光の妖精に指示を出す。

「三回まわって…ジャンプ？」

思いつきで言ってみたが、彼女は指示通り、俺の周りをクルクルと周り、最後に俺の頭の上に飛び乗ってきた。

「おおっ…さっきまでとは使い勝手が全然違う」

最初に指示しただけで、その後は考えなくてもある程度持続する操作が可能だった。さらに軌道も速度も光の玉の頃より洗練されていた。

「なかなか見事な魔法の行使だ。生物の模倣と口頭による指示は別分野で見たことはあるが、こんな適用が効くとは」

「あの、結局のところこんなので大丈夫なんでしょうか？」

「ああ、もちろんだとも！本来は上の句の変化で目指すものだが、そこを意思の力で変化させたに過ぎない。難度は上がるが、あくまで正攻法だよ。まあ、強いて言えば、声に出さずとも操れるとよいな」

デビットさんからOKをもらい、安心した。俺の魔法を参考にしたのか、デイオは虫羽をはやした光の玉を飛ばしている。

「おお、すげ。ちゃんと動くようになったぜ」

デイトも何とかこの魔法をものにしたようだ。あの二人は困ってないようで、球体のまま自在に動かしている。うらやましくなんてないんだからねっ

しばらく魔法の詠唱と解除を繰り返し、ライトの呪文に慣れたころデイトが疲れを見せ始めた。それに気付いたデビッドさんが気遣う。

「む？デイト、大丈夫か？」

「はは、ちょっとだけ疲れが」

「うむ。すまん、やめどきを誤ったようだ。魔力的にリユウジを意識していたが、個人の技量差を失念していた。一度練習を切り上げて、講習の締めに入るぞ」

どうやら、グレイライトの俺が最初にへばる目論見だったが外れたらしい。普通なら魔力量が先に底をつくのは俺なんだが、やりくりがうまくいったのかな。妖精型にしてむしろ使い込んでる気がするのに。

「最後に、魔法のレパトリーを増やしてもらおう。部屋の後ろの本棚にある魔導書から呪文一つを選び、実演してもらおう。それが済んだら講習は終わりだ。以降好きなききにギルドで魔法を学べばよい」

デビッドさんはそう言って、本を取りに行かせる。俺も適当な魔法を探すとしよう。

何にしようか悩んでいると、デイトがアラン達に質問し始めた。

「な〜アラン、何やるか決まったか？」

「ん、そうだね。典型的だけど火を起こす魔法を使おうかな。火に関する本は…これだな」

「ふくん。じゃあグリシー又は？」

「…私は冷気を発生させるのを選ぶ」

「てことは、その持ってるのは水に関する本？」

「うん」

「そっか、じゃあそれ以外でか。火はアランに取られちゃったし、雷でも調べるかなあ…」

デイオは雷、アランが火、グリシーが氷か。ちゃんと、攻撃魔法らしい魔法ってのはあるんだな。他に残ってる本は何があるのやら。

「えつと、『土に関する魔法の影響』に『風に関する魔法の影響』…いろいろあるにはあるけど、まず一つ選べって言われてもな…」

うくん、必要なのは攻撃魔法というより便利系な魔法だよな。水や火も役立ちそうだけど、他にはなんかないか。

「『肉体に対する魔法の作用』『光に関する魔法の影響』ねえ……ん？肉体に対する魔法？」

一番興味深い本を手にとり中身に目を通す。内容は、人体の構造から始まり、腕力や脚力、まあ筋肉の話を経て、魔法による強化を試みるという物だった。自分なりに要約すると、筋繊維を強化、増幅

をイメージすればいい訳だ。細胞で考えれば、密度が重要か。この世界じゃ科学的な考えは進んでいないのか、そういう単語は載っていない。しかし、魔法はなんでもできる可能性があることは示してくれた。

「でもこれ、呪文が載ってねえ……」

隣でアランが手のひらに火の玉を出していて、後ろからは僅かながら冷気が漂い始めるまで本を読み進めてみたが、肝心の詠唱のキーワードが載っていない。ルーン語に該当するものが無ければ呪文の効果は薄くなる。一応マッスルって書いてあるが…これと訳で筋肉だよ。これは呪文には向いてないんじゃないだろうか。しかし、これは筋力不足の自分にはどうしても必要な魔法だ。どうにかして…いつそ自分で考えてしまおうか？

頭の辞書をひっくり返す。筋力、筋肉、力、腕力…思いつく単語をとりあえず英訳する。語呂の良さ、イメージのしやすさが魔法発動率に影響するのはすでに習った。あとは、実際に試すだけだ。

「よし…やってみるか」

呪文を構築し、心の中で反芻する。二度、三度と繰り返し、詠唱に問題ないことを確認して、今度は実際に唱える。

『我が力は増大す：マッスルインレンジ』

ライトの呪文のときのように、意思を持って、魔力を込めつつ詠唱する。呪文の詠唱の完全と同時に、体に違和感が現れた。服の腕部分を捲って確かめてみる。グツと力を込めると、明らかに以前よりも発達した筋肉が見て取れる。しばらくすると勝手に魔法の効果は

切れるのだが、今はとりあえずすぐに消してみる。すると筋肉がしばみ、見慣れた太さの腕に戻った。

新たな魔法の成功に嬉しくなり、早速デビッドさんと皆に報告する。

「デビッドさん、魔法の習得できました！」

「お、これで全員だな。早速見せてもらおうか」

デビッドさんの前で呪文を詠唱し、筋力は増加するところを見せる。

「この状態なら以前より重いものも持てるようになるし、いろいろ役立つと思います」

「ほう、あの本からこいつを覚えたのか。合格だな」

合格がもたらえたということは、これで講習は終わりか。

デビッドさんの話は続く。

「みんな終わったからいうが、実はあの本はどれも未完成なものな。限られた情報で魔法を成功させられたお前らならこの先もきつとうまくいくだろうさ。これをもって本日の初期講習は終了とする」

『ありがとうございます！』

あのあと、みんな基本的な魔法を成功させたことを聞き、お互いに情報を交換しあった。難しい魔法なら秘匿性もあるだろうが、こんな初級魔法であればそんな心配もいらない。

アランからは火の玉を打ち出すファイアーボールを。グリシーヌからは、氷の破片をぶつけるアイスエッジを。デイトからは微弱な電力を体に纏うエレクトリックスキンを教えてもらった。

そして、こちらは例の筋力増大魔法を教えようとしたのだが、認識の違いから上手く伝わらなかった。代わりに増大を意味するエンラージという単語を教えて、許してもらった。

「機会があれば会うこともあるでしょう」

「楽しかった。さよなら」

「じゃあな！元気でな」

別れの挨拶をして去っていく三人を見送って、家に帰る。今日はどうしても大きな収穫のあった一日だった。アンナとリゼルさんにも安心させてあげられるな。

夕方の鐘が鳴るのを聞きながら、そういえば魔力切れについて聞き忘れたことをふと思い出し、まあ切れないように気をつけるかと考えそのまま歩き続けた。

第十三話 お仕事しましょう

「良かったじゃないか。明日から冒険者の仲間入りができて」

晩飯をつつきながら、魔術師ギルドの講習が無事済んだことをリゼルさんに報告する。

「ええ。びっくりするような奴もいましたけど、俺でも平気かなって」

アランみたいな魔力量が高い奴がいても、筋力増大が可能な分、雑用仕事にも手を出せる。日雇いバイトなら見つかるだろう。

「で、お友達があんたより先に参っちまったとはね。やっぱりステータスの差かねえ」

魔力量に違いがあるはずのディオが、俺より先に疲労を訴えたことを話すと、ギルドカードに記載されたステータス表が関係していたのではないかとリゼルさんは言う。俺のギルドカードを見せると、その数値について話し始めた。

「筋力30ってのは男としてどうかと思うけど、知力が60あるのは誉めてもいいね」

「うぐっ…やっぱり30って低いんですか」

「ああ、それじゃ残念ながらそこらの男に捻られちまうよ」

うわー弱えー。筋トレしようしようと思いつつ先延ばしにしてた自

分が憎い。

「あんたくらいの歳で力仕事してりゃ40くらいかねえ。一端の戦士やってくなら50はないとだめだってグランのハゲが言ってたかな」

「一端の戦士で50……？」

あれ？じゃあ俺の知力60ってのは

「そうそ。だから知力だけ見ればなかなか優秀なのよね。これなら魔力低くても魔術師やってけるかもね」

な、なるほど。何が災いしたかは知らないが、この世界の知力に該当部分は意外にイケてるのか。

「お兄ちゃん、頭良かったんだ〜！それなら薬師のお勉強もカンタンだね」

「いや、それはちょっと勘弁してください……」

アンナごめん。思うに記憶力とかは大して変わんない気がするんだ。だから、薬草図鑑マスターさせるレベルはちょっとついていけそうにない。種類を絞ればまだ身に付くかもしれないが、とても本職にかなう気がしない。

薬師に乗り気でない俺を、恨めしそうに睨みつけるアンナ。でも、頬が膨らんで可愛く見えちゃ意味ないぞ〜。現にそれを見たりゼルさんが嬉しそうにしてるし。

「とりあえず、明日からギルドで依頼を探しながら魔法の練習を始めたと思います」

クリアさんからいただいた仕度金が尽きる前に、ある程度魔法を使いこなして働けるようにしておかないといけない。昔から無駄遣いはしないほうだったけど、最低限の生活費というノルマが存在する今、怠けてはいられない。

「最初のうちは無理しちゃだめよ？ギルドの依頼なんてピンからキリまであるんだし、一番報酬安いのを探すんだね」

「そうだよ！危ない依頼は絶対受けちゃだめだからね！」

二人に釘を刺されることになったが、俺だってそんな無茶はしたくない。雑用だよ雑用。冒険者らしい冒険なんて自殺願望がある奴がやればいいのですよ。

「わかってるさ。危なくない簡単なやつにするよ」

笑いながらそう言って、二人を安心させたつもりだった。

いや、まさか

漫画じゃあるまいし

死亡フラグなんてのがこの身に降りかかるとは……

確かに、今思い返せばあの会話の流れは振りだったのかもしれない。押すな押すなの要領で、簡単簡単セーフセーフいったからな……いや、でも、なんで、こんなことになっちゃったかなあ……

例の会話の次の日、さっそく朝一で冒険者ギルドの方に顔を出した。

「おはようございます」

「あにゃ、おはようございます。リュウジさん」

受付、ではなく横の掲示板らしき所で作業中のミルザに声をかける。何度みても水色の髪というのは現実味がなくてわずかながらテンションがあがる。

「それって、何してるんですか？」

ペタペタと画鋲で紙を貼り付けていくミルザさん。作業の手を止めずに答える。

「これはですね、ギルドに持ち込まれた依頼書を冒険者用に貼り付けてるんです」

ペタペタペタペタと手際よく依頼書をさばいていく。

「へえ、なかなか手慣れたものですね」

「にははは、こういうのは得意なんですよ」

まあ冊子とにらめっこしてるよりは、この作業の方が捗りそうだし、せつかくだし依頼について聞いてみるか。

「実は魔術師ギルドで魔法を覚えたので、簡単な雑用仕事を探してるんですが」

「へ？魔法を覚えたのに雑用なんですか？」

ミルザさんが、手を止めて頭に？マークを浮かべながらこちらに向き直る。

「覚えた魔法が力持ちになる魔法だったもので、そういう雑用を探したいんですよ」

「ああ、そういうことでしたか。わかりました。今探しますからちょっと待っててください」

「よろしくお願いします」

貼り付けた紙と手に持った紙の両方に目を通し、条件に合う依頼を探し始めてくれた。本来は自分で探すのがスジだと思ったが、初心者には初心者らしく甘えられるところは甘えておこう。

「あ、これなんていいかも！」

一分ほどでミルザさんは一枚の依頼書を取り出し、俺に見せてくれた。

「なにになに……『依頼内容：荷物運び』引越し作業の手伝いをお願いします。力仕事ができる方なら誰でも歓迎です、か。確かに問題なさそうですね。これお願いできますか？」

「はい、それじゃこの依頼書を持って行ってください。これが依頼を受けた証になりますから。あと、裏には依頼者の家までの地図が載ってますから、なくさないでくださいね」

「あ、ほんとだ。わかりやすい地図ですね」

「結構大きな町ですからね、きちんとした地図じゃないと迷う人が多くて……」

依頼書の裏にはこの町の一部だが、しっかりとした地図が載っていた。一部というのは、この冒険者ギルドから依頼者宅までの通り道周辺しか載っていないからだ。

「ミルザさん、ありがとうございます。今から行ってきます」

「初仕事頑張つて」

ギルドを出ると、ちらほらと仕事を受けに来た冒険者達とすれ違った。腰に剣を下げ、革鎧を身につけ、マントをなびかせる姿はまさに俺がイメージする冒険者だった。魔物退治とか探検とかするのかな、ちよつとカッコイいな……ま、俺は安全に引越し作業に精を出すと思いますか。

第十四話 お化けの出る家

「ここが依頼主の家で合ってるかな」

目の前には、周りの家と続いた西洋風の建物がある。

日本と言えば、長屋っていうのかな。

まあ一軒一軒が二階まであるから集合住宅っていったほうが豪華さに合ってるかもしれない。

依頼書には、依頼主の名前が書かれている。

勿論カタカナで。人名や魔物、たまに物をカタカナで書いたり発音するのは、カタカナ、つまりルーン語が真名を表すものと広まっているかららしい。

より世界に親密性のある言語を重要視するから、そういう文化になったんだな。

ああでも、ゲッコウ出身の人は日本語、つまり共通語で名前とか表記するから、地球のときとあんまり変わらないな。

ともかく、今回の依頼主、シオンさんというらしい、に会うとしよう。

トントンと二度ノックしてから、少し反応を待つ。誰かが出てくる様子はない。

改めてノックをしてから、今度は声をかける。

「シオンさん、いらっしゃいますか？冒険者ギルドのものですが」

すると、ドタバタという足音とともに、玄関のドアが開かれる。

現れたのはおそらく依頼主であろうシオンさん。

俺と同じ黒髪でセミロングの若い女性だった。

同じ年くらいだろうか、などと考えていたら、

「き」

「きっ」

「き、キターーーー!!」

何を言い出したかと思ったら、いきなり狂喜乱舞し始め、呆気にとられて何の反応も出来なかった。
なんとか我に返り、依頼主かどうかを確かめる。

「あ、あの、冒険者ギルドに依頼なさったシオンさんですよ？」

「助かった！助かった……ハッ」

その女性も落ち着きを取り戻し、ようやく話が通じるようになった。

「ええ、シオンは私ですが。あなたが依頼を受けてくれた冒険者さん？」

「はい、リュウジ・キラタニといいます」

「そう、私はシオン・コクヨウ。シオンでいいわ。よろしくね、リュウジ」

「あ、はい。よろしくお願ひします。シオン…さん」

自己紹介を済ませ、家にあけてもらう。テーブルに案内され、お茶をこ馳走になる。

「それで、依頼の内容についてなんだけど理解してるかしら？」

「理解というか、引っ越しの手伝いとしか知らないんですが……」

「まあ、そりゃそうよね。そう書いたんだから」

「はあ……」

「なんだか疲れる人だな……苦手な相手だ。」

「実はね、引っ越しは引っ越しんだけど、一晩泊まっていったほしいのよ」

「え？」

「実はね。最近、出るのよ。この家」

「え？」

「え？じゃなくて！そこは『何がでるんですか？』って聞きなさいよー」

「いや待つてほしい。俺の思考はその前の泊まる泊まらないのところ
で停止している。そんな状態で流れに乗れというのは酷ではないだ
ろうか？」

「ああ、えつと、で、何がでるんですか？」

「……幽霊よ」

「…え？」

「だーから、幽霊が出るのよ！」

俺が引っ越しにきて幽霊が出て一晩泊まる？いかん、混乱してきた。落ち着け俺。

「えーと、引っ越しをするのは幽霊がでるからですか？」

「そうよ」

「じゃあ一晩泊まる必要があるのは何故？」

「私以外に幽霊がでることを証明する人が欲しいのよ」

「あの…依頼にはそんなこと一言も…」

「いいじゃない、ついでよついで。それに幽霊がでることを証明するために冒険者を雇っても無効なのよ」

「無効？」

「この家に幽霊がでたら、解決費用は大家持ちになるの。引っ越し先も安く提供してくれるし。でもその条件として赤の他人が無償で協力してくれる必要があるのよ」

「あー、なるほど」

「夜中怖くて眠れない日々が続いて、もう限界なの！お願い、人助けだと思って！この通りだから」

人助けをしに来たのではあるが、この通りつて、片手で『ゴメンネ』的なポーズ取られても誠意が感じられねえ。その発言は普通、頭下げながら言うもんじゃないのか。

「はあ…まあいいですよ。てことは、今日は泊まるだけで、明日引っ越し作業ですか？」

「そうなるけど、二階の部屋、結構荷物あるから今から始めてもいいかもね」

「今からって、一人暮らしなのにそんなに荷物あるんですか？」

「ううん。今は両親が旅行に行ってるのよ。しかも旅行に出掛けてから急に幽霊が出るし……」

サイアクだー、と叫ぶシオンさんは放っておいて、今後の予定を立てる。一度アンナのところに戻って泊まりがけの依頼を受けたことを伝えるかな。それから二階の整理を始めよう。

「シオンさん、一度帰って仕度してきますね。そのあとから作業を始めようと思います」

「わかったわ。でも今更だけど、力仕事大丈夫？あまり力があるように見えないけど」

「見た目によらず力持ちですから」

心の中で涙し、早いうちに筋トレしようと思つて誓った。

「と言うわけで、今晚は帰らないから」

店の受付をしているアンナに依頼の説明をする。ふりふりエプロンが似合っていて、とても可愛らしい。リゼルさんの趣味だろうか……

「幽霊かぁ。魔物じゃないと思うけど、気をつけてねお兄ちゃん」

「わかってる。危ないことはしない。それじゃリゼルさんにもよろしく」

「いってらっしゅい」

あとはシオンさんの家に向かうだけだな。シオンさんの家の場所をまだ完璧に覚えてないため、行きも帰りもギルド経由だ。冒険者ギルドの前を通りかかるとき、声をかけられた。

「お〜い。リュウジじゃねえか！元気か？」

「デイトー！」

煤けたマントを身に付け、外出用の出で立ちになっている。つまり、これから外で活動することになるのか。

「デイトも依頼受けたの？」

「ああ、街中の警邏をやるんだ。なんでも最近盗みが横行してるらしいぜ」

「泥棒？」

「空き巣ってとこかな。犯人見つけたら追加報酬がでるから、怪しいやつ見つけたら連絡してくれよ！」

「それはいいんだけど、連絡手段がないよ。ギルドに言付けでもすればいい？」

「おま、ギルドに伝えたら意味ないだろ。町の入り口に、月熊亭って宿があるから、そこに頼む」

「わかった。じゃ、俺も仕事あるからまたね」

「おう。お互い頑張ろうぜ」

ディオと別れ、シオン宅へ急ぐ。それにしても空き巣か。うちはいつも誰かいるだろうし安心かな。

「ただいま戻りました」

「おかえりー。私これから大家さんとこ行くから、留守番してて」

会うなり出掛けるシオンさん。

そんな簡単に家を空けてもいいのか？

依頼で来るとはいえ俺は他人なのに。

別に何かするわけでもないけど。

とりあえず引越し作業進めるかな。

あ、でもダンボールとかないよな…この世界じゃ木箱とか樽で運搬

すると考えるのが妥当か。
使えそうな容器、あればいいんだけど。

第十五話 幽霊さんいらっしやい

二階に上がる階段を見つけ、二階にあがってみる。

階段をあがったところで振り返ると、隅に木箱が山積みされていたのを見つけた。この木箱を使えばなんとかなりそうかな。

木箱の目処がついたので、次は部屋に目を通す。

二階には二部屋あり、シオンさんの話によれば御両親が使っている部屋と物置代わりになっている部屋で中には各地を回って収集された品が置かれていて、さながら展示室の様相を見せていた。

「なんか博物館に来たみたいだな」

部屋には風景画が数点壁にかけられていたり、用途のわからないアケサリーのようなものガラスケースに入れられてたり。

これをいちいち運び出すのは大変そうだ。

美術品なんかは衝撃に弱いから、注意が必要だし。

タンスとかテーブルみたいなかいだけの運び出すには苦労しないんだけど、割れ物ばかりだときついだらうなあ……

それにしても、幽霊なんて本当に出るのかなあ。

幽霊物件とか日本じゃお祓いをしたりお清めするイメージがあるんだが、ここは俺の知らない世界だし、今は幽霊を信じてないけど、魔法やら神様が存在するとすると、心霊現象もあり得そうで困る。もしかしたら、本当にでるかもしれない。

そうになったら駆け出し冒険者にはお手上げだし、素直に引越して作業に精を出すでしょう。

『我が力は増大す：マッスルインラージ』

美術品の扱いがわからないため後回しにして、大まかな家具を運ぶ準備を先にする。

魔法の効果を確かめつつ、大小様々な家具をまとめていく。明らかに重たそうな物でもこの状態なら問題なく運べそうだ。

ギルドで使ったときは自分で効果を消したので、実際の効果時間はわからない。

せっかくだし実験もかねて大体の時間を計りながら作業することにしよう。

念のため重そうなものから先に手をつけておこう。

そのまましばらく細々とした作業が続き、魔法の効果が切れ掛かる度に新たに掛けなおし、おおよその時間を把握していくと五分程度で強化された体は戻ってしまうことがわかった。

幸いにもデュオがみせた魔力切れのような疲労状態にもならず、気づけば三時間ほど経っていた。

外は徐々に夕焼け空になり、少々お腹がすき始めた。

「ただいま」

晩御飯について思考が飛びそうになったとき、出かけていたシオンさんが帰ってきた。出迎えるため部屋を出て一階に向かう。

「おかえりなさい。結構遅かったですね」

「引越しの打ち合わせと晩御飯の材料買ってたら思ったよりかかったちゃって」

そういつて籠に入った食材を見せてくる。名前のわからない果物、

野菜、少々のお肉。ぐう、とお腹がなるのがわかった。

「ははつ。せつかくだし食べていきなよ。一人でいるのもつまらないからね」

「いいんですか？じゃあお言葉に甘えて」

「その代わり手伝ってよね」

「…頑張ります」

台所に立ち食材を切るシオンさんにまず言われたのは、火を起こすことだった。これ使って、と渡されたのはよくわからない石ころ。どうすればいいかわからず睨めっこしていると、

「もしかして、火打ち石使ったことない？」

「は、恥ずかしながら…」

「火打ち石使えないなんてどんな生活してたのよ、あなた」

あきれた顔で火打ち石と呼ばれる物の使い方を説明してくれる。

ああ、火打ち石ね。子供の頃、河原の石と石をぶつけて火花だそうとして全く意味がないことに気づかされてからすっかり忘れていた。余談だが、火打ち石はフリントと呼ばれる硬い石を用いて火花を起こすのが一般的で、手渡されたこの石も専用の物で、とりあえずぶつけば火花が出るから、それで消し炭などの火口ほくちに点火すればいいとのことだった。

とりあえず、世間知らずなもので、と曖昧に誤魔化しておいた。嘘は言っていない。むしろ普通の世間知らずのさらに上をいつてるわ

けだし。

無事に火をつけて、料理の準備を進めていく。

完成したのは具沢山とは言えないスープ、それとサラダにパン。感謝して晩御飯を頂く。

食べながら気になった点について話をしていく。

いざ引越しになればとりあえず運ぶのは大丈夫。

あとは美術品らしきものの取り扱いについてだ。

「ああ、あれね。そこそこ値打ち物らしくて壊されるのは困るから、あの部屋の物については私が運ぶわ」

「そうですか。じゃあ俺は他のところと重くて運べないやつを」

「ええ、よろしくね。それで、今晚寝るところなんだけど一階の私の部屋でいいかしら?」

「別にどこでもいいですけど…ん?」

おかしい、聞き間違えたか。今シオンさんの部屋がどうか聞きたが。

「え、あのシオンさんのお部屋ですか?俺が寝るところって」

「そうよ、幽霊問題に関しても、私が聞いたのは部屋で寝てる時だったんだし同じ場所じゃないと」

「あーそうですけど…いいんですか?」

同じ部屋で、と言い掛けて、こちらにっこり微笑みながら

「あ、でもベッドじゃなくて床で寝てね。それと私が二階で寝てる間に部屋を物色するのもだめだからね？」

うん、まあそうですね。わかってましたよ。はは。

夜はあまり騒がしくしたら近所迷惑とのことで作業は中断し、寢床の準備をしておいた。

地球という西洋文化なため、床を雑巾で水拭きし、毛布で寝転べるように掃除する。

部屋の明かりはランタンや蠟燭といった消耗品なので、夜更かしはできないし、とりあえず時間が過ぎるのを待ちながら幽霊対策を考えておくことにした。

シオンさんには世間知らずのレツテルを貼られたので、開き直っていろいろと質問をすることにした。

それでわかったのが幽霊を含めたアンデッドと呼ばれるモンスターのことである。

人に限らず生物全体の死や不幸、恨み辛みなどは負のエネルギーを発生させ、それはときおり生きる者に害をなす存在として現れる。

御伽噺のようなものには死者の行軍や死者の都など、ぶっちゃけホラー話が半分実話になっていいるものまであるらしい。

もっともこういった存在は、靈感がないと倒せないわけではなく、魔法で対処可能かつ実体がある相手なら殴り倒すこともできるので地球で考える悪霊や悪魔というよりはちょっと変わってるモンスターという認識でよさそうだ。

ここで問題なのが、この家に現れる幽霊である。

これがこの世を彷徨う魂なのかアンデッドに属するモンスターの類なのか。前者なら神様にお祈りという神官任せになるだけで特に問

題はないが、後者なら無用心に熟睡するわけにはいかない。
幸いシオンさんはまだ襲われてないので安心だが、念のため今晚は
寝ずの番をすることになる。

ここまで話して時刻は10時くらいだろうか。

幽霊騒動のおかげで寝不足だったとシオンさんはさっさと二階にあ
がってしまった。

こちらも寝床で横になりながら今度はひとりで幽霊対策を考える。
今の俺は武器はなく防具もない。

できるのは駆け出しレベルの魔法少々であり、この状態で戦うとな
ると、筋力をあげて近くにある包丁なり箒なりでぶん殴るか、火事
を覚悟でファイアーボールを撃つか、アイスエッジを撃つことしか
できない。

お金がないため武器・防具はまだ集まらないし、戦闘技術もすぐに
は身につかない。

となれば、荒事対策のために早急に魔法技術を上達させる必要があ
る。

幸い魔法の構成要素であるルーン語にはある程度馴染みがあるし、
実験と実践を繰り返していくしかないだろう。

そういえば、クレアさんが使ってくれた回復魔法も習得できるのか
な。

信仰心が1しかないけど…。

いっそ呪文だけ流用して魔術呪文にしたほうがいいかもしれん。

あとは新しい魔法だな。特に身を護る術となる魔法。直接的なのが
盾や鎧、結界で概念的なのが守護や防御といったところか。

英語ならシールドにアーマー、バリアーにディフェンス、ブロック、
ガードあたりが対応してそうだ。

ゲームだと幕って意味でスクリーンも使われてた記憶がある。

候補となる単語はおいといて、求める効力についてどうするか考え

る。

身を護る防具代わりになるのが重要だが、自身が理解・想像できるようなものでないと魔法は発動しない。絶対防御壁なんてものはおそらく無理だ。

いくらファンタジーが可能になるからといってイメージが難しい。それこそ神様に発動プロセスを丸投げしてようやく可能性が見える代物だ。

となると、衝撃吸収を元にした障壁や火や水などの他の要素を媒介としてエネルギーを分散させるものを連想したものがよさそうだ。衝撃吸収のイメージは何がいいだろう。

卵が割れない低反発クッションとかテレビでやってたのを見たことがある。

他にはゴムとかスライムとかは打撃を無効にするなんてのが定番だ。しかし、その仕組みについてはどうなんだろうか。

これもまた難しそうだ。仮に理解できてイメージも可能になったとして、次は魔法の実体化についても疑問が出る。

「筋力アップは直接体に作用してるみたいだけど、概念的な物も扱えるのかなあ……」

身を護る魔法が発動したとして、盾や鎧のように実体があるものを身に付けることになるのか。

それとも、その効力だけが一定時間得られるのか。鎧や武器を召喚して身に付けるのもかつこよくていいのかもしれないけど、重かったり動きを阻害して大変な気がする。

できれば概念だけを効果として得られれば嬉しいんだけど……

うーんうーんと悩み続けていると頭が疲れてきたのか、徐々に睡魔

が押し寄せてきた。

時間はもう深夜とっていいだろう。

これじゃあ朝まで起きてるのは大変だなと思っていると、カッーンと、何かが響く音が聞こえてきた。

第十六話 お化け騒動の決着

『カッーン…カッーン…』

明かりは消えて暗がりな部屋の中。

窓から差し込む月明かりのおかげで、目が暗闇になれてるのもあって一応辺りは見える。

本当なら異変があったらすぐに明かりをつけるべきなんだろうけど、得体の知れない音に対する恐怖でその場から動けずにいた。

背筋がゾクゾクとするのを感じ、毛布に背中を押し当て心を落ち着かせる。その間も音は繰り返し響いている。この音は一体どこから聞こえてくるんだろう。

これがシオンさんの言っていた幽霊のことなのか？

怪談話で、『家鳴り』というのを聞いたことがある。

建物が軋む音が聞こえてきて、それが何かいるのではないかと恐怖心を煽ってくるのだ。

気温の変化やねずみなんかのせいで発生した音でも夜中に聞こえてくると人間は得たいの知れない恐怖を感じてしまう。では、これもその類なのかと考えがよぎったが、明らかにおかしな点に気づいた。この音は、完全とは言えないが同じような感覚で繰り返されていて、僅かにではあるが徐々に大きくなってきている。

そして、音の出所は部屋の外、シオンさんと二人で食事をとった台所あたりから聞こえてくる。

いつまでもここでじっとしているわけにもいかない。

金縛りにでも遭えば目を閉じてガタガタ震えながら一晩過ごすのだが、生憎と、音が聞こえてくる点を除けば他に異常はない。念のため、『筋力増大』を自分に掛け、ファイアーボールなどの呪文の詠

唱を頭の中で予行演習し、覚悟を決めて部屋から出る。

かなり怖いし本来はここまでやる必要はないかもしれないが、音が聞こえたくらいでは幽霊認定は難しく引越し交渉にも問題がでないのか、という考えもあって幽霊の正体がなんなのか調べなければ明日シオンさんに何を言われるかわかったもんじゃない。

部屋のドアを音を立てないようにゆっくりと開け広間の様子を伺う。特に何もなさそうだが、月明かりが遮られ暗くてよく見えなかった。蝋燭に火をつけてこようかと思ったところで、あることを失念していたことに気づく。

「ああ、気が動転してて忘れてたよ… 『我が命に従い道を照らせ：フェアリーライト』」

魔術師ギルドで使ったときとは異なり、光の玉を経由することなく最初から妖精の姿で現れるように呪文に手を加えた。

予想通り、詠唱の完成と同時にあの時姿を見せた妖精が現れる。

「それじゃサポート頼むよ」

一言声を掛けると、返事をするように俺の周りを一周する妖精。

俺が使った魔術は光源を出すものだったはずだから、この子も本物の妖精ではなく意思とかはないと思うけど一人ではなくなった気がして恐怖心がいくらか和らいだ。

周囲を照らしてもらいながら音の発生地点に近づく。

どうやら足元、地下から音が聞こえてくる。

そして、近づくにつれて大きくなるのは音だけではなかった。

カッーンとなつていた音はよく聞けばカン、カンと打ち鳴らす音で、それ以外にも振動が感じられた。もしかしなくても、地面の下に何かいるのではないだろうか。

一番音と振動が大きくなるところに見当をつけ床に耳を当ててみる。音はもう耳に痛いくらいだったが、その音に紛れて人の声も僅かに聞き取れた。

…大脱走さながらのトンネル工事やってるみたいだな、なんて落ちて着いてる場合じゃない。

幽霊騒ぎの原因はわかったが、なぜ深夜に人様の家の地下を掘つてるやつらがいるのかという新たな問題が発生した。とりあえずシオンさんをたたき起こしてこのことを伝えないと。

バキッ

「っつうおおおおおおおおお!!!」

いきなり立っていた部分の床が抜けて2メートルほど下に落下した。こんなアクシデントに対応できるはずもなく、見事に着地に失敗して盛大に尻餅をつく。

「イツってー…」

激痛に涙を浮かべながら顔をあげると、そこには筋骨隆々としたスキンヘッドのおっさんが二人。

手にはつるはしとシャベルが。突然現れた俺を見て呆然としているようだ。

周りを見ると目の前はおっさん二人、左右は土壁、後ろはトンネルが続いている。

ここまで理解したところでおっさん達が話し始めた。

「…おい、この上は空き家の庭じゃなかったのか？なんで人が降ってくるんだよ」

「お、おかしいっすね。距離は間違っていないと思うんですけど」

「バカ野郎！ちゃんと空気穴用の目印付けとけていったらどうが！適当に掘り始めるからこうなるんだよ！」

「いや、あつてると思ったんですよ！ただちょっとだけずれただけで…」

「ふざけんな！危うく生き埋めになるかと思ったわ！」

ギヤーギヤーと口喧嘩が始まった。

なんだこの状況は。

会話の内容から推測するに、あの家の地下から空気穴を作るために掘りあげたら俺がいたせいで崩れ落ちたのか？異世界だし土台工事がしつかりしてないのは仕方ないか…

「まあこうなっちまったもんは仕方ねえ。面倒が増えたが目撃者には消えてもらおうとするか」

え？

「親分にばれる前に片付けないと、またぶん殴られますしね」

は？

そういつて凶器に変貌したつるはしとシャベルを手に、こちらに

じり寄ってくるおっさん。

そうだよな。こんなところで会うやつが真人間なわけがないんだ。身の危険を感じてすぐ様そこから飛びのく。

身体強化のおかげで尻餅状態からでもパツと起き上がったのは幸いだった。

ブンツと目の前を凶器が通り過ぎ地面に叩きつけられる。

「なんだ、見た目の割りによく動けるじゃねえか」

そんなこと言われても嬉しくもなんともない。

「いきなり何するんですか！？犯罪ですよ！」

殺されかけた相手に「犯罪ですよ！」というのもどうかと思っただが、問答無用で反撃するのは小市民である俺には難しかった。

「アア？犯罪なんてとっくにやってるよ。数え切れないくらいなあ」

「なんたつて俺たちは泣く子も黙るドニー盗賊団ですからね」

盗賊団の方でしたか。てことはディオが言ってた空き巣ってこいつらなのか？いやしかし、空き巣と人殺しではだいぶ差があるぞ。

「あの、空き巣の方たちですよね。人殺しはちょっとやめておいたほうが…」

「へっ。空き巣なのはその方が楽に盗めるからで、別に人殺しを嫌ってるってわけじゃないんだぜ」

そう言いながら、つるはしを振りかぶりにやにやと笑っている。ど

うやら穩便に済ますわけにはいかないようだ。

「そういうことなら…仕方ないですね」

「おうおう。仕方ねえ。だから…ここで死んどけ！」

さきほどよりも速く、そして踏み込みは深く。

確実に殺しにかかってきたおっさん改め盗賊その1。

強化済みの今の俺なら腕で防げば、大怪我はするだろうが死にはしないだろう。

筋肉の強化はそのまま肉体の頑丈さに繋がるからだ。

まあ、そんなことするくらいなら逃げの一手だが。

最初の攻撃を避けた時から、こうなる予感はしていた。

だから逃げるための準備も欠かしていない。

この場で撃退のために詠唱しても、間に合わずにやられるだろう。

なにせ漫画みたいに戦闘中に長い台詞をいうなんてのは現実的に有り得ない。

だから、今言えるのはシンプルな一言だけ。

『光れ』

その瞬間、頭上から飛び出してきた愛らしい妖精によって、地下のトンネルは束の間眩い光に包まれた。

「ぐうう、目が」

キツク目を閉じ、さらに手でしつかり覆っていたおかげで、目の前の苦しんでいる盗賊二人のようにはならず済んだ。この粗末な地下トンネルはとどころどころに蠟燭で明かりが灯されているくらいで、

どちらかといえば暗いほうだ。

余計にこの明るさは耐え難いはずだ。

失明の危険があるため完璧とはいえないが、暴徒鎮圧にはやはり閃光は優秀だな。

とりあえずある程度の無力化には成功したが、少ししたら復活するだろう。詰め作業に取り掛かるとしよう。

『我が纏うは紫電の鎧：エレクトリックスキン』

詠唱が終わり、周囲にバチバチと火花が現れる。結構痛いかもしれないが、反省の意味も込めてあきらめてもらおう。

「それじゃあ、いきますよー」

まずはつるはしを振り回していたおっさんの方に。せーの、と両肩に手をおく。

「ぎゃああああああ」

「あ、あにきーーーーー」

ドサツつと気絶して倒れる盗賊1。

安らかに眠れ。

そんでもって目覚めたら罪を償え。

その後もう一人の盗賊2のほうも電気ショックで気絶させる。

対象に直接触れないと使えないけど、まあ悪くない魔法だったな。

当面の危機は去ったが、どうしようか。

このままトンネルを進んで、残りの盗賊もどうにかするというのがありだが危険だろうな。

とりあえず俺にできるのはここまで。

一度家に戻って夜警の人を呼んでこよう。

ぐっすり寝ていたシオンさんを起こして事情を説明し、パトロールしていたディオ達に連絡をいれてもらった。

ロープで縛るやり方を知らなかったので、目を覚ましそうになるたび、電撃をお見舞いしておいた。ざまあみる。

現場に到着したディオ含む冒険者達によってトンネルの先の空き家を根城にしていた残りの盗賊一味が一網打尽にされ、やっと一息つけると思った頃には夜が明けようとしていた。

「リュウジ。お手柄だったじゃんか」

「まさか盗賊に絡まれるとは思ってなかったよ、ほんと」

「へへっ。おかげで依頼が無事達成できたし感謝するぜ」

「こつちも教えてもらった魔法が役に立ったよ、ありがとうディオ」
冒険者ギルドの広間でディオと談笑する。

あの後、引越しの目的がなくなったため依頼は完了し、無事初仕事を終えることができた。

盗賊団確保に一役買ったとして冒険者ギルドからも報酬が得られたが、それはシオンさんに渡しておいた。なんせもともと依頼を出し

た原因が盗賊団にあった上、床にまで穴を開けられては損しかして
いない。

依頼の報酬は受け取らないといけなかったため、床の修理費と依頼の報
酬分を盗賊団がらみの報酬から差し引いた形になる。
それでも銀貨10枚が得られたんだし満足しておこう。

「じゃあまた何かあれば」

「おう、元気だな」

ディオと別れ、アンナとリゼルさんの待つ家に帰る。

時刻は朝10時くらい。薬剤店の受付をしているアンナが見れるかな。
土産話もあるし、今日は家でゆっくりするとしてよう。

と思っていたが、家にいるなら手伝えとリゼルさんにこき使われる
ことになったのは言うまでもない。

第十六話 お化け騒動の決着（後書き）

初依頼達成でちょうど一区切り。

閃光の効果は、軍隊で使われる閃光手榴弾がイメージしやすいでしょうか。

「閃光手榴弾を投げ損なっちゃった軍隊の突入訓練」というのが面白いので一見の価値あります。

ここまで読んでくださりありがとうございました。ご意見・ご感想・評価等、お待ちしております。

第十六・五話 一方、地下では

ガン、ガン、ザク、ザク

「まだっすかね、兄貴」

ガン、ガン、ザク、ザク

「いや当分終わんねえだろ」

二人のおっさんが狭いトンネルを掘り進めている。トンネル内は薄暗く最低限の光量しかない。目下、街から出るために秘密の地下トンネルを製作中だ。

「なんでこんな面倒なことに……」

「仕方ないだろ。門が使えなくなっちゃったんだから……誰かさんのせいでな」

「う……」

先日、忍び込んだ豪邸にて金目の物を頂戴したところ、ペアを組まされたコイツが見つけた宝石箱を持ち帰ったはいいが、鍵が開けられず叩き壊したら魔法の罫が仕掛けられており、アジトにいた仲間全員が呪われてしまった。

その呪いは、近寄ると対応した魔導具が光るといふものなんだが、そのせいで仕事がいやになり、さらに街の出入り口に検問がひかれ、逃げるのも難しい。

その罰として、親分から言い渡されたのがこの穴掘りである。

「ふう…ちょいと休憩するか」

「じゃあ、あつしも」

「ばか、お前は休まず働け。こっちはお前のどじに付き合わされてんだ。」

「ええ〜そんなあ…」

「…わかったよ。とりあえず息苦しいから空気穴だけ先にあけちまおう。したらしばらく休憩だ」

「合点承知」

他の連中は手伝いもせず、ぐうたら寝てるんだし、無理することもない。あと2日も掘れば外壁を超えるはずだし、ボチボチ頑張るとするか。

「兄貴、ここサクサク掘れますね」ザクザク

「大穴あけないように気をつけるよ。小さい穴でいいんだからな」

「へへっわかってますって…ん、なんか固いのが」ガチッ

「くそっ！あけての」ガチッガチッ…バキッ

バラバラと周りの土砂が崩れ落ちる。

「おい、気をつける。ここ土が柔らかいみたいだぞ」

「いや、でもなんか硬いやつが邪魔で…」ガチッガチッ…バキッ

「お、おい。それ以上は」

バキン

「あ、やつと開い」

「ってうわあああああ…!」

ああ、なんで俺はこいつと組まされたんだろう。こいつがいなけりや…こんなことには。はあ……

『盗賊1の独白より』

第十七話 買い物にいこう

盗賊騒動の翌日。

「それじゃ、いってきます」

「いつてらっしや〜い」

エプロン姿のアンナに見送られ今日も冒険者ギルドに向かうことにする。

可愛い姿に癒され、活力がみなぎってくる。

どうやらそれは俺だけでないらしく、リゼルさんも張り切っている。

ギルドに向かう最中、ポケットからギルドカードを取り出し眺める。昨日までと変わったところが一箇所。

ランクを示すD5という表示の下に小さく10という数字が加えられていた。

話は昨日まで遡る。

「ご苦労様でした。無事に達成できましたね」

受付に座るミルザさんに依頼の達成書を手渡す。

これは依頼主が所持してるもので、依頼が達成されたと思われたとき依頼主から冒険者に渡されるものだ。

「おかげさまでなんとか。予想外のおまけもついてましたが」

「ふっふっふ。聞いてますよ。盗賊団の検挙に一役買ったって。さすが魔術師です」

「の卵ですよ。で、これで報酬をもらえるんですか？」

「ええ。Dランクの依頼達成おめでとございます。ギルドカードを提示してもらって構いませんか」

そう言われて、いそいそとポケットを漁る。

「えっと…あ、あった。はい、どうぞ」

「ありがとうございます。では失礼して」

ぺたり、と台に置かれたカードに向かって判子のようなものが押される。

「はい、お返しします。評価点が10点になりましたよ」

「評価点？あー100点貯めるやつですか」

「はい。依頼を完璧にこなしたと見なし満点です。この調子で頑張ってくださいね」

満点とはどういうことだろう。
点数に何か影響されるのかな。

「完璧じゃなかったらどうなるんですか？」

「簡単に言えば10点が1点になったりします。だから依頼主には誠意を持って対応してくださいね」

つまるどころ、文句があると達成書に注意書きが加えられ、それによって減点されることがあるらしい。

「なるほど。気をつけます」

「依頼主を脅したり、捏造なんてしたら大幅減点や依頼受理の停止などの罰則がありますからしちやだめですよー」

「へいへい」

そして、初仕事は無事満点の10点となりカードに記載されることになったのだ。

この計算だと最短で10回の仕事でランクがあがり、50回でランクになれる。

でもまあ依頼を完璧にこなすのは難しいって話だし、実際はもっとかかると思う。

冒険者ギルドに入ると、カランカランと扉につけられた鈴がなる。中には依頼書を眺める冒険者や、パーティーで談笑する人達もいる。受付には昨日と変わらずミルザさんが座っている。

こちらに気づいたようでニコニコと手を振ってくれた。社交辞令で俺も小さく手を振り返す。

「さて、今回は自分で探さないとな」

掲示板に近寄ると、さっきまで眺めていた冒険者らしき人とすれ違
う。

手に一枚の依頼書を持ち、受付に行ったのでその依頼を受けるのだ
ろう。

他人の仕事がちよつと気になった。

モンスター退治とか受けるんだつたらちよつと憧れる。

男の子として。

まあこつちは変わらず安全第一ですけどねー。

『依頼内容：討伐』

R：D3。街の外の魔獣を減らしてほしい。対象はラージマウス、
ホーンラビット 報酬は一頭あたり銅貨10枚 識別部位必須

これは屋外の実戦か：パス。
でも識別部位つてなんだろう。

『依頼内容：採取』

R：D4。指定した薬草の採取。街の周辺部に自生。対象はレッド
ラベンダー、ブルーラベンダーを規定量。報酬は銀貨1枚

ラベンダー：あるんだ：あ、でも名前しか知らないや。

どんな見た目だっけ。

見た目がわかれば楽そうでいいんだけど、報酬はおいとくとして。
ちよつと聞いてみるか。

困ったときのミルザさん頼みや。

受付が空いてるのを確認してミルザさんに質問する。

「ああモンスターの識別部位ですか。あっちにテーブルありますよね。その本棚に備え付けの辞典があるので確認しておいてください」

「あんなところに…あと、この記号についてなんですが」

「Rはランクの意味で、横のランクは依頼の難度を表します。現在のランクより3つ以内の範囲のみ受理可能です」

「なるほど。じゃあ俺はD3までなら受けていいんですね。教えてくださいありがとうございます」

「ふふっ新米なんですからいろいろと聞いてくださいね」

「うーん、でもそういうのは登録のときに説明するもんなんじゃ」

「あ……………はい、次の方どうぞー」

誤魔化された。

なんだか他にも知らされていないことがありそうだが、いいか。

本棚から辞書を引っ張り出し、テーブルにつく。

ひとつは一般的なモンスターについて記述、スケッチした魔物図鑑。もうひとつは、これまた一般的な植物や素材について記述、スケッチした植物図鑑。

ゲームの攻略本のモンスター一覧を眺めるように楽しそう、と思いきや情報はあくまで主観的なもので絵も上手くないためつまらなかった。

まあ、実際にはこれが限度だろうし、仕方ない。

とりあえず、ラージマウス、ホーンラビットは名前どおりのやつだとわかり、識別部位はねずみの尻尾と兎の角と覚えた。他に重要な点として、素材としての価値についても載っていた。ラージマウスについてはまったく価値がないが、ホーンラビットについては角が薬の一種、肉は食用としての価値がある。参考までに図鑑の最後に載っていたドラゴンなるものについては、素材価値は全部と書かれていた。ねずみとの格差にちよっとほろっときた。

目当ての植物図鑑に関しては、調べるのが簡単だからか、綺麗にスクッチされしつかりと図鑑の役割を果たしていた。二種類のラベンダーについても絵、自生区域に目を通したから問題ない。

今日はラベンダー集めの依頼を受けることにしよう。

「それで帰ってきたわけだ」

「ええ、まあ、はい」

目の前にはリゼルさん。アンナは今店先で受付をやっている。あの後、依頼を受理してもらって裏面の地図を見ながら移動するとなんだかよく知ってる道で。そして案の定たどり着いた先は仮の我が家であるリゼルさんの薬店だった。

「まあ依頼は誰が受けても変わらないか。あんたでもできるでしょう」

「…間違いなく街の出入り口の衛兵に止められるわね」

これでケチることは許されなくなった。

武器は包丁でもなんでも誤魔化せるだろうし、見た目がちゃんとした防具を買いにいこう。

いくらくらいするんだろうか…

第十八話 初装備

現在の全財産は、銀貨15枚。

この世界の物価についてはまだ把握していないが、銀貨一枚あれば一日分の食料は十分得られる。

食事に関してはリゼルさん宅にお世話になっているため、銀貨数枚をキープしておけば残りは使ってしまったって構わないだろう。さっそく、必要なものを探しに街を練り歩こう。

家を出てまず向かうのは、アンナが言っていた市場というところだ。武器や防具を見る前に、身の回りのものを探すことにする。例をあげれば、財布やリュックだ。

今も銀貨は服のポケットにそのまま入っている。ついでにギルドカードも。

少ししてたどり着いた市場は昼前ということもあって、とても活気付いていた。

肉や魚、果物に野菜を売る屋台があったり、ポーチのような小物を出しているところもある。

武器や防具といったものは見当たらないが、生活に関係するものは一通りここで揃えることができそうだ。

「なあ、そのあんちゃん。買ってかないか」

ふらふらと辺りを眺めながら歩いていると、肉を燻製にして売っている店の親父に声をかけられる。

「あーえつと、すみません。まだ買えないんです」

「まだ？」

変な断り方をしたせいで首をかしげる店主。

「実は財布なくしちゃって。財布がないと小銭が持ちきれないし」

そついつて、ポケットから銀貨を見せる。

「財布をなくすとは、抜けてるなああんちゃん。財布なら、ほれ。向こうの店で使えそうなのが売られてるよ」

笑いながら店主が指をさした方を見ると、ベルトやポーチ、ポシェットなどが並べられた屋台が見えた。

「安くしてやるから、財布買ったらまた寄ってくれよ」

「ええ、そのときはちゃんと」

店主に軽く頭を下げ、教えてもらった店に足を向ける。

まずは財布となる入れ物を選ぶ。

どれにしようかな、といくつか手にとって考えているところの屋台の番をしている少女に声をかけられた。

「こんにちは、どのような物をお探しですか？」

「ああすいません。財布を探してまして」

急に声をかけられて少し驚き、持っていたものを元の場所に戻す。

「見かけない方ですが、冒険者の方ですか？」

黒髪を見ながら訊ねられる。

やはり黒髪は目立つのか。

「ええ、つい先日から」

「でしたら頑丈な物のほうがよろしいですね。」

そういつて並べられている商品の中からひとつ取り出す。

「こちらは破れ難く、紐で縛っておけるのでお勧めです。街では首にかけておけばスリの心配もありません」

ポシェットのような外見でカードもしまえるようで、説明を聞く限り悪くはなさそうだ。

「じゃあ、それにします。いくらでしょう？」

「銀一枚でどうですか？」

「わかりました」

ちょっと高いかなと思ったけど、ポケットから銀貨を一枚取り出す。すると、少女は驚いた顔でこちらを見ていることに気づいた。

少し不審に思ったので聞いてみる。

「あの、どうしましたか？」

「ああ、いえ。値切られずに買われたのにちょっと驚いてしまっただけです」

納得した。

そういえば、先ほども『どうですか？』と聞かれていた。

つつい提示された値段で買うのが当たり前だと思っていたが、文化の違いはどこにでもあるものだ。

ここでは客と店で値段の交渉を行うのが当たり前なのだろう。

しかし、いまさら撤回するのは恥ずかしいだけなので顔にはださず支払いを済ませた。

支払いを済ませたところで、リュックも必要なことを思い出した。せつかなので、このお店にあるか聞いてみる。

冒険者向けの荷物入れも扱っていたようで、こちらは交渉によって銀貨2枚を1・5枚にしてもらった。もちろんお釣りは銅貨だ。

「ありがとうございます」

少女に見送られて店を後にする。

銅貨50枚は少しかさ張る気がしたので、さっきの親父の店にお邪魔することしよう。

「ところで、武器とか防具ってこの辺に売ってないの？」

一口サイズの燻製を齧りながらの情報収集。

約束どおり値引きしてくれた親父に、ついでとばかりに質問している。

「そういったのはこの通りにはないよ。向こうの通りに鍛冶屋があるから、その辺りで探してみな」

「そっか、ありがとう」

「また買いにこい」

軽くなった財布を確認しながら通りを抜ける。

残ったのは銀貨12枚に僅かな銅貨。

言われたとおり、紐は首にかけて懐にしまっ。

これでようやく武器と防具を見て回れる。

通りを渡り、やってきたのは先ほどまでいた場所とは違い少々荒れた感じのする場所だ。

ここは酒場、武器、鍛冶などが存在するらしく、冒険者向けの地区になっていようだ。

そういえばこちらに来てから、アルコールをとってない。

もともと酒は飲まないほうだったので気にならなかったが、酒場にお世話になる時がくるのだろうか。

できれば酔っ払いに絡まれるような治安の悪い場所でないことを祈る。

通りを進むと、見栄えのよい剣が飾られた店が見えた。

近くには『武器をお探しならこちらへ』と書かれた看板も立てられているので、ここで間違いないだろう。

窓越しに見える展示用らしき武器は、無骨な感じのする斧や棍棒、大小様々な剣が並べられており、どれもしつかりと望まれた役割を果たすことができるという迫力があつた。

武器の良し悪しなどわからないが、ここにあるのは命を左右する存在であることは間違いなかった。

ギョッと音のなる扉を開け店内に入る。

奥のカウンターには壮年の筋肉質な男性が一人。

赤毛が攻撃的な印象を与えてくるが、雰囲気は落ち着いていてダンディな感じだ。

チラツとこちらを一瞥し、興味ないかのように視線を戻す。

近寄りがたい雰囲気になつてしまったが、こちらは武器なんて買ったことも使つたことすらない身である。

そういう場合は店の人に聞くべし、というのがショッピングの定番であるので、この男性に話しかけようと口を開こうとしたときである。

「悪いが、ここにはお前が使えるような物はおいてない」

落ち着いていて、諭すような口調で話しかけられる。

開幕で売買拒否に陥つて、一瞬呆然とする。

何を言えばわからず、おろおろしていると続けて声が掛けられた。

「とはいえ、お客さんであることには違いない。どれ、用件は聞こう」

と、促されようやく武器と防具を探していることを伝えた。

「なるほど。最低限の装備で構わないと」

「はい。今は街の外に出るのが目的なので」

「それであれば見繕ってやる事ができるが、君の体ではやはり武器を持つには難しい」

もしかして、店に入ったときにこちらの実力を見抜いたのか。

それであれば納得だ。自分でも剣を振るう力も技術もないのは承知している。

「わかってます。魔法を扱うので問題ありません。まあ…体は鍛えたいですけど」

「そうか。では防具についてだが、少し待っている」

そういつてカウンターの裏に消える店主。戻ってきたとき、持ってこられたのは一着の防具。

「革製の防具を補強したものだが、近隣の魔獣程度の爪と牙を防ぐなら十分だろう」

軽さを重視しているのだろう。頭を守るのはヘッドギアというか、鉢巻のような外見。

手はライダーグローブのような腕の一部を守る形。体を覆う防具も下半身を覆う防具も、急所を重視して保護するデザインになっている。

「軽い…」

「そうだろう。鉄製の物に比べ、防御力は落ちるが重くては満足に動けんだろう」

この店主のいうように、今の俺にはこの防具が最適だろう。

「おいくらでしようか？」

「革製一式で銀10枚。交渉は受け付けん」

防具で銀10枚消えると、手元には銀2枚しか残らない。

しかし、この防具なら文句は言えない。

店主の話も間違っただいなさそうだ。

「わかりました。ではその値段で買います」

「よし、サイズを合わせてやろう」

10分後、そこには防具を着込んだ姿の俺がいた。

防具をつけるってのは剣道着を着たときくらいじゃないだろうか。

「問題ないか？」

「はい、ぴったりですね」

「そうか。ところで、お前はこの店に来るのは初めてだな？」

「？ ええ、そうですか」

「駆け出しに対する饒別だ。こいつをくれてやる」

ガタンとカウンターの台におかれる一本の短刀。

「これは？」

「変哲もないダガーさ。生憎、お前が使えるような武器はこいつくらいしかない」

「でも、最初俺が使える武器はないって」

確かに『ここにはお前が使えるような物はおいてない』と宣告された記憶があるのだが。

「こいつは武器として使うというよりはお守りだ。懐刀ともいうな」

「もらっていいんですか？」

「ああ持っていけ。好きに使って構わん。剥ぎ取りや料理でもな。その代わり、いつかまた来い。ちゃんとした男になってな」

「そういうことでしたら、ありがたく。また来ます」

革防具についているベルトにダガーを差し、店を後にする。もちろん深々と頭を下げるのを忘れない。店を出て扉を閉める。

「気配と見た目がこつまで違う奴がいるとはな」

店の扉が閉まる前にそう囁かれたのが聞こえた気がした。

第十九話 街の外へ

武器と防具は揃った。

これだよ。やく冒険者として見える格好になったかな。

正午を示す鐘が鳴り、賑わう食堂を横目に街の出入り口に向かう。さっき燻製を齧ったからそこまで空腹ではないし、残った路銀は僅か銀2枚。

しばらくは節約しなくてはいけないだろう。

外へ出る門が見えてきたあたりで、月熊亭という看板が目に入った。確かディオが泊まっている宿屋、だったと記憶している。

今頃何をしてるのだろうか。

中にいるのか、それとも俺と同じでギルドの依頼を受けてるのか。

こういうのを『噂をすれば』というのだろう。

「よっ。今日もあつたなりユウジ」

後ろから声を掛けられて振り返る。

「やあディオ。ここんとこ毎日、顔合わせてるな」

「そうだな。で、今何してる？」

「これから『外』に出るつもりだよ。薬草採取の依頼を受けてね」

「そっか。俺も同じ。依頼は討伐だけだよ」

よかつたら一緒に行かないか、というディオの提案で臨時のパーティーを組むことにした。
ディオの受けた依頼は、例の鼠と兎の討伐で街の周辺をぐるっと回るつもりだったらしい。
安全なところでは薬草を摘む人が多いため、満足に集まらない可能性があることに気づき、この提案は有難かった。

「なるほど、この世界のことを少しわかったよ」

目の前に倒れるモンスター、魔獣ホーンラビットの亡骸を見ながらつぶやく。

二人で向かったのは街の周辺にある森、街道から離れたところ。

人の手が加えられていない場所には、予想通りラベンダーの花と数匹の魔獣がいた。

外見は角の生えた兎、もつとも小学校の頃学校で飼っていた兎より一回りは大きかったが、そいつらが牙をむいてこちらに飛び掛ってきた。

好戦的でないモンスターがいるかもしれないが、確かにこの世界は危険に満ちている。

ディオは本来、戦士になるつもりだったらしく、身の丈にあった一振りのショートソードを振るい、ホーンラビットに斬り飛ばす。

年下の少年に前衛を任せるといふ、なんとも情けない状態だが、そこは向き不向き。

運動不足の現代人として割り切って、安全を確保してもらった後衛としての役割を果たす。

森の中、それにあの兎の肉や毛皮に価値ありというのを思い出し、氷の魔法を選択する。

『模るは飛翔する氷柱：アイスエッジ』

魔力を吸い顕現した魔法は、鋭い氷の破片となって目標へと飛ぶ。その数は3つ。

トスツと軽い音を立てて地面に突き刺さる。

残念ながら上手く当てるのは難しい。

「しっかりしてくれよー」

体を張ってるディオからツツコミが入る。

確かにこのままじゃ面目が立たない。

しかし、動き回る敵に対して距離をとって撃つ魔法があたりにくいのは仕方ないだろう。

対処としては、近寄って撃つか数を増やすか何かしら工夫する必要がある。

さて、ディオが一匹切り殺したのと俺が使った魔法を見て、残りの兎どもは距離をとって様子を見ている。

少し試してみるか。

「なあディオ。詠唱に合わせて一気に下がってくれ」

「一体なにすんだ？まあわかったぜ」

これからやることを再確認して、詠唱を開始する。

同時に、ディオが下がり俺の方に向かってくる。

そして、それを見て行動に移ったホーンラビット3匹が追いかけてくる。

『模るは落下する無数の氷柱：アイシクルエッジ』

瞬間、魔力は言葉となり世界を改変する。

見上げれば頭上を覆う大量のツララが、先ほどまでディオがいた位置を中心に広がっている。

洞窟にできたツララとは違い、宙にできたツララは重力に引かれて自由落下を始める。

ちょうど、前にでてきた獲物の上に。

気温が数度下がったような光景が、時間とともに修復されていく。

地面に生えた無数の氷の花は掻き消えるように溶けていった。

残ったのは穴だらけになったモンスターだけだ。

「なんとまあ……」

正直、やりすぎた感がする。

やりたかったのは正面からの攻撃ではなく、視野外からの攻撃による不意打ちだったのだが。

氷柱でいっぱいになった洞窟をイメージしたのがまずかったのだらうか……

「なんか凄かったな…魔力大丈夫か？」

以前、魔力の使いすぎで気持ち悪くなったのを思い出したのか、こちらを気遣ってくれる。

「ああ平気だよ。ただ…あれを見るほうがきつつかいかな…はは」

「識別部位を集めるのは俺だし、任せてくれよ」

そう言つて残骸の剥ぎ取り作業を始めるディオ。

悪いがそちらは任せて、周辺のラベンダー採取に専念することによつて。

場所を変えながら、同じようなことを続けていった。

魔法に関しては発生させる氷柱を数本だけに変更して、頭上を警戒させて動きが鈍ったところをディオが攻めるスタイルに変えた。

ときおり直撃することがあつて、完成するオブジェはあまり見たいものではなかつた。

戦闘が終わつて安全が確保されればまた周辺の薬草を採取する。その結果、夕方になるころには満足な量のラベンダーを集め終わった。

ディオのほうもラビットの角や、なんどか大量にでてきたねずみ共の尻尾を集め、他の素材もカバンにいっぱいになっていた。

「俺は一度依頼主のほうに向かうけど、ディオは？」

「この依頼はあて先がギルドだから、特に寄るところはないぜ」

モンスターの討伐は二人で共同でやったことだとディオがいうので報酬を山分けすることになった。

それなら一緒にギルドに行こうということと、ディオをつれてリゼルさんの店に向かうのだった。

「ただいま帰りました」

「あら、おかえり。そっちの子はどうしたの？」

「仲間のディオです。今日は一緒に依頼を」

そこまで言ったところで、受付に立っていたアンナがやってきた。

「おかえりお兄ちゃん」

そういつて抱きついてくる。

過剰ではないかというスキンシップに一瞬固まるが、ただいまと返事を返す。

せっかくだし、アンナにもディオを紹介しようと横を向くとディオも同じように固まっていた。

「あつごめんなさい。こちらの方は？」

「ああこいつは友達の」

「ディオ・キストといいます。どうぞディオと呼んでください、お嬢さん」

「お前大丈夫か、キャラ違っぞ」

「ディオさんですが、私はアンナ・アラベルです。アンナで構いませんよ」

「わかりました、アンナさん」

「いや、だから」

「ちょっとお兄さんをお借りしますね」

ダダダツと俺を引っ張り、店の外に連れ出すディオ。

「いったいどうしたんだよ」

「リュウジ、誰だよあの子!？」

「誰かと言われたら難しいんだが」

実際どんな関係かと聞かれても返答に困る関係である。

「いやだってお兄ちゃんて、お前と全然似てねえし髪の色も!」

「まあ血は繋がってないしな」

「まさかあんな子と兄弟プレイをしているなんて……」

「いや、だから落ち着けよ」

拉致があかないので、何があったのか説明する。

もちろん異世界うんぬんは抜きに、門番に話した内容をだ。

ディオは俺とアンナの関係を理解したのか、やっと落ち着きを取り戻したようだ。

「リュウジの親父さん、神様だな」

「故人にその評価はどうかと思うぞ」

「固いこというなよ兄さん」

「やっぱり落ち着こうか」

面倒になってきたので『アイシクルエッジ』の詠唱を開始する。

「『模るは無数の』わー、ちよつとまった、冗談だよ冗談」

いろいろと疲れてきた。

「ならいくぞ。荷物もあるんだし、早くギルドにいかないと」

「おっ」

リゼルさんに袋を渡し、達成書を受け取りギルドへ向かう。

この時間は込んでるのか何人も冒険者が広間に集まっていた。受付も一人ではなく、何人かで分担しているようだ。

「すみません、依頼完了の報告にきました」

「はい、承ります」

ミルザさんの姿が見えないが、裏で雑用でもしてるのだろうか。

「ギルドカードの提示をお願いします」

「あつ、はい」

以前と同じく判子が押される。

するとカードに変化が現れ、評価点10が20に変わった。今回も依頼は完璧と判断されたらしい。

「次の方、どうぞ」

「はい」

並んでいたディオが依頼書とカバンをだして報告し始めた。

5分後、無事換金が終わったようで、討伐数27体（ホーンラビット13体、ラージマウス14体）の銀貨2枚銅貨70枚を報酬として受け取り、半分を取り分として受け取った。

「素材の分もいれると結構稼げたな」

ディオのほうはホーンラビットの肉や皮も換金対象にしたので依頼の報酬より実際は多い。

「討伐も効率的には悪くなさそうだなあ。一人でやる気にはならないけど」

「それじゃあ俺と一緒にパーティー組もうぜ」

「それもいいね。でも基本はまだ一人でやるよ」

結局、お互いに必要があれば助けを呼ぶということにして、もうしばらくソロで活動することにした。

他人の命を預かるには、まだ自分の力量が不明だからだ。
パーティーでの依頼となると危険度の高くなると考えられるので当然の考えだ。

ディオと別れ家に戻ると、リゼルさんに話があると呼びだされた。
いわく、アンナに付く悪い虫は実力をもって排除すること。

俺にいわれてもなー

第二十話 波乱の兆し

「いつてきまーす」

「いつてらっしやーい」

恒例となりつつあるアンナの見送りを受けてギルドへ向かう。

まだ数日しか経ってないが変わり映えのしない光景。

この世界に来てからまだ一週間程度だが、家と呼べる場所ができて声をかけてくれる人ができたことに感動を覚える。

この世界は地球とは文明の進み方に大きく差があるからか、またモンスターの影響で人工的な拡大ができないからか、自然が色濃く残っている。

そのため、空気は綺麗だし街の近くを流れる川の水はとても澄んでいる。

そして、住んでいるのはモンスターだけでなく、普通の動物も住んでいる。

街を歩けば、小鳥の囀りが聞こえ、街の一部では飼育されている家畜を見ることがもできる。

モンスターがいなければ、きっと文明はより発展するのだろう。

その先が地球のような科学に富んだものか、魔法によるSF染みたものになるかはわからないが。

この世界に対する考察をすすめるには、まだ知らないことが多すぎる。

自分が住む世界のことを知らないでいては、いずれ困ったことになる。

今後は、自分を鍛える以外にもやるべきことが多くあるだろう。

そんなことを考えながら、あつという間にギルドへ到着する。今後やるべきこととしては、鍛錬以外にもクレアさんにもらった支度金である銀8枚を返しにいかなければならない。

なるべく早く顔を見せると言われてるし、早くお金を集めたいものだ。

そしたら休日がほしい。

もったも、リゼルさんのところにいる限り安息はなさそうだが。家賃を要求されないだけましである。

ギルドの掲示板には、なくなりそうにない程の数の依頼書がびっしりと貼られている。

ギルドの職員の手によって、ランク分けされて貼られているので俺は隅のほうを見ればいい。

ギルドの依頼は、前回あったように街の安全を守るために、ひいては人類全てのためになる討伐系の依頼のほか、武器や防具、薬などの素材を集めるための採集、収集系の依頼がある。

それを基本として、他にも輸送、護衛、調査など必要があればなんでも依頼となる。

最初の依頼も緊急性は低いが立派な依頼である。

受注可能な範囲はD5からD3までだが、Dランクのものは大抵が危険度が低く、特殊なスキルが必要とされないもので構成されている。

それがランクが上がるにつれ、緊急性の高いもの、危険度の高いもの、失敗が許されないものなど、依頼はより困難になっていく。

そして、低ランクの冒険者が上のランクを受けるのに制限があるように、高ランクの冒険者は低ランクの依頼を受けることに制限がか

かっている。

そのため、依頼の中にはランクが設定されていない一般にフリーと呼ばれる種類のものも存在する。

内容は、ある特定の技術を持っていたり、条件を満たせば可能となるような依頼だ。

ステータス 以上や魔力値がレッドライト以上といった制限が加えられているのが多い。

以上が今日、ミルザさんから新たに聞かされた内容である。

「じゃあこれなんかも、受けていいんですね？」

「……ええ、問題ありませんよー」

手に取るのは、フリーに分類されていた一枚の依頼書。

『依頼内容：行事手伝い』

『明日行われる式典にて、働き手を募集します。詳細は現地にてお話します。本日正午までにお越しく下さい。報酬：5銀 領主館より』

「なんかさつき説明された内容と違いますが」

「うーん。明日までっていう期日があるから、依頼主の希望でフリーに分類されたんじゃないかしら」

「なるほど。ところで明日の式典って何です？」

「あれ？知らないんですか。明日はこの街の領主様をお祝いするお祭りがあるんですよ」

「お祭りですか」

「ええ、領主様にご子息がお生まれになったので街をあげてのお祭りです。他の街からも多くの人が集まるので、ギルドの依頼も街道警備や討伐のものが増えてますよ」

「この領主の人は愛されてるんですねえ」

「ええ、ひどい政治もないし街の発展を気に掛けてくださる人ですから」

ちなみに、高ランクのところには屋敷の警備や領主の護衛の依頼が加えられているらしい。

報酬も十分だし、魅力的な依頼だ。

迷わずこの依頼に決定した。

「何者か」

街の中心にある領主の屋敷に到着し、門に立つ衛兵に止められる。

「ギルドの依頼で参った者です」

荷物袋から依頼書を取り出し、衛兵に見せる。

「確認した。まっすぐ進んで、左にある部屋で執事に詳しい話を聞くように。警備が厳重になってるからつろつろするなよ」

「わかりました」

門を開けてもらい、庭の先にある大きな屋敷に向かう。中に入ると正面には二階につづく吹き抜けの大階段。左右に廊下がありいくつもの部屋に分かれている。言われたとおり左の部屋に進む。

「すいませーん、ギルドの者ですが」

部屋の中には書類を手にお茶を飲む初老の男性がいた。

「ギルドの、というと依頼を受けた方ですか」

「はい、この依頼を受けました」

衛兵にも見せた依頼書を取り出す。

「よろしい。では仕事の説明をしましょう。お座りなさい」

「はい、失礼します」

促され、部屋の中央にあるソファーに座る。

「ギルドの審査をクリアなさっているのでお話ししますが、任せたいのはご子息の護衛です」

「……はい！？」

第二十一話 羅刹の行進

「あの、依頼書には行事手伝いつて書いてあるんですけど…」

依頼書を確認しても確かにそう書いてある。

雑用かと思っていたのに、護衛という単語がでてくるのは予想外だった。

執事さんは落ち着き払った様子で、理由を説明し始めた。

「本来はこちらで駒を用意したかったのですが、何分急なことで、まず依頼の目的からお話しましょう。明日の式典の場でご子息の安全を確保することが本依頼の内容です」

「ええ！？でもそんな大層なことはどこにも」

「その通りです。これは極秘に行われる必要があるため、本来の手順とは異なる方式をとりました」

「一体なぜそんなことに？」

「私のほうからギルドへ提示した条件は、違和感なくご子息の近くに配置できる人材でかつ魔法が使える人物であることです。式典の場では武器の持ち込みは景観を壊し、住民に不安を与えますから」

「はあ…」

「旦那様と奥様の周辺には、長年仕えた者を護衛に置いてるのですが、今回はご子息のお披露目という式典の目的もあり護衛の手が足りません。そこで不安はありますが、外部に悟られず護衛を強化す

るために内容を伏せたままギルドに依頼させていただきました」

「その大切な役目を俺なんかが受けていいんでしょうか……」

「時間がありません。それにこの依頼を受けれたということはこちらの条件をパスされているのでしょうか？であれば、あとは最善を尽くしていただくだけです」

「ちなみに断った場合は？」

「式典が終わるまで監禁させていただきます」

「さいですか……」

「もちろん、報酬もはずみません。依頼書に書かれたのは偽装ですので。金貨3枚お支払いします」

「!?!」

金貨3枚だと!?!

報酬が6倍になりやがった。

ここで断っても明日いっぱい動けないし、魅力的な報酬を前に引き下がるのはもつたいないか。

「わかりました。お受けします」

「ありがとうございます。ではさっそくですが仕事に移っていただきます」

そういつて執事さんは手元にあったハンドベルを鳴らす。

チリンチリンという音のあとに、部屋にメイドさんがやってくる。

「彼が例の新入りだ。丁重におもてなしなさい。それと、依頼が終わるまで君の名前は『ミーシャ』だ」

「へ？」

「さあミーシャさん、参りますよ」

疑問が頭から離れないまま、メイドさんに連行される。

「それでこういうワケですか…死にたい」

メイドさんに連行されて30分後。

メイド服を着用し、頭にはカツラをかぶり、いわゆる女装した姿の俺がそこにいた。

恐ろしいことにメイドさん達のメイクによって、パツとみただけでは男だとわからないレベルまで偽装されている。

メイク中に聞いた話では、俺の役目はメイドとしてご子息と付かず離れずの距離を確保し護衛することらしい。

武器と防具の携帯はできず、有事の際は魔法頼みとのこと。

まあ危険があると決まったわけではないが、式典が終わるまでは気を抜かないようにと釘を刺された。

「よくお似合いですよ、ミーシャさん」

この屋敷のメイド長をやっているスザンナさん。

明日までこの人が現場での俺の上司となる。

「今日は慣れるためにも、一日その姿でお過ごしください。メイドの仕事を任せるのは、まあ無理でしょうけど当日坊ちゃんを抱いて歩く必要があるのです、今から顔見せに参ります」

「わかりました」

スザンナさんに連れられてやってきた部屋には、赤ん坊をだく綺麗な女性が一人と傍に仕える数人のメイドがいた。

「奥様、こちらが新入りのメイドで名をミーシャと申します」

眠る赤ん坊を抱えたまま、奥様と呼ばれた女性がこちらを向く。

「そう、あなたが『新入り』の子ね。この子のお守りをよろしくね？」

正体を知るもの以外の前では喋るな、と言われてるためコクンと首を縦に振って了承の返事をする。

今のところ俺の正体を知るのは、領主とその奥さん、執事にメイド長と、共に赤ん坊の世話をするメイドだけだ。

「ここでは喋っても構わないわよ。それであなた、赤ん坊を抱くのは大丈夫？」

「はい、奥様。知識としては知っております」

「あら、見た目は女の子なのにやっぱり声は男の子なのね」

言わないでください、恥ずかしいです。
と、抗議するわけにもいかずうなだれる。

「ふふつ。じゃあ試しにこの子を抱いてもらおうかしら。気をつけるのよ?」

そういつて赤ん坊をゆっくりと差し出す。

赤ん坊の抱き方は確か、肘を大きく使って頭と首をしっかりと支えるようにすればいいはず。

一般的な横抱きとなる形で赤ん坊を受け取る。

「そうそう、しっかりしてるわね。それなら明日も安心だわ」

「明日の式典でも、俺は何かやるんですか?」

「ええ、広場での披露の際にあなたが抱えて移動するのよ。私もあの人も近くにはいるけれど、来賓を迎えないといけないから息子に構い続けるのが難しいわ」

「なるほど、そのための護衛ですか」

「そうよ、明日という日が無事に過ごせるように頑張ってちょうだいね」

「わかりました」

腕の中で眠る赤ん坊の体温を感じながら、明日は何事も起きませんようにと願わずにはいらなかった。

その日は、執事さんと明日の打ち合わせと赤ん坊の世話で一日が過ぎた。

オムツ代わりの無駄に吸水性に優れた謎の素材にお目にかかったり、使用人達との食事で居場所がなかったり、自分の名前を呼ばれても誰のことかわからなかったり…

そんなこんなで女装したまま就寝にいたる。

夜間レッスンという名目で、メイド長のスザンナさんの部屋に今日だけ相部屋にしてもらっている。

やっと心休まる場についてほっとする。

「なんとか仕事をこなしてるようで安心しました。その調子で明日もお願ひしますね」

「一日がこんなに長く感じるとは思いませんでした」

「ふふ。こんな機会はもうないかもしれませんが」

事前に知っていれば一生なかった機会ですけどね。

就寝前に、明日のリハーサルをかねて、人前での歩き方や礼などの作法について一通りレクチャーしてもらった。

もつとも、にこにこして赤ん坊を抱き続けるだけの簡単なお仕事ですと言われればそれまでだが。

何事もなく夜は更け、そして迎える翌日。

「さあ起きなさい。今日は忙しいわよ」

メイド長にたたき起こされる。

時間は朝5時といったところか。

余った戦力を無駄にする気はないらしく、世話係として駆り出された。

赤ん坊の世話を交代で寝ずの番をしていた娘達と交代し、依頼の終了となる本日いっぱいまでこの子の世話をすることになった。

赤ん坊の世話はもっと手がかかるものだと思っていたが、いざ始めてみると急にぐずりだすことがなく落ち着いて世話することができた。

当然、お腹がすいたり、おしめを換えてほしいほしいときなどは泣き出す、起きているときは抱きかかえていれば大人しくなっていた。

その様子を見た他のメイドには仕事を丸投げされるわ、メイド長からは就職しないかと打診がきたり、もちろん断ったが。

そんなこんなで午前を過ごし、いよいよメインイベントがやってきた。

街では朝からお祭り状態で、先日利用した市場などは大盛況のようだし、ギルドも街中の治安維持に一役買っている。

街の中央部に近いところには、こういった行事にも使える広場があり、そこで赤ん坊のお披露目があるので、領主と奥さん、執事以下護衛を引き連れて外出する。

このお祭りは、領主からの便宜が図られており、税も期間中は撤廃され、何事にも勝る盛り上がりとなっている。

仕事中でなければ、なけなしの路銀をぎりぎりまで使い込んでいたに違いない。

セットされた会場に到着し、領主と奥さんが他の都市からの使者が

からお祝いを受けている。

やはり、大きな街となると他の自治領とも深い関係にあるのだろう。

正午を回ったあたりで、領主からの演説が始まった。

「本日は、我が息子のために集まってくれてありがとうございます。諸君の祝福を受けて、きっと健やかに育つことだろう。その礼についてはな

んだが、今日は思う存分楽しんでくれたまえ」

広場にいつぱいに広がる声。拡声器でも使ってるのかと思っただが、どうやら執事さんが魔法を使って声を拡大してるらしく、領主のすぐ傍に控えているのが見えた。

2分ほどの領主の演説を受けて、住民達の盛り上がりも最高に達した。

あちこちで歓声があがっている。

「では、これより息子のお披露目をしようと思う」

奥さんに近寄り、抱えていた赤ん坊をゆっくりと渡す。

ここまで泣き出さず、大人しかったので問題なかったが、大勢の人の前にでてでも大丈夫だろうか。

赤ん坊を抱えた奥さんが、領主と並んで住民の前に出る。

周り中から、赤ん坊を祝う声が聞こえ、その混乱に備え護衛の者たちも目を光らせている。

人々が入れ替わり立ち替わり、祝言を投げかけては離れていく。

この街の人々に愛されていることがよくわかる光景だった。

幸せそうな笑顔を浮かべる領主夫妻、お披露目を終えようとそろそろ解散かと思われたときそれは起こった。

「……………！？危ない！！」

周辺の護衛の一人が声をあげる。

瞬間、領主に向かって人ごみから短刀が投擲される。

「疾ッ！」

声に反応して領主に近寄った執事さんが、手刀で短刀を叩き落とす。

その騒ぎに気づいた他の護衛が周辺を固め始める。

執事さんが彼らに指示を出し、不届き者を探すよう命じ、自身はその場に残った。

執事さん強かったんだな。

素手で刃物を防ぐとか真似できそうにない。

この波乱の最中、俺はどこにいたかという赤ん坊のお守りから解放され、後ろのほうでのほほんと祝言の様子を眺めていたのでこの騒ぎには参加しなかった。

そして、人々の輪から一人足早に離れていく小柄な人影を見つけた。

追いますか、追いませんか？

そんなことは他の方にお任せします。

そうしてその場に残っていると、執事さんに声を掛けられた。

「そこにいましたか。予定より早いですが、屋敷に戻ります。あなたはご子息の護衛を、旦那様と奥様は私が受け持ちます」

わかりました、と返事のかわりに大きく頷く。

急な騒動に泣き出した赤ん坊を奥さんから受け取り、あやしなから屋敷への道を歩く。

前を歩く執事さんの後を領主夫妻が、最後尾に赤ん坊を抱える俺。それに周辺を数人の冒険者の護衛が付いている。

周辺に睨みを利かせる執事さんがいれば、もう大丈夫じゃなかろうかと思いつつ、何が来ても対処できるように魔法による強化を始めしておく。

『我が力は増大す：マッスルインラージ』

小声で詠唱を済ませ、体に力がみなぎるのを感じる。

少々メイド服がきつくなった気がするが、裾の広い物を着ているので周りには気づかれないだろう。

ムキムキなメイド姿なんて想像したくない。

ワンサイズ上を頼んでおいてよかった。

詠唱してから3分。

人が少なくなってきた通り。

そろそろ重ねがけの頃合いかなと思っていると、執事さんが振り返り、袖口から短刀を取り出し傍の路地に向かって投擲する。

すげー忍者みたい、と思った瞬間金属音が響き、打ち払われた短刀が転がって路地の暗がりから男が現れた。

「ここまでの手練がいるとは予想外だったが、使えそうなのは一人か」

顔を布で隠した長身の男性。

「……………」

背後に領主夫妻をかばいつつ、無言で短刀を構える執事さん。
あの細身に何本仕込んでるんだろう…

「退屈してたところだ、尻拭いとはいえ少しは楽しませてもらうか」

そういつて、男が片手を振るとドサリと人が倒れる音がして、護衛についていた冒険者が全員地に臥していた。

「これで邪魔な雑魚はいなくなった、貴様を消すまで後ろには手をださんよ。さあ死合いといこう」

宣言とともに、武器を抜く暗殺者らしき男。
どこから出たのか、右手に一振りの刀、左手には3つに分かれた鉤爪を装着し、執事に対して殺気をぶつける。

ところで、なぜ俺は無事かというと女装したせいなのか、非戦闘員とみなされたのか放置されているおかげだ。
確かに、武器も防具も持ってないからな！
普通に護衛していたら、傍にいる冒険者達のようになっていたらう。

なんだか人外の戦闘が始まりそんな気配を前に、夫妻に近寄って、執事さんが変わって励ます。

「大丈夫です、あんなに強い執事さんですからきつと勝ちますよ」

それに最悪、以前使った『アイシクルエッジ大量殺戮バージョン』
を打ち込んで逃げる隙だけでも作ってみせる。
そう言つて、抱いたままの赤ん坊を奥さんに預けた瞬間、背後で殺
し合いが始まった。

第二十二話 進む舞台に 笑う鬼

一方的な宣言から、戦いが始まった。

そして、その光景は俺に信じられない事実をまざまざと見せ付ける。

それは、ただ凄かった…

下半身をバネにして飛び出す速度は、俺が反応できるようなものでなく。

振り下ろされる武器が鳴らす音は、空を裂くような勢いで。

そして、叩きつけられるプレッシャーに心を驚づかみにされていた。その力は、同じ人間とは思えない。

俺だけが弱いわけではない。

俺が住む世界の皆が等しく、この世界では弱者に分類されるだろう。おそらく力の限界が違いすぎるのだ、この世界で人が到達できるその限界が。

執事さんと暗殺者が交差するたび、俺の目には見えないが、幾度か応酬があるのだろう。

鉄と鉄を打ち合わせる音が響き、その音だけが何が起きているのかを教えてくれる。

執事さんの振るう腕が霞み、止められるのは三叉の爪。

後にやってくる斬撃を、短刀を手放した別の短刀で受け流す。

ときおり繰り出される体術は、素で受ければ骨が折れそんな速度で、それをお互いが華麗にかわしていく。

声を出すこともできず、その場に立ちつくしているのは俺だけでは

ないのだろう。

執事さんの実力を知るであろう、領主夫妻も同様に立ち竦んでいる。殺し合いの行方は、永遠にわからないと思われたが、何度目かの打ち合いで暗殺者の爪が、執事さんの腕をかすめた。

そのまま、集中が途切れた執事さんの防御を掻い潜り、暗殺者の放つ回し蹴りが執事さんの腹部にクリーンヒットする。

「っ…ぐっ…ゲフツ、ゴホツゴホツ」

痛そう。

いや、あんなの受けた内臓がどうなるかなんて想像したくない。痛みをこらえて、膝をつくが、まだ顔は前を向き武器を構える。

力の差を知りながらも、なお戦おうとするのは、忠義のためか、ただ生き延びたいからか。

「なかなか磨き上げてあるな、ご老人。経験が錆付いておるのがちと残念だな」

勝利宣告のように悠々と告げる暗殺者。

次、武器を振り上げたときが執事さんの最後だろう。

このままでは、そう、このままだったら。

何も、今までずっと意識が吹っ飛んでいたわけではない。

もともと、赤ん坊の泣き声が聞こえてこなければ呆然としたまま、この戦いを眺めていたかもしれないが。

あいつを止めなければ、次は俺達の番だ。

狙いが俺達全員を殺すことかどうかは不明だが、碌な事じゃあないはずだ。

あんな化け物相手にちんたら詠唱なぞしては、アツと言う間も無く、首と胴が離れてしまう。

執事さんが抑えてくれている今しかチャンスはない。

さて、俺はこの場でいったい何ができるのだろうか。

今使える攻撃手段は、兎にも避けられかねない初級の攻撃魔法『フアイアーボール/アイスエッジ』

素手で近寄るのは絶対にご遠慮願いたい付加魔法『エレクトリックスキン』

何事にも力は必要、自己強化魔法『マッスルインラージ』
旅のお供に『ライト』

使えるかわからない『キュアウーンズ』

そして、なんちゃって改変魔法『アイシクルエッジ』

あとは、新しい魔法を作りだすくらい…

退くことは許されない、まず逃がしてもらえないかわからないし、何より一日世話した赤ん坊が俺の後ろにいるんだ。

この人達はもう他人じゃない。

この人達に何かあれば、俺の打たれ弱い心に大きな傷が残るのは明白。

故に

『汝が力は増大す：マッスルインラージ』

「ん？貴様」

『汝が纏うは紫電の鎧：エレクトリックスキン』

「魔術師か！」

ただ一人、奴を打ち倒す可能性のある彼に、最大限のサポートを。

「ぐっ…君を雇ったのは正解だったようだ」

痛みに耐えながらも、再び戦いに望もうとする執事さん。
それを見て愉快そうに笑い出す覆面の男。

「あっはっは、これは面白い。まさか女装している護衛がいるとは。見事に騙されたよ」

笑いをこらえるように、それでも自身の優位は揺るいでいないと伝えるように、放つプレッシャーは変わらず話続ける。

「どつやらご老体もまだやる気のようにだし、これは面倒だね。先に『彼女』から潰しておこうか」

途端

周囲の気温が下がったような

そんな感覚に襲われる。

首筋から汗が流れだし、寒気が止まらない。
布に覆われた顔から見える目に射抜かれて、すぐに逃げ出したい衝動に駆られる。

やばい、やばい、これはまずい。

おそらくこのままでは、殺される

意識が遠のきそうになったとき、執事さんが奴の視線を遮るように立ち上がる。

「私の記憶違いでなければ、私を消すまでは後ろに手出しはしないのではなかったですか？」

「ふふつ。いやあそうだった、そうだった。これではどちらが年寄りかわからないか」

もう一度愉快そうに笑い、そして俺を襲っていたものが掻き消える。あれは、奴の殺気なのだろう。

俺に向けられていないときでさえ、あの重圧なのだ。とても耐えられたものではない。

「しかし、これ以上邪魔をされるとそれこそ面倒だ。約束を忘れてしまうくらいにね」

「ミーシャ。あとは下がりなさい、次は遅れをとりません」

かっこよく決めたつもりですか、執事さん。

それ、めちゃくちゃ決まっていますよ。

こちらに向けた笑みを、今度は鬼気とした表情で刺客を睨みつける。

「なるほど、確かに。先ほどよりは楽しめそうだ」

俺の魔法を受けた執事さんの体は、以前よりもバランスが取れた体形になり、その表面には紫電の閃光が弾ける。

「ええ、若い頃に戻ったようです。……今度はこちらから参ります」

そして殺し合いの第二幕が始まった。

第二十三話 眠れる獅子

昔、疑問に思っていたことがある。

ここにあるゲームがあるでしょう。

勇者は を唱えた、攻撃力が二倍になった。

こういったデータの世界では、魔法は結果だけが影響していた。もし現実にかかるなら、それは概念の魔法となるだろう。

しかし、俺が使った魔法『マッスルインレンジ』は、何も攻撃力を上げる概念魔法ではない。

文字通り、筋力を強化する魔法である。

単純に考えれば、ステータスの項目にあるSTRが上昇し、物理的な能力が上昇するだけである。

しかし、その考えは間違いであることを知る。

繰り返されるのは疾風と見紛う一撃。

それは攻撃力が上がったという結果が原因ではない。

踏み込みの速度、体が作り出すバネによる反発。

さっきまでとは比べ物にならない威力、剣筋となって執事さんの短刀が、暗殺者に迫る。

暗殺者はそれをぎりぎりかわし、返す刀を突きたてようとするが、それも俊敏な身のこなしで回避する。

攻撃だけでない。

戦いにおける全ての力が向上している。考えてみればその通りだ、今まで荷物運びにしか使っていなかったが、あれは腕だけを強化していたわけではない。人の体は全体でひとつの役割を果たす。あの魔法は、腕から肩、腰、そして足にいたるまで作業に必要な力を強化していた。

故に、筋力を増せばいいと単純に考えて使った魔法は、執事さんの能力を数段も引き上げる。

「体が軽い、とは比喻かと思っておりますが、実感してみるとその表現はぴったりでですね」

「ふうん。僕は『体が重い』と思ったことはないけどね」

「年をとれば嫌でもわかりますよ」

皮肉を返し、再び攻撃が繰り出される。強化された身体を理解し、先ほど以上の速度で男を翻弄していく執事さん。

俺がかけた魔法は、それだけではない。雷をまとった体が繰り出す体術は、防がれても少ないながらもダメージを伝える。

伝導率の高い武器であれば、それすらも電気の通り道になる。その証拠に、短刀を鉤爪で受けるときに僅かながら眉を顰めている。

これなら勝てる。

実際、俺がやったのは二つの魔法を掛けただけだが、あの人外バトルに水を挿してやっただけで大金星だ。

と、浮かれたのが悪かったのかもしれない。

「ぐうっ…」

さつきまで敵を圧倒していたはずなのに、動きが止まる執事さん。一体何があつたんだ。

「ふう…楽しい時間というのは、長続きしないものですね」

「な、なに…？」

「よく持ったほうですよ、毒を受けながら戦うのはつらいでしょう。そろそろあきらめて死んでくれませんか？」

ど、毒！？

そんなもんいつの間に使いやがったんだ。執事さんを見ると、片腕を支えている。

なぜ、こんなことに…

「まあ冥土の土産っていうのかな。ネタばらしすると、この爪にはちよつとした毒が塗ってあってね？まあすぐ戦えなくなったらつまらないから、徐々に痛みが増していくのを使ってるんだけど」

それがようやく限界に達したんだ、という言葉聞いて思い出す。

あの傷は、戦い始めてすぐ受けたものではなかったか。

それはつまり、苦痛の中ずっと戦い続けていたということ。

俺が援護したときには、すでに無視できない激痛だったのではないか…？

「執事さん…」

耐え切れず、声をあげて叫ぶ。
しかし、帰ってくるのは静止の声。

「下がってなさいと、言った、はずです」

動かなくなった片腕をあきらめ、残った腕に武器を構え、男と対峙する。

垂れ下がった腕からは、ポタポタと血がたれて、地面に染みを作る。その色は、真っ赤ではなく、黒く濁った色をしていた。

「…幕引きと参りましょう。騎士は破れ、王が倒れる。これが僕が送る物語です」

「すみませんが、それでは面白くない。騎士は勇敢にも刺客と共に散る、そう変更してください」

それに無言で答え、男は命を刈り取るために刀を振るう。
力ではまだ負けていない。

その刀をしっかりと短刀で受けている。
しかし、その後姿はあまりにも弱い。

痛みが増すというのは、おそらく傷口が壊死していく毒なのだろう。
神経毒であればすでに戦いは終わっているだろうが、このままでも詰みだ。

考える、俺。

INTの高さを生かすのは今しかないだろう！

俺の手持ちのカードでの現状の打破は、はっきりいって…無理だ。
ならば、作るしかない。

いくつもの案が浮かんでは、実行不可とされ消えていく。奴に効く攻撃魔法が思い浮かばない。

では、支援魔法は？

肉体の強化は済んでいるため、あとは概念的な要素を強化するしかない。

それより重要なのは、回復か。

毒を取り除けば、まだなんとかなる、と思いたい。

INTの高さを生かしたのはいいが…

傷を癒すためには大きな制限がある。

俺という特異な存在ゆえの欠点、PIEが1、つまり信仰呪文を扱うことが難しいという欠点である。

なければの1点であるが、いつぞやの30〜40が一般人並という話であれば、この1点はあってもなくても変わらないゴミクス同然な数値であろう。

存在する神様全員に軒並み拒否されても文句は言えそうにない。

しかし、これが可能性1%と同義であったとしても、あきらめるわけにはいかない。

ここで俺がやらなくて、誰が皆を守るんだ。

手出ししたら殺す、という忠告なんて知ったこっちゃねえ。

やめなさい、という静止だって今は聞かなかったことにする。

放っておいたら人が死ぬんだ、少しくらい我が儘言っても許してくれる！

「神様、聞こえているならどうか助けてくれ！あるだけの魔力を持つていてもいい。足りない分は後日請求してくれ！だから、頼む

「！」

『彼の不浄を浄化し、大いなる癒しを与え給え：ピュリファイボデ
イ』

清浄化を示す言葉であるピュリファイ、そして望む効力を言葉にし
神に祈る。

瞬間、今まで感じたことのない倦怠感に襲われ、膝をつく。
ドツと押し寄せた疲労に体がいうことをきかない。

しかし

ガキンツと

目の前に振り下ろされようとしていた刀を、両手の短刀で受け止め
る執事さんの姿が見えた。

「あれだけ虐めてやったのに邪魔をするとはな。忠告を無視したそ
いつが悪いんだぜ？」

「もとより、口先だけの言葉など信用する必要はないでしょう。そ
れに、あなたの相手は私です」

外見ではわからないが、腕が動いているのを見ると、無事に傷が癒
えたのだらう。

これでもう、安心 できる。

「執事、さん、負けないで、ください、ね」

「ええ、あとはお任せください」

その声を聞いて、安心してしまい意識がゆっくりと遠のいていった。

そして気を失う直前、懐かしい声を聞いた気がした。

第二十三・五話 奇跡を鳴らす齒車

side:執事

「さて、あなたの存在は目障りなので、そろそろお帰り願えませんか？」

もつとも、生かしておくつもりはありませんが。

今日は運がよかった。

高ランクの冒険者が来賓の使者や、街道の警備に出払っていて、それでもましな者を超越するようにギルドに頼みはしましたが、それでここに来てくれたのがこの子で。

どこの雇われ者かわかりませんが、これを相手にするのは並の冒険者では到底無理でしょう。

かくいう私も、彼のサポートがなければ同様でしたが、おかげで旦那様を守ることができる。

それにしても、正体不明の毒を浄化し、他のダメージまで取り除くとは……

「あーあ、もうめんどくせえ。遊びは終わりだ、仕事だけ済まして帰らせてもらっせ」

口調が変わった男がそう呟いて、武器をしまう。代わりに、懐から取り出されたのは…暗器？

「本来は、攫って来いって話だったんだが予定外の邪魔が入ったんだ。次策で勘弁してもらっせきゃねえよな」

攫う？次策？やつが言っているのは…まさか！？

「口先だけの話には、ってやつ。俺も同感だぜ」

その言葉と共に、複数の暗器が投擲される。

私にはない、後ろにいる旦那様達にだ。

放たれた凶器は直線ではなく、歪んだ軌道を描き突き進む。

ひとつは短刀で叩き落す、さらに短刀を投げることでひとつの軌道をそらす。

が、二つ。

残った二つが狂いなく、背後の標的へと通過するのがわかった。

なんとということだ。奇跡的な働きを見せた彼も、他の冒険者と同じように今は眠っている。

頼れるものはもう…ない…

聞こえてきたのは、チィ、という舌打ちと空を震わす音だった。絶望に染まったまま、振り返った私の目に映ったのは、おそらく奇跡の続きだったのだろう。

side:?????

「久々に街に来たら、こんなことに出くわすとはなあ」

筋骨隆々のスキンヘッドの大男が、手にした獲物、一般にバトルアツクスと呼ばれるものを肩に担ぐ。

足元には、ひしゃげた暗器がひとつ。

「あなたは永遠に出てこなくていいのよ」

「えー。ひどいわー」

「違う、違う！私が言ったのは、この唐変木のことよ」

麗しい二人の女性の前には、氷のオブジェに阻まれた暗器がひとつ。

「ああ？何もんだてめえら…ここいらには人避けて張ったはずだが」

イライラが限界にまで募った男の質問に、飄々とした態度で答える大男。

「おお、あれには苦労したぞ。なんせ歩いてても歩いてても目的地に着かんかったからな」

「私が解除しなきゃずっとあのままだったんじゃないの、あんた」
ことあるごとに突っかかっっていく女性と、領主夫妻に話しかけるもう一人の女性。

「ご安心ください、これより私達が護衛につきますので」

「あなたたちは…?」

領主の質問に対し、しばし悩んだようだったが、彼女はこう答えた。

「先輩、つてところですよ。そこで眠ってる子達の、ね」

side：黒衣の暗殺者

厄日とは、こういうのをいうのだろうか。

平和に浮かれた馬鹿を始末するのは、楽な仕事だと思ったんだがイレギュラーが二つも混じってやがった。

一つは、標的の護衛が思ったよりもまとまったこと。

こいつを残しておいては、標的の拉致後、楽に脱出することは不可能だ。

ゆえに、始末するのが優先と判断した。

そしてもう一つは、まともな護衛がもう一人隠れてやがったことだ。気配も女っぽかったし、武器や防具もないメイド姿ときた。

そりゃこいつを護衛と判断するのは難しいだろうさ。

だが、こともあるうに見慣れない魔法を使い、戦力を増し、拳句にせっかく戦闘不能直前までおいこんだ爺を復活させやがった。

極めつけはこれだ。

張られていた人避けの結界を通過し、現れた男女3人。いらつくことに、どいつもこいつも邪魔してきやがる。

二次標的の暗殺も失敗となれば、もうここに留まる必要はない。さすがに、格下とはいえ4人を相手にするのは分が悪い。地味なダメージも溜まってるからな、くそが…

「羽虫のごとく寄ってきやがって、興ざめだ。じゃあな、くそ爺。そっちの変態野郎にも、命拾いしたなつつつとけ」

「我々がみすみす逃がすとても？」

「かまわねえぜ？ここいら一帯が吹っ飛んでもいいんならな」

「なっ！？」

「あばよっ、もし次あったら…その時は」

今回の分も合わせて二回殺してやるよ

第二十四話 縁あればこそ

… R … e …… R i …… i n e ……

ぼんやりとした思考の中、どこからか音が聞こえる。

それは鈴の音のように澄んでいて、途切れ途切れだが、女性の声だとわかる。

体を動かさそうとしても、力が入らない。

首から下がどこか別の場所にあると言われても納得してしまいそうだ。

これは金縛りとなのだろうか。

日本語ではない…と思う。

その声は意識すればするほど小さくなり、それにつれて体の感覚が戻ってくる。

思考がはつきりしてくると、先ほどまでの声は消え去り、すぐ近くから別の声が聞こえてくる。

「さっさと起きなさいって、いつてんだろがあああ」

バシヤツつと顔面に液体が降りかかり、パツと視界が開く。

目に映るのは、俺を覗き込むように見ている女性。

視界の違和感から、自分は寝かされているんだと気づく。

「あれ…リゼルさん…?」

おそらく水浸しにされた原因であるリゼルさんは、怒ったような、でも齒痒そうな表情を浮かべている。

「お、おにいちゃん…」

傍にはリゼルさんだけではなく、アンナもいた。ベッドの横に座り込むような形で、手にはハンカチのような白い布を持ち、心なしか疲れているような…

自分はどうやってここにきたのだろうか、あの覆面野郎に襲われてどうなったのか。

執事さんは？領主夫妻も赤ん坊は無事なのか？

そこまで考えたところで、アンナが泣きながら抱きついてきた。

ベッドから起き上がれないため、半ば覆いかぶさるようになっている。

「アンナ、どうしたの？ほら、泣かないでよ」

「ぐすつうう、うわーん」

アンナはなかなか泣き止まず、埒が明かないので、リゼルさんに助けを求める。

「リゼルさん、どうなってるんですか？説明してください、あと助けてください」

「うつさい。心配させた罰として、しばらくそのままにしてな」

聞く耳持たずといった感じで、そのまま部屋から出て行ってしまふ。結局、アンナが泣き止むまで、窓から暗くなった外を見ながらじっとしていた。

それから、体の感覚が復帰し、アンナも落ち着いたので改めて部屋を見渡すと、ここが自分の部屋であることに気づいた。アンナをつれて部屋を出ると、居間のテーブルでリゼルさんの他に、懐かしい人達と一緒にお茶を飲んでいることに気づく。

「お、やっと起きたか。体の調子はどうだ？」

こちらに気づいたアンナの父親であるグランさんが声を掛けてくれる。

「大丈夫です。特に問題なさそうです」、

「そうか。よかったな、なあアンナ」

「まったく、付きっ切りで看病されてたんだから、ちゃんとお礼いなさいよ」

「あら、看病してくれたのはリツちゃんも同じじゃない。よかったわね、リュウジくん両手に花よ」

「最後のは聞かなかったことにしますよ…。看病してくれたことには感謝します。ありがとうございます、リゼルさん。それにアンナも」

アンナの頭を撫でてやると、満面の笑顔を返してくれた。

「はあ…大変だったのよ。あんたが依頼で帰らないのは予想できるけど、祭りの最中に騒ぎが起きても顔を出さないから心配したんだから…アンナが。ちょうど家に寄ってくれたクレア達とギルドに行ったら、寄りによって領主の護衛に行ってるなんて聞かされてびっ

くりしたわよ」

「よく教えてもらえましたね…守秘義務とかありませんでしたっけ？」

「緊急時だったし、アンナの頼みだったから無理でも押し通したわよ。ただちよつと怖がらせたかもしれないけど」

「あら、受付の子泣いてたわよ？」

「そんな柔な子はギルドにはいないわよ」

あいつだ…たぶんあいつだ…

「アンナと一緒に祭りを楽しむつもりで来たら、とんだ大事件だったな。大事件といえば、今回は女装か。現場にお前が見つからなくて焦ったぜ」

「女装のことは忘れてください。不本意な結果なので…それで領主さん達はどうなったんですか？」

「ん？ああ、間一髪だったが、無事館に送り届けたよ。刺客は逃がしちまった。物騒な置き土産の後始末に手間取っちまってよ」

「そうでしたか…」

あの男は仕留められなかったか…
何の目的で動いていたかわからないが、犯罪者側にあんなのがいる
つてのは、俺達にとっては恐怖だ。

「そうそう。領主の執事から伝言があつてな。『元気になったら、是非屋敷にお越しく下さい。一同、歓迎します』だよ」

執事さんも無事なのか、良かった。

そういえば、依頼の件も有耶無耶になっていた。

「体調も悪くないので、さっそく明日いつてきます」

それがいい、と言ってグランさんは笑いながらお茶を飲み干す。

また、この人達に危ないところを救ってもらった。

いつぞやの礼すらまだ満足に返していないのに、やっぱりこの一家には敵わない。

「じゃあ今日はもう休んだほうがいいわ。念には念をいれて、ね」

「俺達はもうしばらく起きてるがな」

「わかりました。それじゃお先に、おやすみなさい」

部屋に戻る前に、グランさんがどこからか酒樽を取り出すのが見えた。

今日の祭りでゲットしたのだろう、抜け目ない人だ。

ベッドに横になり、階下からの声を聞きながらもう一度深い眠りについた。

翌日、執事さんの伝言には時間の指定がなかったので、とりあえず

昼ごろに向かうことにした。

正午の鐘がなる少し前に屋敷の門に到着し、昨日と同じ衛兵の人に顔パスでいれてもらえた。

「ようこそお越しくださいました、リュウジ様」

「…あれ？俺名乗りましたっけ？」

「昨日の援軍の方がお知り合いだということ、その際に確認いたしました」

まあリュウジはどこだと詰問されたのですが、というところは聞き流し今日やってきた目的を話す。

「それで依頼の件なのですが、達成書は頂けますか？」

「ええ、それはもちろん。今回はあなたがいてくれてよかった。改めて御礼申し上げます」

完璧な一礼を披露する執事さんにたじたじになる。

「いえ、そんな。…あの場で執事さんばかりに負担を掛けてすみませんでした」

あの人外バトルのほとんどを、見ていることしかできなかったことを思い出し申し訳なくなる。

「主の盾となり、命を掛けてお守りするのが私の役目でございますから、気になさらないでください」

心からそう思ってくれているのだろう。
気恥ずかしくなって話を変える。

「しっかし、執事さんはお強いんですね。俺、冒険者やってるのが
恥ずかしくなりましたよ！」

実際は恥ずかしいどころか死にたいくらいの実力を見せ付けられた
わけだが。

「私も元冒険者ですよ。戦士と盗賊の両ギルドで腕を磨いておりま
した。いやはや、懐かしい」

「冒険者をやめて、このお仕事に？」

「ええ、しばらく前に。やめたときはA5ランクほどだったでしょ
うか」

おおう、俺の人生目標を超えていらっしやる…ん？

てことは最低このレベルにならないとB1近くにはいけないってこ
とか、信じられない…

「なんでやめちゃったんですか？」

A5なんてきつと高収入バリバリでしょう、と内心想ったので聞いた
質問だった。

「何、つまらない理由ですよ。恥ずかしくて申し上げられません」

「そうですか…」

冒険者の先輩としてのお話に興味はあったのだが、これ以上突っ込むのは無粋だろう。

「では、これで失礼します」

達成書を受け取り、出発を告げる。

「どうぞお元気で。そうそう、執事として就職したければいつでもお越しく下さい。…メイドとしても構わないとスザンナが申ししておりますよ」

「そ、それはご遠慮させてもらいます。じゃ!」

執事さんのところで働いたら、きっとスパルタ教育に違いない。あれは獲物を狙う目だった。

一目散に逃げるように屋敷を後にする俺の背に、「もったいない」という呟きが届いたかは定かではない。

人生の分岐点を一つクリアした俺は、冒険者ギルドに赴いた。

今回の依頼は、冗談抜きで死を覚悟したただけあって、今の俺にとつては大金である金3枚つまり、銀貨30枚に相当する報酬が得られることになっている。

今日村に帰るアラベル一家に借りていた銀貨8枚を返しても、残りなんと銀22枚。これで所持金は合計で銀26枚と少々の銅貨。足取りは軽く、鼻歌交じりでギルドの扉を開く。

受付に座るミルザさんを確認し、達成書を取り出しつつ声をかけようとしたが様子がおかしい。

よく見ると、目が…目が、死んでいる。

今はは受付が一人ではなく、横に座る女性に目を向けるが、露骨に目を逸らされた。

「あ、あの…ミルザさ」

ガタッ。

声を掛けた瞬間、体を震わせつつこちらを視認する。

「あ…あああ…リユ、リュウジさんですか…」

くそっ、彼女に一体何があったというんだ。

こんなに震えて、怯えてしまっているじゃないか！

「その…大丈夫ですか？依頼の報告に来たんですけど」

「は、はははい。全然平気ですよ」

「そうですね、よかったです。昨日ご迷惑をかけたんじゃないかと心配してたんですよ」

「き…のう…？」

ガタガタガタ

何が琴線に触れたのか、ミルザさんは突然震え出した身体を両手で

抱きしめつつ、カウンターに隠れてしまう。

「机ガ…机ガ、パーンツテナツテ…酸ガ…酸ガ……」

これは…しばらくそつとしておこつ。

きつと触れちゃいけない問題なんだ。

ごめんよ、ミルザさん。俺の力が足りないばかりに…

奥から現れたシグナムさんに連れられていくミルザさん。

あんな状態なんだから業務休めばいいのに、大変なんだな。

久しぶりにあつたシグナムさんに、「彼女大丈夫ですか？」と聞いたが返つてきたのは「すぐ使えるようにします」というお言葉だった。

ミルザさん、お悔やみ申し上げます。

結局もう一人の受付の方に報告し、報酬である金3枚と、オブションとしてランクの見直しを通達された。

簡単に言えば飛び級のようなもので、高ランクの冒険者からの推薦があればスタートであるD5からではなく、多少上位のランクから冒険者を始められることができるというものだ。

過去の話から考えるに、ギルドの方針は適材適所というか、実力とランクをなるべく一致させるという方針を採っているのだろう。

なぜこんな話がでたかというのと、俺の素性に探りを入れた執事さんにD5ランクだということが伝わり、過去Aランク入りした人物のコネということでこの話が飛び出したのだそうだ。

執事さん、俺の知らないところで何やってるんですか…

ランクの見直しについてだが、俺としては命大事にの精神で、実力にあつたランクで進みたいんだが、執事さんのようなスペシャリストからの進言でもあるし、悪い話でもないかもしれない。

いい変えれば、執事さんに期待されるということだからな。
だから、少々迂闊かもしれないが、多少ランクがあがったとしても、
下限の依頼を受ければ安全だろうと考え決断した。

「わかりました。そのお話、是非受けさせてください」

第二十四話 縁あればこそ（後書き）

恒例にする予定の雑談コーナーです。

まず、感想を書いてくださる方々へ感謝を。

お手数にも関わらず、誤字脱字の指摘をいただき真に感謝しております。

じゃあ推敲しろよ、という話なんですがおそらく今後もこのような感じだと思います。

ストーリーや設定に関するものもいただき、返答するときは矛盾ができないようにとビクビクしておりますが、改めて自分の作品を考えさせられ楽しいです。

そして、読者の皆様へも感謝を。

お気に入り件数がついに4桁になりました。ちょうど漫画でいうと一冊目が終わったような場合で4桁になったのでお祝いでもしたい気分です。

本当にありがとうございます。

自室から出るあたりの矛盾を修正。

では失礼します。

<ここで一応終わり>

最後にちょっとだけ重要な話なのですが、ちょっとだけ興味のある方だけ読んでください。

この物語もとい、私が書く物語はプロットが存在しておりません。

書き始めた頃に妄想していた初期設定とエンディングへの愛を胸に、あとは物語に自身を自己投影するようにして書いております。つま

り、作者の心理状態や考え、常識によって物語の R - 15 と残酷描写が自然と変化すると思います。

現在は、『のほほんとした、けどちよっぴり熱い展開があるよ』といった感じで念のためにつけた R - 15 はほとんど登場しないとと思います。まあそれでいいという方が残って読んでくださるんだと思います。ラッキースケベ及び回想や噂の範囲での鬱展開を加えるように意識すべきかを悩んでおります。

ちなみにこれを加えると、私が嫉妬により主人公を殴り殺したくなるのと、悪役達のイメージがより深まるといった効果が見込まれません。

アンケートを採って明確な方針を出すわけではありませんが、別の機会で感想を書かれる際には、文末に<エロもいいよ>や<鬱いれんなし>など一言頂ければ、物語に変化が現れるかもしれません。

結局は私の気まぐれなので、『あーこの作者はこんなこと考えながら書いてんのな』くらいに聞き流さって結構です。ではこれにて。

第二十五話 出る杭はなんとやら？

通された部屋は冒険者ギルドの奥。

通路をしばらく歩き到着した部屋は、会議室というのがもつともしつくりくるだろう。

中央を囲むように配置された机があり、しばしお待ちくださいと言つて受付の人が退室する。

一体何をするのかとわくわくどきどきしながら椅子に座って待つていると、少ししてシグナムさんと初めてみる職員が数名入ってきた。一応、席を立てて他の人が座るのを待つ。

「楽にしてくれて構いません」

とシグナムさんから声が掛かったので、静かに椅子に座る。

ふう、と一息ついてシグナムさんが話し始める。

「まず、今回の騒動についてお話ししましょう」

なんの関係があるのかと疑問に思ったが、話し終わるまで黙っている。

「調査の結果、今回の騒動はこの街の領主を狙った他国の侵略行為である可能性が高いことが判明しています。犯人の目的は、式典および祭りの混雑に乗じて街に侵入し、領主のご子息を拉致しての脅迫、もしくは領主の殺害によってこの街の政治を混乱させることでしょう。犯人の能力が、冒険者の基準ですが、Aランク以上であったことから多少なり大きな組織からの差し金であることに間違いありません」

確かに、あんな化け物を手下に持つくらいだから、そこらの個人が相手じゃないよな。

「山賊や盗賊くずれの組織がこの街を狙うとは考えられません。となれば、やはり国と呼べるほどの組織が関わっていることは否定できません。今回の事件で、最悪の結果から領主を守り通した功績を見ても、あなたのD5ランクという状態を放置しておけません。もっとも実力がなければ、このような措置は採らないのですが、あのローレントからの推薦もあったのでね」

聞かない名前だが執事さんのことなのだろうか？手を上げて質問をする。

「シグナムさんは執事さんをご存知なんですか？」

「…ええ、彼とは同期です。本来なら私よりもギルドに有用な人材なのですが、こっちの仕事をやめてだいぶ経ちます。彼には長くてほしかったのですが…昔のことです」

この年代には化け物しかいないのだろうか。

いや、化け物クラスの人とたまたま知り合っただけだろう。

あんなのが普通の環境で、生きていく自信がない。

「さて、では本題に参りましょう。関連する魔術師ギルドの方からの報告では、少々変わった魔法を使えると聞きました。それとローレントからの報告でも、かなり上位と思われる治癒系統の信仰呪文も…まずはそれらを見せてもらいたい」

肉体強化の『マッスルインラージ』は、その利便性で何度も使って

きた。

初めて使ったときにも、教官の…デビット？さんに見せたと思う。

「わかりました。じゃあいきます」

『我が力は増大す：マッスルインラージ』

詠唱を済ませ、多少筋肉質になった身体を…え、披露するの？

もともと身体に自信がないからあまり脱ぎたくはないんだけど。

と、どうでもいいことを考えたが、どうやらその必要はないようだ。

名前を知らない職員の人が質問してくる。

「それは筋力を増やす魔術呪文で合ってるね？」

「はい、そうです」

「君は親族に研究者でもいるのか？」

「いえ、研究者と呼べる家族は特に…」

「では、魔法に関する蔵書の所有についてはどうだ？」

「私的財産は今のところ、装備品くらいです…」

住む所すらぎりぎりだからな！本なんて一冊も持ってないぜ！

…ああ実家が恋しい。

「…では、君は知識をどこで手に入れたのかね。そもそも魔法とは一般に広まるものではない。魔法とは真理を追究し、研究し、実験

し、理解して始めて身につくものだ。我々魔術師ギルドに所属するものは、そうやってモンスターに対する力を手にしてきた。強大な力ゆえ、一定の管理を施しながらだ」

「……」

返答できない。

言われることはもっともだ。

活字印刷によって本が量産されるわけでもない。

ネットによって情報が駆け巡るわけでもない。

そんな世界では、個人の武勇以外にも、知識は大きな力となる。

ゲームでスペルブックがくそ高い値段で売られる理由が現実になったら、おそらくこれがひとつの原因になるんだろう。

正直に答えるなら、自分の生まれは異世界で、この身一つでやってきました、異世界では皆知識人なんです〜と言ってしまえばいい。

その結果どうなるかは、想像するしかない。

物事を予想するときは、当事者になって考えてみよう。

まず常識は、文化や世界情勢によって決まるので、この世界の場合だと…

弱肉強食

今物騒な単語が真っ先に思い浮かんだが、いや流石にそこまで世紀末じゃないって。

モンスターが闊歩し、生存圏が狭いつてところだけみたらまさにその通りだけど。

…まず、俺にとっていいと思えることを挙げよう。

とりあえず人々は協力して生きている。

国家という枠組みがあつて、ギルドが人類救済を目的に設立・運営されている。

今まで出会った現地民は、非常に良い人ばかりだ。

次に、都合の悪い点。

身近に死が存在する。

モンスターの脅威についてまだ情報不足だが、ギルドの図鑑でみたドラゴンとかが出たら俺死ぬしかない。

盗賊または山賊に身をやつす人も大勢いる。

極め付きに、化け物じみた強さの悪人もでてくる。

以上の点を総合して、この世界が俺に優しいか、と問われれば残念ながらNoと答えるしかない。

良い人もいるけど、たまに悪い人もいるよ！ではなく、悪い人もいるけど、良い人だっているんだよ！と少々必死になる感じの危うさだな。

そこで、ちょっととした奇跡とも言える異世界からの訪問者の立場がどうなるかと言えば…

観察、調査、実験。

観察はまだいい、しかし調査になれば持っている情報の貴重さゆえに捕まるに違いない。

情報を引き出す手段が善意によるものであれば、まだ救いがあるが、古来より効率を求めた方法は恐怖と暴力によるものと相場が決まっている。

そして、同じ人間かどうかすら疑われ実験動物扱いにされれば、この世界に生を受けたことを神様に恨むことになるだろう。

結果

回答は虚偽、もしくは沈黙が最善と思われる。

質問されてから、ここまで考えるのに約二分。
いきなり一発芸をやれと言われたときの心理状態で、よく考え、
そして相手もよく二分待つてくれたものである。

「秘密でー…す…っっていうのは」

「君は私をおちよくってるのか」

「すみません、わからないんです」

ええ、どう答えればいいかわからないんです。

嘘を言っても怒られるので、本当のことをいいました。
だから許してください。

第二十五話 出る杭はなんとやら？（後書き）

12月6日、感想欄にて執事vs暗殺者の戦闘に対するご意見の返答を書きました。

ネタバレではないと思うのですが、設定に少し触れることになるので興味がある方はご覧ください。

そして私の文才のなさに慄くがいい。

第二十六話 兵どもが夢の跡（前書き）

今回やらかすかもしれません。

悔いはないのですが、後日なかったことにするかもしません。

そもそも一人称視点で伝えたいことを全部書くなんて無理なんやー
ー畜生

第二十六話 兵どもが夢の跡

「そこまでしておきなさい」

鶴の一声。

シグナムさんによって、それ以上の追求が止められる。

「しかし、これは重大な」

それでもなお、食い下がろうとする魔術師ギルドの職員だったが、シグナムさんの強い視線を受けてあきらめたようだった。

「本来の目的は、彼の素質を見極めることです。我々も暇ではありません。必要なことを済ませてしましましょう」

そしてこちらに向き直り、再び質問が始まる。

「さて、次の質問です。ギルドカードを見せてもらっていいですか？」

「ええ、どうぞ」

言われるまま、カードを手渡す。

手元に届いたカードを一瞥し、その後、こちらをまたじっと見るシグナムさん。

免許証じゃないんだから、そんな見比べても意味ないですよ。

「リュウジさん」

「は、はいっ」

「あなたは、自分のステータスを把握していますか？」

「ステータスですか？えっと、適当なんでINT60とPIEが1なのと、あとはSTRが30だったのは覚えてますけど…」

「そうですか。では、改めてご自身のカードをご覧ください」

手元に戻ってきたカードを言われるままに確認する。

なにかの抜き打ちテストなのか？

ステータス忘れてたら評価点減点！とか。

そして、ステータス表を見てその変化に気づく。

「お、おおおおお」

先ほど自分がいったようにPIE1というのは印象に残っていたから間違いないはずだ。

それが今、カードには2と表示されている。

他にもキリのよかった数字に変化が現れている。

「その様子を見ると、成長については未確認だったようですね」

ステータスの増加、成長とはつまりそういうことなのか？

少しだけ強くなったのだろうか？

「まあ成長についてはどうでもいいので本題に移りますよ。報告にあった上位の信仰呪文。あなたのその『ステータス』で扱えるものなのですか？」

扱えるかと聞かれたら、一度使えたのだからまた使えるのが当然でなからうか。

もちろん、絶対に気絶してしまうが。

「あの時は、使った途端倒れてしまったので、使えると思いますが実演するのは遠慮したいです」

なので正直に答える。この場で『ピュリファイボディ』を使うのは嫌だと。

「ふむ。では他の信仰呪文で構いません。下級のものを何か実演してもらえませんか？」

「あの…実は、信仰呪文はまだ『キュアウーンズ』しか知らなくて、それに使ったこともないんですけど」

「それでいいでしょう。確認にはちょうどいい」

そういつてシグナムさんは立ち上がり、俺の傍に来て、親指の腹を口に当てガツッと噛み切った

うおおおおやめてくれええ

ぞくぞくするううう

全力でもだえている俺を無視して、その怪我した手をこちらに伸ばす。

「どうしたんですか？これに対して実演してみてください」

ケロツとした顔をしたまま、ほんとに不思議そうに言うシグナムさんを見て、多少は落ち着いた。

「わかりました、ちょ、あんまり近づけないで」

こんなのはさっさとやってしまうに限る。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒せ：キュアウーンズ』

以前、クレアさんが見せたのと全く同じ詠唱だ。

しかし、一向に傷は消えず、魔法は発動しなかった。

「あれ？ちよっと、どういうこと？」

「ふう、やはりこうなりますか」

少し、ホツとした様な声で今度は自分で詠唱し傷を癒すシグナムさん。

当然、詠唱は一字一句同じものを使っていた。

「あの…使えたんですよ…ほんとに」

やったはずの宿題を忘れた小学生のように情けない声で、精一杯の主張をする。

ほんとに使えたんだよ…ちゃんと気絶したし、使えてなかったら今頃死んでるしさ…

「いえ、こうなるのはむしろ想定されていたことです。あなたのステータスでは、本来信仰呪文に適正があると考えるのがおかしい」

あーやっぱりゴミクスだったかー1は。
2になったところで変わりませんよね…

「じゃあ、なんで気絶する羽目になったんでしょうか。あれは呪文の反動かと思ってたんですけど…」

「さあ…なにぶん、前例がないもので…ただ」

「ただ？」

「神が見てくださったのかもしれないね」

ほんとにいい笑顔で、そう宣言するものだから本当に神様がきまぐれで助けてくれたのかと思うほどだった。

「さて、武芸に関しては素人との話なので、これで質問は終わります」

おお、何度も度肝を抜かれたけどやっと終わったか。

「どうでしょう、彼の能力は？」

シグナムさんの問いかけに、傍にいた他の職員が答える。

「D4だ」

「C5」

低い方を言ったのが今まで聞いてるだけだった職員。

高いほうをいったのが、先ほどの魔術師ギルドの職員だ。

「ふむ…では私はC4といたしましょう。間を取ると…D1相当ですか」

「まあ妥当なところか。如何せん基礎が弱い」

「ランクだけ与えて魔術師ギルドで引き取っても構わんのだぞ？」

「それは本人の自由意志です。越権行為は慎むように」

話し合いはあっさりとしたものだったが、これで俺のランクが決められたのだろうか。

「リュウジさん。あなたのランクはD1に変更されます。その経緯で、現在の評価点も初期に戻ります。D1であれば、まだ危険性の低い依頼にも手が届きます。己を磨き、よりギルドに貢献してくれることに期待します」

「わかりました。できるだけ頑張ります」

「よろしい。ではギルドカードを書き換えてまいります、カードを渡してもらえますか？」

そう言われ、ギルドカードを渡すように促される。カードを手渡すと、

「では、少々お待ちを」

と言葉を残し、シグナムさんが部屋をあとにする。

「我々もこれで失礼する」

残った職員も、用は済んだとスタスタと部屋から出て行った。

「やっぱり、使えないのかあ……」

机につつぶし、失敗に終わった信仰呪文について考える。

執事さんに使ったはずの信仰呪文は、効力を発揮しさらに気絶までついてきたのを確認した。

考えても考えても、なぜあの時使えたのか答えはでない。

神様の気まぐれなんだろうか。

そもそも信仰心すらよくわかつちやいないのに。

ガチャツと扉の開く音がして、シグナムさんが入ってくる。

「お待ちせしました…何ふてくされてるんですか？」

答えのない謎に悩まされている俺を見て、そう口にだす。

「いえ、世の中わからないことばかりだなあと思っています」

「そんなことですか。私もこの年になってまだ、そのように思っていますよ」

そう言いながら、先ほどまでの離れた席でなく俺のすぐ隣に座るシグナムさん。

俺は爺さんに好かれる体質なのかと一瞬愕然としたが、そんなこと

に気づかず、シグナムさんがゆっくりと話し出した。

「私達は、期待しているのですよ。若い世代が…次の、その次の世代でもいい。いつかこの世界を変えてくれる者が生まれるのではないかとね」

「ギルドの仕事をやっているとね、嫌でも気づくんですよ。この世界がどうなっているのか。私の手が届く範囲がどれだけ狭いかを、嫌でも」

「若者は自分の限界を知らない。どこまでも成長できる可能性を持っている。それは、志半ばであきらめたものにはもう戻らないものだ」

「私達には維持することが精一杯で。だから、いつまでも期待する。私の限界の先に、手を伸ばしてくれる者が現れることを」

「困ったことがあれば、私達を頼りなさい。そうやって若者を導くことこそ、ギルドが果たすもう一つの役目なのですから」

そういつて俺を見るシグナムさんは、執事さんと同じ目をしていた。避けられぬ死を相手にしながらも、「下がっている」と言ったあの時と同じ目を。

シグナムさんが席を立つ。

テーブルに俺のギルドカードが置かれる。

「お喋りが過ぎましたね。どうやら私も歳をとったようだ」

あの馬鹿の影響ですね、と呟きながら部屋を去っていく。

一人になった会議室で、銀色のカードと俺だけが残された。カードに記載されたD1という文字が、やけにはっきり見える。…老人達の願いは、この記号の先に見つかるのだろうか。

その記号を超えたら

俺はこの世界の一員になれるのだろうか

第二十六話 兵どもが夢の跡（後書き）

今回も雑談。

この作品の文章&ストーリー評価をされてくださった方の平均が、文章4pt、ストーリー5ptとなっています。

四捨五入されてるらしいので実際はストーリー4.6ptくらいだと思いますが、概ね好調？なのかなと思っています。

お気に入り登録以外で最も読者の判断を知ることができると思うので、いつ平均が下がるかびくびくします。

それと同時に日間ランキングがBEST2に浮上しております。まあすぐ沈むさ！

感想をくださる方も増えて、感想がなかったころより物語が深くなつたと実感しております。

所詮は素人の暇つぶし小説ですが、ゆえに、俺と一緒に暇つぶししようぜと気楽に発言できます。

ご意見、ご感想お待ちしております。ここまで読んでくださりありがとうございます。

曲名はセーフとのこと以下

俺にこんな話を書かせた元凶 bump of chicken /
ゼロ

第二十七話 物語の始まり

冒険者ギルドを後にし、騒がしい街中を歩き出す。

ところどころで、昨日の事件について話す声が聞こえるが、被害がなかったおかげでそこまで大事にはなっていないようだ。

おそらくは、住民の不安を抑えるように領主が動いているのだろう。良い領主が治めるこの街の人々は幸せだな。

僅かに重くなった財布の感触を確かめる。

なんだかねで時間が過ぎていた。

時間は正午を過ぎ、皆はもう食事をとった後だろうか。

出発する前のクレアさんにお金を返さないと、確か出発は三時前を予定していたはずだ。

遅めの昼食は後回しにして、リゼルさんの家に急ぐ。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

アンナが迎えてくれる。

もう食事を終えたらしく、アラベル夫妻も居間でくつろいでいる。まだ出発していなかったことにホッと、財布から金貨を一枚取り出す。

「クレアさん、これ、借りていたお金です。今までありがとうございます」

キョトンとしたままのクレアさんに手渡し、深々と頭を下げる。

「あら…これってあの時の?」

「はい、おかげで冒険者としてやっていくことができそうです。本当にありがとうございます。お世話になった分も含めて、受け取っておいてください」

そこまで一息で告げると、クレアさんは困ったようにおろおろとしていたが、俺をじっとみていたグランさんが立ち上がり荷物をまとめ始めた。

どうやらグランさんは俺の決意に気づいてくれたようだ。もしかしたら、クレアさんも気づいているのかもしれない。

「おーい、アンナ。帰るぞ。支度しなさい」

「えー!?!」

「えー!?!」

なぜか呼ばれてないリゼルさんまで一緒になって反応する。

突然、実家に戻されることになったアンナは納得のいかない様子で父親に抗議するが、グランさんはそれを軽くあしらう。

「お母さんもなんとかいってよー」

と、今度は母親に助けを求めるが、当のクレアさんはやはり困ったような表情のまま何もできないでいた。

「これでいいんだな、リュウジ」

「ええ、すいませんグランさん」

「なに、元はといえばアンナがいだした我が儘だ。後始末は親の責任だ、気にするな」

そういつて男らしい笑みを見せる。

「ちょっと、どういうことよ!」

店先から急いで戻ってきたリゼルさんが到着する。
お店は大丈夫なのだろうか。

「リゼルさんもお世話になりました」

ペコリと頭を下げる。

もっとも頭を下げられた方は、ついていけずにいた。

「はあ!?! だからどうということよ、なんでアンナが帰っちゃったのよ
」

「ごめんねえ〜リツちゃん。そういうことだから〜」

「それじゃわからないわよあー、もっ」

クレアさんにたしなめられ、やっと落ち着きを取り戻すリゼルさん。

残るのは、もっとも大変な、かわいらしいお姫様だった。

「……………」

無言で俺の服をつかみ話そうとしない。

俺の行為が何を意味するか理解したのだろう。

そんな彼女を引き寄せて、両手で抱きしめる。

今日くらい許されるだろう、俺はお兄ちゃん、この子は妹なのだから。

泣き出しそうなのを必死に堪えているのがわかる。

今まで何度も見せた泣き顔だが、それを我慢するのは認めたくないからか。

「俺、少しは強くなったんだ。冒険者になって魔法も覚えたし。盗賊だって捕まえて、領主さんの子供だって助けたんだ」

ゆっくり、ゆっくりと言いつつ聞かせるように言葉を紡ぐ。

「アンナに助けて会わなかったら、俺はもう死んでたかも…少なくともこうして元気にやっつてるなんて夢のまた夢だと思う」

「…違う…違う、助けてもらったのは…わたしのほうで…」

途切れ途切れに、それでも伝えなければいけない思いがあるのだろう。

もちろん、それは俺も同じだ。

「うん…そうだね。俺もアンナを助けた。非力な俺だったけど、確かに助けることができたんだ」

異世界に来て、襲われている少女を助けるためにがむしゃらになつて。

その結果が今の俺を取り巻いている。

「だから…もう一度守れるように強くなりたいんだ」

その言葉を告げると、伏せていた顔を上げ、涙に濡れた目でしっかりと俺をみてる。

「俺、弱いから、たぶんまたアンナに助けられるときが来ると思う。だからこそ、俺はもっと強くなりたい。今のままじゃ守れないと思うから…」

彼らですら、守ることができないとあきらめ、苦しんでいたのだ。今の俺では、守るといふ言葉すらおこがましい。

「目標ができたんだ。皆を…この世界で知り合った皆を…絶対に死なせないって…」

この言葉は、自分への言葉でもある。

「覚えてる？以前、アンナが俺に言ったこと」

何のことだろうと、俺の言葉に集中するアンナ。

「絶対にこの人を死なせはしない、私の命の恩人が死ぬなんて許せない。何がなんでも助けるんだって。」

「……覚えてる」

「俺も一緒だよ。絶対に皆を死なせはしない、俺の命の恩人が死ぬなんて許せない、何がなんでも助けてみせる」

そう、あの独白を聞いて、まず心に浮かんだのは大切な人達の顔。

「だからさ」

だからこそ俺は

「今度は俺の」

この優しくも悲しい異世界で

「我が儘を聞いてくれないかな」

我が儘に生きていくのだろう

第二十七話 物語の始まり(後書き)

〈完〉

* * *
うそです
+ * * *
n | n
+ (ヨ) * * * (E)
Y Y * *

雑談コーナー

また音楽聴きながら書いてたら、大変なことに
ひどい展開だろ？即興なんだぜ、これ…

最後に主題持ってきて、いかにも終わりそうですが
ようはアンナちゃんとの決別のための儀式であります。
いつまでもアンナさんの世話になってるわけにはいきません、冒険
的な意味で

展開がイミフという方は、申し訳ありません。

私の文才の無さゆえでございます。

なんか要約を載せても、駄洒落を解説されたときの虚無感と同類に
なってしまうと思うので、心理描写や状況描写が上達した将来の私
によって手直しされることに期待してください…

ご意見、ご感想お待ちしております。

今回の文章の元凶 KOKIA / 人間ってそんなものね

あ、忘れてました。

yes ロリータ no タッチ。

じい書いて

おけば大丈夫大丈夫

第二十七・五話 おまけ〜ギルドカード〜(前書き)

ちよつとした設定含めたおまけです。
読まなくても問題ありません。

第二十七・五話 おまけくギルドカードく

<ギルドカードに記された主人公のステータス>

リュウジ・キリタニ（桐谷龍司） 22歳 男

STR 31

INT 62

PIE 2

VIT 31

DEX 40

AGI 31

LUC 61

ギルドランク：D1

評価点：0

近接戦闘は苦手。異世界出身ゆえ信仰心が低い。ファンタジーな魔法にはゲームで慣れ親しみ、科学的な知識も多少あるため、魔法のイメージがこの世界の人間よりも遙かに得意。

成長した能力はがいくつか。

『マッスルインライジ』の影響か、便利な生活から離れたせいからSTRとVITが僅かに上昇しました。

異世界での魔法という存在を認識し、何度か使用することでINTがちよつぴり上昇しました。

なぜか使えた信仰呪文を通じて、PIEが僅かに上昇しました。人外バトルを目撃することで、反射神経が僅かに上昇しました。縁が結びつけた幸運を感じ、LUCが僅かに上昇しました。

ランクの見直しにより、D5からD1へランクが上昇しました。

実際に計算式として結果が出るわけではありませんが大まかな性格を表現していると思うてください。

一応上限は100とされているようですが、数値は上限に近づけば近づくほどあがり難くなります。

実力が伸び悩むというという意味だけでなく、単純なステータス比較ではつまらないからです。

<主人公の魔力について>

最初の測定では、グレイライトと判定されました。

これは、戦士が申し訳の補助程度に魔法を使うレベルです。

作中では、あきらかに上限オーバーの魔法を使っているようですが

……？

第二十七・五話 おまけ〜ギルドカード〜（後書き）

作中に何度もステータスを載せることはしないつもりです。

今回のように区切りがいいところで変化を公表することになります。

追記：評価 p t が文章のほうも平均 5 p t になっとなるがな。いやいや文法とかおかしって俺

第二十八話 心機一転

「…うん、わかった…。でも、一緒にいたいよ」

俺の精一杯のお願いに、涙を拭いながら答えてくれる。
アンナの頭を撫でてあげながら続ける。

「大丈夫。『家族』はどれだけ離れても、いつも一緒なんだよ」

厳密に俺が家族かと問われれば困るが、少なくとも、もう他人ではない。

「ほんとに?」

「もちろん! アンナに嘘はつかないよ、絶対に」

泣き顔は消え、笑顔が戻ってくる。

「じゃあ約束だよ。また帰ってきてね、お兄ちゃん」

「約束、だね」

完全に二人の世界に入っていた俺に、リゼルさんが質問する。

「それで、これからどうするのよ?」

「荷物をまとめて出て行くつもりです。ほぼ着るものだけですけど」

「そうじゃなくって…これからこの街で暮らしていくの？」

その質問の答えは明確にはなかった。

目的自体もあやふやなものだし、強くなるにはどうすればいいかも
厳密にはわからない。

冒険者を続けていくことが今わかる全てだった。

でもこの街で暮らすのかと聞かれたら…どうなんだろう。

「まだ決めてません。ただ…この世界をもっと歩いてみたいです」

その結果、この街で生計を立てていくことになるのかはわからない。
この街にすることが、皆を守ることになるのかどうかも。

「でも、しばらくはこの街で自分を鍛えるつもりです。街の外のこと
ともよく知りませんし」

「そっか」

聞くべきことは全て聞いたといった態度でリゼルさんは店に戻って
いく。

「それじゃあ俺達も、もういくぞ。達者でなリユウジ。それと…あ
れだけ娘を泣かせたんだ。必ず帰って来い」

「困ったことや聞きたいことがあったら、いつでも協力するからね」

「はい、ありがとうございます」

夫婦の言葉に力強く返事する。

「待つてるからね、お兄ちゃん」

「『約束』は絶対を守るよ。アンナも元気でいるんだぞ」

そういつてお互いに笑い合う。

アラベル一家を街の外まで見送り、一度家に戻る。

買ったとき以来、ほとんど身に着けていなかった防具を着こみ、ダガーも身に着ける。

収納鞆も持ち、出立の準備ができたのでリゼルさんい挨拶しに行く。

「今までお世話になりました」

「なんだか一気に寂しくなるわね…別にいてもいいのよ？部屋は空いてるんだから」

襲われても返り討ちにするし、という物騒な台詞が続いたような気がしたが無視する。

「金欠になったら、そのときはお願いしますね」

「ふっ、何それ。カツコ悪い。まあいいわ。これからは冒険者としてきなさい。薬に関しては協力できるわ。もちろん、お金は取るけどね」

餓死しそうになったら、飯くらい食わせてあげるわよーという声に見送られて、リゼルさんの家を後にする。

これで、ついに一人になった。

今までのように、頼りっぱなしの異世界人ではない。

これからは、この世界の一員として、精一杯生きてやる。

「と、いうわけなんだ」

「…いや、全然わかんねえよ。何が」と、いうわけなんだ』だよ」

ここは、街にある宿屋『月熊亭』。

通りの向かいに食堂があるので、基本食事はださないが、軽い朝食なら頼めばつけてくれる。

高級宿ではないので、料金も格安で、一日銅貨50枚で宿泊できる。単純に考えて、金貨1枚あれば20日。

今の所持金であれば一ヶ月以上の滞在が可能だ。

そして、この宿のロビーで俺と話しているのはディオ。

魔術師ギルドで知り合い、一度パーティーを組んだことのある少年だ。

こいつを青年と呼ぶのはなんか嫌だ。

「なに、俺もディオみたいに根無し冒険者になったってだけだよ」

「ひどい言い草だな。そっかぁ…アンナちゃん…いなくなっちゃっ

たのか」

アーナが村に帰らなかったとしても、お近づきにはなれなかったと思うぞ。

なんせ、リゼルさんという障害があるからな。

すでに別方面で犠牲者が出てるし…ちゃんと復活したのかな彼女。

「で、ここに来たってことはリュウジもこの宿に泊まるのか？」

「うん、そのつもり」

冒険者は基本的に自由だ。

生活できるのであれば無理に依頼を受ける必要もないし、モンスターを倒す力があるなら文字通り好きに世界を冒険できる。

法や規律が整った地球とは、この世界の仕組みは大きく異なっている。

そして、パワーバランスも。

ゲームなら定められた主人公がいて、プレイヤーが物語を進めるまではお話は進まない。

そして、将来起きるであろう事件はそのキャラクターの周囲で起きるように運命付けられている。

だが会議室でシグナムさんが語った内容では、この世界はこの瞬間にも滅びに向かっている。

現在の人とモンスターのパワーバランスを崩さない限り、平穏な未来は訪れないだろう。

何か起きなければ、一人でも多く戦えるものが増えなければ…

だからこそ、俺は冒険者を続ける。

約束を守れるようになるために。

どうすれば望む世界を作れるのか、そこまではわからない。だから、今は依頼を受けながら鍛錬に励むしかないけどな。

「そっか、まあ一緒に頑張ろうぜ。リュウジとだったら気楽にパーティー組めるしさ」

「そういえば、今日は休み？依頼受けてないの？」

「いや、昨日の騒ぎで疲れてるんだよ。祭りを楽しもうとしたら、ギルドに招集されて、拳句に安全が確認された深夜までずっと走りっぱなしだったんだぞ……」

「ああー招集が合ったのか……」

「おかげで疲れがまだ残ってるよ。リュウジは何してたんだよ」

「お、俺？…病欠？」

その時は気絶してたな…気絶って病気扱いになるのかな。

「病人がなんでこんなに元気なんだよ。相変わらず読めない奴だよな……」

呆れたように言われる。

心外な、想定外のことにも恵まれてるだけだ。

その後、ディオと別れて俺も部屋を借りた。

とりあえず金貨一枚を払い、二十日間滞在することに決めた。

残りの所持金は金貨1枚に銀貨が6枚。それと銅貨が…6枚だな。

案内されたのは階段下の横を伸びる通路にある一室。

一階のこの廊下は長期滞在用の部屋が並び、二階は通常の宿泊者用というように区別されているらしい。

俺やディオのように冒険者をやっている奴とすれ違つかもしれない。

室内は、質素という言葉を表すに最適な状態だった。

木目の見える壁と床は色あせており、防犯は部屋の扉に申し訳程度の鍵がついているだけ……科学が未発達の世界では予想以上に防犯に悩まされそうだ。

木製のベッドは、シーツの下のクッションが薄く少々硬そうだし、ベッド傍にある僅かばかり小さめの円形のテーブルにはいくつも傷があった。

光源となりそうなのは、右手の壁、俺の身長よりほぼ同じ位置につけられている壁ランタンと、窓から取り入れる光くらいか。備え付けの窓から見えた景色は、表通りではなく隣に立つ民家だった。

部屋を見渡すと一応家具と呼べるものは揃っているようだ。

鞆をテーブルの上におろし、防具を脱いで、硬いベッドに横になるとりあえず防具はクローゼットに放り込んでおいた。

クローゼット以外にもタンスのような引き戸の収納スペースもある。ただ泊まるというより、ここで生活するという感覚に近いかもしれない。

玄関で靴を脱がず、靴や防具を付けたままベッドに横になるのもありなこの世界でも、ベッドにあがる時は靴を脱ぐようにしている。靴をベッド下に脱ぎそろえて、ベッドに横になる。

時刻はそろそろ夕刻に差し掛かる頃だろうか。

今日はほんとにいろいろあって、空腹を感じる暇がなかった。

夕食にはまだ早いし、少し休んでから食堂にでもいこう。

誰にいつでもなく、おやすみなさいと呟き、ゆっくりと眠り落ちていった。

第二十八話 心機一転（後書き）

こついう転換部ってめんどくさいですね。

早く一つのクエストにじっくり取り掛かりたいです。

さて、この時点で主人公は他人のためにどこまで頑張れる心境になったのでしょうかね。

お金が掛からない範囲？怪我をしない範囲？死なない範囲？

一応、過去に事故による大怪我、頭部損傷の大怪我、死を直感する殺気となかなかスリリングな経験をさせました。そして、それに付随する人々の繋がりも。

文章が下手なせいで、読み手によって様々に解釈されると思います。あまりにもおかしいだろう、と思ったら是非感想ください。

頑張っ手直ししてみます。

ご意見、ご感想お待ちしております。

追記：描写をもっと細かくと要望があつたので手直し頑張ります。完成したらまた後書きにて連絡します。なお、予定は未定です…

追記：12月8日17:30 手直しさらに追加。軽く横になるときは靴を脱がない、という内容に訂正。

第二十九話 星の降る夜（前書き）

重要なのでこちらに『感想受付をユーザーからのみ』に変更しました。

第二十九話 星の降る夜

…んっ…よく寝てしまったようだ…毛布もかけずに寝ていたから少し肌寒いな。

あれからどれくらい寝てしまったのだろうか。

太陽はもう沈んでしまっていて、窓からは月明かりが差し込んでくる。

窓から外を見ると、それぞれの家庭から漏れ出す明かりによって、光と闇が入り混じった幻想的な光景が映し出された。

さすがにお腹が減ってきたので、何か食べたい。

食堂に行くことにしよう。

いつものように街中だし装備は必要ないだろうと考え、財布だけもって宿を後にする。

もちろん、部屋の戸締りは忘れずに。

向かいの食堂は多くの人が集まり、繁盛していた。

祭りで集まった人達がまだ街に大勢残っているのだろう。

さっきの宿屋も、二階はすっかり埋まっているようだったし。

きつと、他の場所の宿も同じ状態になっているに違いない。

しかし、これだけ混んでいると、なかなか食事にありつけそうにない。

こっちはすぐにでも何か腹に入れたいところなのに、どうしてくれるだろうか…

以前の燻製屋はやっているかな、あの燻製はなかなかおいしかった。腹は膨れないけど、燻製かじりながら待つ分にはいいかもしれない。そのまま、市場へ歩き出す。

道すがら空を見上げると、綺麗な星空が見えた。こうして星を見るのは久しぶりだ。

見えるのは星だけではない。

兎も宇宙人も住んでないけれど、代わりに神様が住んでいるといわれる二つのお月様。

色彩の変化が何によるものか知りようがないけど、白く黄色く光を放つ月と、少しだけ赤が混じったように見える月。

赤い方が少し小さく、白い月の奥に一部が重なって見えている。

これだけはつきり見えるのは、地球の曇った空じゃ無理なんだろうなあ。

こんなに綺麗な星空なら、天体観測する人たちの気持ちもわかりそうだ。

しかし、そんな景色に盛り上がった心は、閑散とした市場を見て一気に沈む。

「閉店早いよ…」

誰にも聞こえない独り言を漏らし、空腹をどうするか真剣に悩む。またあの食堂に戻るか？

…あ、でもここって武器屋の通りにもいけたな。

確か、酒場があるって話だし、そこにいってみるか。

名づけるなら冒険者通りとでもいうべきか。

今は閉まっているが、以前かよった武具屋や他の装備を取り扱う店があったり、リゼルさんのような薬師が営む店もある。そして、その先に話に聞いていた酒場が見えてきた。店に入る前から、人々の喧騒が中から聞こえてくる。忘年会シーズンの居酒屋同様、陽気な人で溢れているのだろう。

扉を開けて店に入ると、無造作に設置された複数のテーブルで、多くの冒険者風の男達が酒を飲んでいた。

というのも、武器や防具がちらほら見られるからである。

完全武装しているやつはいないが、貴重品扱いなのか自衛のためなのか、丸腰ノーガードな俺とは様相が異なっていた。

ウエイトレスによって運ばれる酒のつまみは、おいしそうな匂いをこっちまで放ってくる。

あそこに見えるは、いつぞやの燻製ではなかるうか。

他にも、様々な料理が見て取れる、もっとも材料まではわからないが。

「お客さん、お一人ですか？」

ウエイトレスの一人が、店に入った俺に気づき声をかけてくる。

こういう所には、看板娘の一人や二人いてもおかしくないという勝手な先入観に違わず、ウエイトレスはかわいい娘が多かった。

あまり、まじまじと見ても失礼だから横目に見ただけだよ？

この子も、例に漏れず美人といつていい。

長い金髪を一つに束ね、ピンクのリボンで結んである。

まあまあ長身な俺から見て少し小柄だが、歳は17・8くらいかな。

「はい、一人です」

「空いてるところへどうぞ。注文があったら、給仕の私たちかマス

ターに声をかけてください」

そういつて、他の客に呼ばれて忙しくそうに注文を受けに戻って行く。

どこに座ろうかと周囲を見ても、テーブルはほぼ埋まっているようだし、強面の店主らしき人が立つカウンターに移動する。
さて、どう注文しよう。

初めてなんだし逐一メニューを聞いていいものか。

「なんだ、坊主。酒でいいのか？」

注文を決めかねていた俺を見て、マスターの方から声をかけてくる。せっかくだが、生憎、すきっ腹にアルコールはきつい。

「いや、すみません。何か腹が膨れるものをお願いします。お酒以外で」

無難な注文だが、これでいいか。

「酒場に来て、酒を頼まないとは変わった奴だ。少し待ってる」

そういつて、厨房に向かって指示を飛ばすマスター。

メニューがあるのかないのか、わからないけど念のためにも料金のことでも聞いておこうと、料理が届く合間に質問する。

結果、やはり詳細なメニューはないようで、料金は一応決めてあるが、一般的な価格になっていると説明された。

その一般というのが、どれくらいかわからないのだが、ぼったくりでない限り問題ないだろう。

以前、満足な一日の食費が銀貨1枚相当と勉強したからな。

運ばれてきた料理は、空腹も相まって非常においしい。調理方法はシンプルなのだろうが、素材の味が活きているのか、大雑把な味付けにしては食が進む。

特に、この肉とかこの肉とかこの肉とか。肉は、素材によって違いはあるだろうが、少々値がはるので、最近 はめつきり食べる機会が減っていたしなあ。

以前の燻製は、大量に食べるもんじゃないからな。

良質なたんぱく質をせっせと摂取していると、周囲の話が聞こえてくる。

空腹から脱却し、少し落ち着いたので、耳を澄ませて噂話に聞き入る。

そこで気になった話がいくつか。

ある者の話では、領主へ襲撃のあった夜に西へと逃げる怪しい男を目撃した。

またある者の話では、襲撃者が逃げたのは西というより北寄りの方角だった。

またまたある者の話では、やっぱりあそこのメイドさん可愛いよな、という背筋が寒くなるような話が…

この続きを聞くと心に深い傷ができそうなので、聞き耳を立てるのをやめ食事に集中しようとした時、店の扉が開かれる。

フードを被り、顔が見えないが体つきから女性に見える。いやらしい目つきじゃないよ。ホントだよ。

俺と同じように、他の店からあぶれたのだろうか。

失礼ながらむさ苦しい男達の聖域にくるタイプには見えないのだが…（一部女性の冒険者もおられます、しかも俺より強そうです）

彼女を見た男達の中には、だいぶ酔いが回ったものもいるらしく、冷静な判断ができないものもいるようです。

「なんだあフードなんてかぶって。…なんだ、綺麗な顔してるじゃねえか。どうだい、こっちにきて一緒に飲まない？」

隠れた顔を覗き込んだ男の言葉が正しければ、綺麗なお嬢さんなのだろう。

酔っ払いが美人に絡むのは、ありきたりなシチュエーションといえはそうなのだが、俺には経験がなかったな。

あっちの世界だと酔っ払いに絡まれた女性を助けた男のストーリーが大ヒットしたし、実際探せばあるのだろう。

それはこの異世界でも変わらないか。

反応を示さない女性に苛立ったのか、男の雰囲気徐徐に悪くなりつつある中、その女性が見物客の一人であった俺のほうを見たような気がした。

まさかね。

いくら道を歩いていると、しょっちゅうお婆ちゃんに道を尋ねられ、電車に乗れば隣に座ったおばさんの雑談相手にされ、俺はいつたいたいどんなオーラを出してるんだと疑問に思ったことがある俺だが、まさかこんな所で助けを求められることはあるまい。

もっと強そうで頼りがいのある奴らが周りにごろごろいるんだし、俺じゃなくそっちにいったほうが安全だ。

などと、いつぞやの決意表明のわりに小市民っぷりが抜けていない俺の心の叫びを無視するように、その女性はこともあるうに

「…邪魔」

と一言だけ男に呟き、こちらに歩いてくる。

女性が俺の横のカウンター席に座ったところには、酔っ払いはいつ暴れだすかわからないほど頭に血が上っていた。

絡んだほうが悪いとはいえ、あの対応の仕方は不味過ぎる。
ほら、なんか今にも殴りかかりそうで…？

「ちよっと、待っ」

待った、と言い切る前に、女性とその背後から近寄った酔っ払いの間に割って入るように立ち上がった。

次の瞬間、酔っ払いの拳は本来の対象から外れ俺の顔面にクリーンヒットする。

おかげで、静止の声は遮られ、鈍痛に顔を抑えて耐える羽目になった。

「のおおおお…ぐおおおお」

そりゃただのグーパンなのだが、されどグーパン。

もやしとまではいわないが、殴られることに慣れていない俺にはどうすることもできない。

情けなくも、苦悶の声をあげ蹲るしかなかった。

人間、危機を回避するために、反射的に身を退いたり身体をよじったりするもんだが、自分から飛び出した手前そんな余裕はなく、人生何度目かの大ダメージとして記録された。

なぜ、俺はこうも災難に合うんだ…LUC61はどこにいった！畜生！！

痛みのせいでステータスに八つ当たりをし始めた俺を見て、酔っ払いは面白くない様子で言葉を吐く。

「なんだ、てめえ。お前みたいなやつが、なんでこの酒場にきてんだ」

俺が冒険者に見えないってのか、ははっ俺も見えるとは思ってねえよ。
だが、手を出した以上は仕返しされても文句はあるまいなど、身体を強化して殴り返してやるつもりで呪文唱えようとした時。

背後から漂う冷気に、背筋が寒くなった。

「…さっきのは私を狙っていた。よって、これは自己防衛」

女性が突き出した手から氷の珠が放たれる。

氷の珠の大きさは、俺の握りこぶし程度。

それが俺を殴った酔っ払いの腹部に当たった瞬間に、魔法が完成する。

『ブレイク』

短く、一言だけ。

通常の呪文の詠唱ではないが、確かに魔力の籠もった言葉だった。

その言葉が引き金となったのか、氷の珠が弾けとび、男の周囲に強烈な冷気を振りまく。

男の周囲だけが急激に温度が下がり、奪われる体温のせいで男は身体を震わせる。

いきなりの魔法の報復に、肝が冷えたのか、それとも酔いが吹っ飛んだのか…

「す、すいませんでしたー」

謝罪の一言と共に、ガチガチと震えながらそれを見かねた連れ達に

よって退場していった。

殴られ損だったが、この場が収まったのでよかったのか。

まだ痛みの残る頬を擦りながら、振り返ると騒ぎの女性がこちらを向いていた。

どう声をかけるべきか。

反射的にかばったとはいえ、実際酔っ払いを追い返したのはこの人だしな…いまいち締まらない。

大丈夫ですか？と聞いたなら、むしろ俺のほうに心配されるだろ。なので、とりあえず。

「お、お疲れ様でした」

そう言っておいた。

そんな俺を見て、女性はフードを外し、その綺麗な顔を見せながら一言。

「…顔、大丈夫？」

結局、助けようとした相手…グリシーヌに心配される恥ずかしい俺だった。

第二十九話 星の降る夜（後書き）

1045ptという少ない点数ですが日間ランキングBEST1になれました。

また、週間ランキングBEST5にも顔を出しました。

ほんの一週間前まで完全に空気がだったので、読んでくれる方が増えたんだなあと実感しております。

悪い意味で適当なため、過去のストーリーの細部が手直しされることが多くあり真に申し訳ありません。ほんとの意味で読者の皆さんを練習作にお付き合いさせてしまっています…

久々に無口娘の登場。この娘をかわいく思ったら負けです、全ては俺の妄想だ！

ではこれからも気ままにお付き合いくださいませ。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第三十話 幸運 悪運？

ぼかぼかと暖かな光が、俺の顔に当てられている。
グリシーヌの手によって絶賛顔面修復中である。

ただの光なのに、なんで暖かいんだろう…不思議と熱量の有無って感じじゃないんだよなあ。

「終わった」

「ありがと。…うん、痛くない」

顔に手を当てて押ししたり揺らしたりしてみても、骨にも異常なし。

やはり回復魔法、ひいては信仰呪文の有用性は無視しがたい…
どうやってステータスを伸ばしたものが。

とりあえず、今は久しぶりにあったこの子の相手をしないと。

「なんでまた、一人でここに？」

「…勉強してたら遅くなった。食堂も混雑してた」

「あー、確かに混んでたけど…こつという所はあんまりよくないと思
うよ」

後半はマスターに失礼なので小声で伝える。

「…平気。私も冒険者になったから」

「そりゃ冒険者ならこつという所に来て一人前、みたいな考えはある
のかもしれないけどさ、俺はあんまり来ようと思わないよ？」

お酒そんなに飲まないし、酔っ払いとか面倒だし。でも、料理がおいしいからその点はリピーターになりえるな。

「…次は気をつける。先手を取る」

「なんとも殺伐とした食卓だな…まあ気をつけるしかないか」

グリシーヌの前に料理が運ばれてくる。

俺はもう食べ終わったので、食後のお酒を注文している。

こう…待ち合わせたわけでもない知り合いが食事の間はどうしたらいんだらう。

ディオあたりなら、帰って寝るわ、とバツサリいけそうなのに。

二度、三度とお酒のお代わりを頼む。

ここでの一般的なお酒はビールで、ワインはあるが日本酒…清酒はなかった。

ちなみに酒は好きではないが、弱くはない。

パッチテストでもずっと肌が赤くならなかったので、酒豪のほうに分類されるのだろう。

問題があるとしたら、ちびちび飲むことがないので、普通の飲み物のように一気に飲んでしまうことだ。

グリシーヌが黙々と食事をすすめる一方、ビールをちびちび飲むという節制のおかげで、五度目のお代わりになった時、グリシーヌが料理を食べ終えた。

このまま別れるのも忍びないので、軽く世間話を振ってみる。

「ちよくちよくディオとは会っただけど、グリシーヌはあれからどうしてるの？」

食後のワインを口にしながら、俺の質問に少し考える間があった。その歳でお酒はいいのか？ディオが16だったし、君もそれくらいだろう。

まあ異世界の法律なんて知らないけど、注文が通ってるんだから平気か。

「…それは私の質問。魔術師ギルドに入って、それつきりなんて…何やってるの？」

「…主に雑用的な依頼の方を」

「……………頭、大丈夫？それじゃあ何のために魔法を学んだのかわからない」

いつもより長い間があり、最終的に頭の心配をされた。

「いや、それはそうなんだけど、冒険者は依頼を受けるもんだって思ってたさ。ほら、まだこっちの質問に答えてもらってないよ」

「私はあれからもギルドで魔法を学んでる……ついでにいえば、アラシも同様」

なるほど、脳筋だったのは俺とディオだけか。

まあお金がなかったんだし、仕方ないよね。

戦士ギルドには行ってすらないし、訓練にはお金かかるって言うてたし。

「正直いって」

「ん？」

「あなたには期待していた。特異な者が知り合いにいるのは、私の力になる。なのに……」

こちらを見つめ、いや睨み付けながら言葉を続ける。

「あなたはいつまで経っても来ない……諦めた途端見つかるのは不愉快」

不機嫌オーラを隠さず、齒に衣着せぬ言い方にたじたじになる。

「あはは……そういうのどういうか知ってる？物欲センサーっていうんだけど」

「……はあ。またあなたはそうやって……強制ではありません、お願いです。魔術師ギルドに足を運ぶことを検討しておいてください」

不機嫌が治まったようであった。が、ここで断ればまた悪化しそうだな。

「それくらいならお安い御用で。魔法を学ぶのは大切だね、今になってよくわかったよ」

「……何があったかは噂程度に聞いています。では、また後日」

「うん。またね」

グリシーヌの後姿を見送る。
先に帰ってきてくれて助かった。

これでこちらにも気兼ねなく帰れる。

「マスター、いくらですか？」

訊ねたマスターは、なぜかにこやかな笑顔に怒気を纏っていた。

「…うちの店から客を盗ろうとは、いい度胸だな坊主」

「へ？いや、聞こえてたんですか！？」

「あの嬢ちゃんのを安くしといたからな、その分払ってけ」

「…は…はい…」

やっぱりこのLUCの値間違ってるよ…実質20くらいだよきつと…
グリシーヌの食べた量が少なかったのが唯一の救いだな…

次はちゃんとした値段でいいとの有難いお言葉を頂いて、酒場を後にする。

あれで顔覚えられたかなあ、街の人に顔が知れるってのはプラスだ
と思うし結果オーライ、って考えないとやってられないぞ。

宿について自室に戻り、明日の予定を確認する。

酒場で支払いに銀貨一枚もってかれたが、所持金にまだ余裕がある。
依頼を受けずに、魔術師ギルドに行くことにしよう。

摂取したアルコールのおかげもあってすぐ眠れそうだ。

ベッドにもぐりこみ、羊の数を数える間もなく眠りについた。

第三十話 幸運 悪運？（後書き）

30話目にてお気に入り登録2000件になりました。ありがとうございます。

無口じゃねえだろ、無愛想なだけじゃねえかというツッコミお待ちしております。

ご意見・ご感想お待ちしております。明日は日中メンテらしいですね。まあその間はどうせ更新できないので関係ありません。ではまた

第三十一話 向上心と悪戯心

激しい雨音に目が覚めた。

こちらの世界で初めて晴れ以外の天気を見た気がする。

しかし困ったな。

傘は持ってないし、このまま外出したら全身ずぶ濡れになってしまう。

日本なら、売店に折りたたみ傘を置いてるところが多いけど、この世界の商業レベルだとそんなに便利じゃない。

そもそも、俺のように家のない冒険者が邪魔になりそうなものを買っていいのか？

傘を差して冒険するのは、俺の知る冒険者像を木っ端微塵にしそうだ。

男らしく雨に濡れるか、合羽を着るか：魔法に手を出すかだな。

雨天中止でいいじゃあないですか、という考えも浮かんだが、グリシーヌの件もあるからな。

魔法による雨対策を前向きに検討しよう。

まずは、傘そのものを出す方法。

『サモン・アンブレラ』とか「傘の召喚」でそれっぽい下の句だが、そもそも召喚なんてできない。

どこから傘が出てくるんだよ、勝手に持ってかれる相手のことを考えてみるって。

次に、傘っぽいものを作り出す方法。

召喚との違いは、既存の物に手を出すのではなく、あくまで自分で作り出すってことだ。

これは今まで使った攻撃魔法とある程度似ている。

そう考えると、材質と固有名称（この場合は傘）を組み合わせるべ

きか。

火でできた傘とか雨粒が蒸発していきそうだが…

想像したら、火は熱いし、氷は冷たく、土は重い。

現代のような金属加工されたものを素材にするのがベストだが、理系ではないので理解が及ばない。

そして、最後に最も「便利」なのではないか、という方法が、雨を防ぐという結果だけを利用することだ。

過去の魔法でいえば、筋力強化の『マッスルインラージ』と空間に作用する概念の『ライト』の使い方が近い。

雨を防ぐという効果のある物を、自身に魔法としてかけるといふことになる。

例えば疎水性という存在。

これはコートや合羽などで雨が綺麗な水滴となって表面をすべるのを誰でも見たことがあるだろう。

自然界でも植物の葉の上に、丸い水滴が弾けずに残っていることがある。

ようは染み込み難いか染み込み易いか。

もっとも実物を見ることはできても、深いところまで理解できるかどうかは難しい。

現象の理解への違いは、必要な魔力に影響してくる。

そのため、金属傘、疎水性の利用のどちらかを選ぶならば、利便性も考慮し、疎水性を選ぶ。

呪文にするならばこんなところか。

『我が身を覆う親和ならざる幕：エフェクトスクリーン』

疎水性という現象の対義語は、親水性。

そして、親水性とは水の持つ親和性のことなので、語呂がいいので

こちらにした。

エフェクトとは、影響の意。スクリーンは、幕まくだな。

しかし、魔力の流れを感じたのに、一向に幕となるものが現れない。確認のためくすんだガラス窓を開け、手だけ外に出すと、雨が手に当たる、いや当たる直前に何かに弾かれている。

魔法が発動していることは間違いない。

魔法として現れた実体のない幕は、今までの魔法より概念的な魔法といえるだろう。

今後は、より特殊な魔法を使えるかもしれない。

ともあれ雨対策の目処は立った。

この魔法が、過去の強化魔法と同様ならば効果時間にも限りがある。外を歩いて、雨が身体にあたるのを感じてすぐ再詠唱すればびしょ濡れにもならない。

もう一つ、最近の生活を振り返って思うのが普段の防具の着用について。

危険なことをするつもりがなくても、気づけばそんな事態に巻き込まれることが何度もあった。

よほど安全が確保される場所でない限り、日常的に武器、防具を身につけるように心掛ける方がいいかもしれない。

多少窮屈かもしれないが、ここはそういう世界だと割り切って、できるだけ甘えは捨てたほうが自分のためだ。

新品同然の革防具を身につけ、錆び一つないダガーも忘れずに持つて行く。

重要な物以前に、私物が空っぽの鞆だけになってしまった部屋に鍵を掛ける必要性に一瞬悩んだが習慣は大事だし、ちゃんと鍵は閉めた。

防具を身につけるといっのは結構な手間で、最初の防水魔法を唱えてから少し時間が掛かっている。

なんせ、下半身は、靴を履くというものではなく足に縛り付ける感じだし、上半身もジャケットを羽織るようにすぐ着れるわけではない。

ライダーグローブのような籠手は手袋感覚でまだましたが、少なくとも宿の玄関にくるまで五分は経ってしまった。

他の客もいる前で堂々と魔法を唱えるのは少し恥ずかしいので、二度目の詠唱は意識して小声で唱える。

『我が身を覆う親和ならざる幕：エフェクトスクリーン』

見た目には変化はない。

魔力による現象なので、聡い人が違和感を感じる程度だろう。

別に魔力が見えるわけではないが、言葉に魔力を乗せるように、それを感じる人がいてもおかしくない。

俺はまだそんなことはないが。

市場があつた街の中心部へ歩みを進める。

この街の全体像が少しずつわかってきたが、どうやら領主の屋敷や市場や公共の広場、ギルドの建物といった重要な、もしくはよく利用されるものが街の中央にあり、そこから放射線が円を描くように、いくつかの通りに分かれているようだ。

中央部はより裕福な、外縁部にいくにつれて貧乏ちっくな建物が見受けられる。

俺が泊まってる宿屋がいい例だろう。

この構造はやはり安全性が絡んでいるのだろう。モンスターの脅威だけでなく、あの事件でシグナムさんが戦争について言っていたことも思い出す。

俺が初めて訪れたアンナ達の住む村だって、グランさんが自警団を率いていたし、安全性は本当に重要なことだ。

道中、何度か雨に濡れつつも詠唱を繰り返し、魔術師ギルドに到着する。

やはりこれも効果時間があるようで、時間は3分と短かった。繰り返し使ったので、自然と詠唱呪文が出てくるまで慣れてしまったのは怪我の功名と言えるのだろうか。

魔術師ギルドの中に入ってまず出迎えてくれたのは、以前と変わらず紫のローブを着た女性。

直接名前は聞いてないが、ローザと呼ばれていたような気がする。

「あら、いつぞやのピンキリ坊やじゃない。今日はどうしたの？」

「おはようございます。今日は知人に呼び出しを受けまして…グリーシー又って子が来てませんか？」

「ああ、あの子ならいつも図書館で自習してるわよ。あの子に用があるの？」

「はい、どう行けば会えますか？」

「その通路を行けば図書館に着くから、一番右の扉に入りなさい。扉ごとに内部が分類されてるから、他の扉は許可証がないと通してもらえないからね？」

「一番右ですね、ありがとうございます。あの、よかったら名前を教えてくださいいいですか？」

いつまでも不確定名称だと困るからなあ。

受付のお姉さんがずっと固定ならいいかもしれないけど。

「ええ、もちろん。私はここで働いている魔導師のローザといいます」

「俺の名前は」

「知ってるわよ、リュウジくん。一度ギルドカードで確認したからね」

「覚えてくれてたんですか」

「ここに来る人がそんなに多いわけじゃないし、受付の仕事の一部でもあるから。この先は静かにね？研究やら勉強やらで気が立つてるのも多いから」

「はい、気をつけます。ありがとうございます」

「はい、またね」

ローザさんと別れ、教えられた通路を歩く。

いくつか部屋の前を通過し、例の図書館らしき空間に到着する。

映画館のホールの入り口のように、左右にいくつかの扉が並び、
『図書館では静かに』と書かれた紙が貼つてあるのが目に付く。

言われたとおり一番右側の扉へ進み、中へ入る。

扉はゆっくり、閉めるときも手を添えたまま。

締まるときすごい音がする扉があったりするからな… あれは気まずい。

このスペースの司書さんらしき男性が、本を読みながらカウンターテーブルに座っている。

こちらをチラリと一瞥しただけで、また読書に戻ってしまったので、特に問題なしと判断されたのだろう。

おそらくだが、隣の扉の先では、こういった司書さんに許可証を見せないと追い出されるとか、そういうシステムなのかな。

いうなれば、無料スペースであるこの区域に重要な本は置いてなく、魔法を学び始めた俺達のような入門者向けの本ばかり。

段階を踏んで、別の扉をくぐれるようになるというのは、ゲームでよくある成長システムに似てわくわくする。

本来の目的を忘れてしまいそうになり、慌てて彼女の姿を捜す。

いくつか本棚を抜けた先、ところどころに設置された閲覧用の机でグリシーヌを見つけた。

熱心に本を読んでいるようで、まだ離れている俺には気づいていない。

ここで、ふと俺の悪戯心に火がついた。

熱心に勉強している者は、傍からみたらなんとも無防備に見えて、ついついちよっかいをかけたことがあることがある。

相手が年下の女の子であり、かつ美人。

いつも無表情で落ち着いた彼女に、ここはひとつやってやろう。

これで相手が知らない人だったり、大人の女性だったら騒ぎになるかもしれないが、なーに可愛い悪戯と許してもらえなさ。

内心、ふっふっふと笑いながら、悪い顔してるんだろーと自覚しつつも、ゆっくりと対象の背後から近づく。

図書館では静かにしないといけないので、大声をあげるような悪戯は厳禁だ。他の利用者に迷惑になる。

俺がやるうとしてしているのは、そんな周りに迷惑を掛けるものではない、被害をこうむるのは当人だけである。

スタンバイ…スタンバイ…

現代で有名なお気に入りのフレーズを唱えながら、目標に接近する。一息で到達できる距離に迫ったので呼吸を止め、最後の距離を詰める。

スタンバイ……

ゴウツ！

ぽんつとグリシーヌの右肩に手を置く。

肩に触るのはきつとセクハラではない、図書館で声を出さずに気づいてもらうためならこうするのが自然だ。

そして、肩に置かれた手の持ち主を確認しようと振り返ったグリシーヌの第一声は。

「ふびゆ」

ビューティフォー…

先生、俺やったよ。

もうあなたには会えないけれど、先生のことはずっと忘れません。

さて、任務は達成したし帰るか。

グリシーヌの右頬に突き刺さった人差し指を離すのは少々名残惜しいが、優秀なスナイパーは一箇所に留まらない。
綺麗に決まった悪戯にほくほくしながらその場を去ろうとした。

しかし、何度目だろうか。

背後からのこの冷気を感じるのは。

第三十一話 向上心と悪戯心（後書き）

えっ？普通やりますよね？

後半はいつも以上にふざけておりますが、許容範囲ですよ。

前半は久しぶりに魔法の考察を。

以前スクリーンについて「膜」という漢字を使いましたが、あれは間違っているようで、今回「幕」という漢字に直しております。

直感的には同じ遮蔽物であるのですが、全身を覆うイメージを膜と早合点しこのようなミスをしておりました。

ご意見、ご感想お待ちしております。

追記：感想で指摘された寒いギャグを抹殺しました。

第三十二話 実験台

ゆっくりと振り返った先には、こちらに鋭い先端を向けている氷の破片が浮いていた。

ひとつだけかと思った矢先、周辺の冷気が一箇所に流れ込み、そこに新たな破片が形成されていく。

二つ目が完成すると、今度は別の場所に三つ目が、そしてまた別の場所へと冷気が移っていく。

笑って許してもらえると思っていたが、どうやらこの世界のこの年代は冗談が通じないらしい。

それとも相手がグリシーヌだったからか。

そりゃ悪戯なんだから怒られる可能性はあったけど、これはちょっと弁解しないとやばそうだ。

「ま、まあ、落ち着いて落ち着いて。ちょっとした悪ふざけだったんだ」

「……………」

「勉強を邪魔したのは悪かった。いや、怒るのはもつともだがここは穩便に……」

合計五つの凶器が穂先を俺に固定したまま、空中に静止している。

これは、俺が使ってきた攻撃魔法より質がいいのではないだろうか。そもそも、俺と同時期に魔法を学び始めたのに、このようなことができるなんてグリシーヌはなかなか筋がいいんだな。

そういえば、酒場でもちよっと変わった魔法の使い方をしていたしきつと才能があるんだ。

と、現実から目を逸らしグリシーヌを心の中で褒め称えてみたが結果は何も変わらず、ついに宣告がくだされる。

『シユート』

声と同時に氷の破片が俺に向かって飛来する。

今回は何も準備をしていない、まさか知り合いに殺されることになるなんて想定外すぎる。

あ、だめだ、何も間に合いそうにない。

背筋が凍りつき、硬直した身体は何の回避行動もとれず、その光景から目を離せずにいた。

そして、俺に向かって飛ばされた氷刃は、そのまま俺の腹部に飛んできて、30cm手前でお互いが衝突し、その場で粉々に砕け散った。

砕かれた氷がぱらぱらと零れ落ち、地面に到達する前に霞んで消えていく。

あ、危ないってもんじゃなかった…当たる直前には頭の中が空っぽになっていた。

相変わらずの無表情でこちらを見るグリシーヌは、呆然としたままの俺にいう。

「……反省した？」

「は、反省しました。ごめんなさい、許してください」

「ふんっ」

反省したかという問いかけに、全力で謝罪しなんとか事なきを得た。頼むから凶器を持ち出すはやめてほしい、当てるつもりがなかったにしろ心臓に悪すぎる。

今後、グリシーヌをからかうのはやめておこう。

次は許してもらえないかもしれない。

いや、そんな悪い子じゃないと思うけども。

「……ここでは話しにくい。ロビーに行きましょう」

「アイ、マム」

グリシーヌは一瞬怪訝な表情を浮かべてたあと、さっきまで読んでいた本を取り上げ、本棚の間を進んでいく。

これから向かう場所がわからないので、見失わないようにすぐ後ろにピッタリとついていく。

ただついていくだけでは暇なので、ちらちらと並べられた本の背表紙に目を泳がせる。

左の本棚には『今日から始める魔術理論／シセラ・ルーゼル』『覚えた魔法が使えないあなたに／セルゲイ・マンタ』『覚えやすい下の句一覧／セルゲイ・マンタ』などなど。

右の本棚には『ギルドと国家の関係／ノイ・フォーラット』『生活圏の限界域／マーガレット・ハイラス』『海洋の魔獣の危険性／ミシェル・バツセン』などなど。

出来の悪い参考書みたいなのもあれば、少々興味がそそられる世界知識の本があったりもする。

どれも一読する価値はあるかもしれない。

貸し出しはしてるのかな？

「ねえねえ、グリシー又さんや」

「なんですか」

「この本って貸し出ししてる？」

「…有力者でもない限り、本を貸し出すなんて馬鹿な真似はしないと思います、まさか借りるつもりなんですか？」

「いや、聞いてみただけ」

「そうですか、黙っててください」

グリシー又からしてみたら、ずいぶんと頭の悪い質問に聞こえただろう。

貸したつきり消息不明になりましたとか、ざらにありそうだしなこの世界…

さきほどの殺人未遂事件には気づかなかったのか、変わらず本を読んでいる司書さんの前を通り過ぎ図書館を後にする。

来た道を戻り受付に戻ると、ローザさんが見覚えのある男と話しているのが見えた。

「ここなら声を抑える必要はない」

「あ、もう喋っていい？」

「いい。…今度から図書館にいるときは、普通に呼んで」

「わかった。それで呼ばれたから来たけど、結局どうしたらいいの？」

「…前も言ったけど、勉強する気あるの？その質問は想定外だった」

「ああ、勉強か。俺も魔法覚えて、お互いに教えあうのか」

学友の存在は、いろいろと役立つからな。

「けど、長期間籠もるわけにもいかないんだよ。依頼受けて、ランク上げないといけないからさ」

もちろん、魔術師ギルドでの勉強だって力を鍛えるのに必要だけど、メインは依頼のほうだ。

「…うー…わからない。リュウジならここでもランクを上げることが可能だと思ってた」

……………え？

「すまん、混乱してるんだが、俺はここでもランクを上げれるのか？いつとくが冒険者としてのランクだぞ？」

「…それ以外のランクがあるなら教えてほしい」

いや、確かに他のランクなんて知らないけど、魔術師ギルドだと魔法使い検定みたいなやつがあってもおかしくないし…

「あーっと、魔術師ギルドでもランクを上げる方法があるのか？」

「…下位ギルドが課す試験の成否によって、冒険者ランクが上昇する…もしかして知らなかった？」

「……ちなみに、それは常識？」

「冒険者ギルドで最初に教えてもらった」

最初？冒険者ギルド？

ってことはつまり……

「まあああたあいつのせいかああああ！！！」

第三十二話 実験台（後書き）

またゴルゴムの仕業か…

ここまでやってから気づいたんですが、設定が膨らむにつれて全部あの娘のせいになってますね。かわいそうな子。

ご意見・ご感想お待ちしております。

話別閲覧者みたら、10話あたりまで急激に読者が減っていく事実。休止前のやつは今以上に酷いからなあ…

第三十三話 神はいない、女神はいた

「…知らなかったなら問題ない。これからいくらでも機会はある」

「…うん、そだね。知ってたらここ数日の出来事が変わってたかもしれないし」

盗賊団を捕まえることも、ディオと一緒に戦うことも…『目標』ができることもなかったかもしれない。

過去を悔やむことなかれ、苦しき道はされど最良なり。
まあミルザさんには小言くらい言うけど。

「そっかー…不思議に思ってたんだけど、グリシーヌの使う魔法が凄く良くなったのはそういうことか」

「…ここ数日はずっと勉強と実践を繰り返していた」

「知らない魔法の使い方があったんだけど、あれ、教えてもらってもいいでしょうか…？」

「…口頭式のことなら、試験の一環で身につく知識であり技術。感知式についてはまだ勉強中だけど、同様」

「すみません、単語だけじゃなんのことかさっぱり…」

口頭式と感知式…見せられた内容から考えるに、何か言葉に出すのと、自動で動くものなのかな。

もう、説明文が頭に入ってるのだろう。

グリシーヌは二つの単語についてすらすらと説明してくれた。

「口頭式は、詠唱された魔法に対して別の要素を発動させる切欠、『トリガー』と呼ばれる詠唱を加えることで使用方法に変化を加えること。」

感知式は、術者の意思をそのまま魔法の扱いに反映させる方法。…リユウジは、私を知る中で一番最初に感知式と思われる魔法を披露している」

「最初？最初に使った魔法って…『ライト』だったよな」

「そう。あれ自体が操作可能な魔法だったとはいえ、本来ありえない操作まで加えていた。教官が言っていたのを覚えてる？」

「難度は上がるが、あくまで正攻法…？」

「そう。だから、あのままギルドに来ていればすぐにでも昇格の可能性はあった」

「まじですか、結構もつたいなことしてたんだな…」

今思うと、D5とかほんと戦えない初心者って意味だもんな。戦いを敬遠してた俺だからいいけど、本来ならより早く昇格できる仕組みがないと延々と下働きされるってことだ。

「感知式は、もしかしてさっきの…」

「ちょうど魔法書に書いてあることを実践したら、ああなった。反省はしていない」

「実験台かよ！？頼むからそこは反省して、今後俺に向かって撃たないで！！」

ほんとお願いだから、後生だから、文字通り一回死んでるから、ね？俺の肝を冷やしたあの魔法は、何かの意思で操作されているような不自然さがあった。

俺が使った氷柱なんて、適当に飛ばすか落とすかしかできなかったからなあ。

「それじゃあトリガー式、いや口頭式ってどんなの？」

「…魔法の発動の瞬間を口頭によって操作する。ちなみに昨日使ったのは『フロストシヨック』、そのままだとただの石つぶてだけトリガーによってあのようになる」

「殺傷力のあるものでなくてよかったよ…」

酒場でいきなり人が死んだら、俺は全力で逃げ出してたぞ。

それにまた新しい魔法の使い方だなあ。

『フロスト』って霜とか氷の水晶のイメージがあるけど相変わらず氷関係なんだな。

『シヨック』って電気っぽいけど、実際は衝撃を受けたときの様子だったっけ。

グリシーヌが詠唱してたのは、たぶん悶絶してたせいで聞き逃してた。

実際聞いたのは『ブレイク』という『トリガー』らしき言葉。

「それで、ブレイクだったのか」

「…あの魔法は冷気を閉じ込めた爆弾のようなもの。トリガーによってその効力を発揮しただけ」

「なるほど、なんか格好いいな」

しかし、グリシーヌは納得しなかったようでどこが格好いいのか悩んだようだ。

残念ながら、女子にはこの感覚は分かるまい。

いや…なんかアランにも通じない気がしてきた。

期待できるのはディオだけか…あいつならきつとノッてくるに違いない。

「…まあいい。あなたの感覚は理解しがたいのは最初からだし。…

さっき使ったのは感知式の魔法で、私の敵意に反応して発動する」

…それってつまり、俺を害ありと見なしたから氷が飛んできたってことですよね？

「ほんとすいませんでしたああ」

念のため、もう一度頭を下げしておく。

しかし、なんか高度というか複雑というか、適当に魔法使ってた俺とは違って、洗練されてるな。

現代知識とは何だったのか。

「…なににせよ、あなたは私に近いところまで魔法の実力があると思う。魔力は残念な人だけど。だからD2くらいまでならランクは上げられるはず」

「ん？グリシーヌのランクは今D2なの？」

もし俺が依頼だけでやってたらまだD5から抜け出してない気がするぞ、さすがグリシーヌだな。

「次の試験でD1の判定をもらうつもり。あなたはそろそろD4になれそう?」

「いや、今D1...」

瞬間、どこからともなく冷気が発生する。

正確に言えば、発生源はグリシーヌの周囲であり、俺はこれをついさつき体験したような気がする。

そのグリシーヌは無表情なのに笑顔とも取れる表情で、俺に再確認する。

「...もう一回聞くけど、あなたのランクは今・な・に?」

「デイ...D1、で...す...」

や、やめて!氷が出てきてる!落ち着いて!許してくれるっていったじゃないですかー!

「.....あなたは勉強もせず、試験も受けず、なぜこつ理解不能な存在なのか...」

ゆっくりと話し続ける間にも、例の氷刃は数を増していく。

4...5...あ、記録更新した、7...8...

扇の形のように2列に広がった凶器は合計10個。

ああ神様、見てるならまた助けてください、そんでもって、信仰に+1お願いします。

あれを喰らったあと、ちゃんと『ピュリファイボディ』を唱えられるかなあと心配したとき、ひよんな所から助け舟がきた。

「はい、ストップストップ。訓練か喧嘩かはさておいて、やるなら街の外いつてきなさい」

ローザさんがこちらにやってきて、グリシーヌを後ろから抱きかかえる。

「ほらあ、頭に血が上っては魔術師失格よ。魔術を使うもの、常に理を忘れるなかっていうじゃない。理性も重要な要素よ」

抱きつかれたグリシーヌは、ローザさんのローブに隠された丰满な胸に後頭部を圧迫され身体が固定されたのか、嫌がりながらも逃げ出せないでいる。

集中が切れたのか、俺を付けねらう氷も、魔力が消失するにつれてその形を保てなくなったのか、さっきまでの光景が嘘のように消え去った。

「…離してください…離して…離せ」

なぜかそのまま、通路の奥に連行されていく。あれ？助けてくれただけじゃなかったのか？ なにかグリシーヌに用でもあったのだろうか。

魔法を止めるだけでなく、グリシーヌを連れ去ってしまったローザさんの行動の答えは、別の人が教えてくれた。

「やあ。ここで君に会えるとは僥倖だぞ」

残された俺に声をかけてきたのは、例の魔術師ギルドの職員だった。

第三十三話 神はいない、女神はいた（後書き）

感想にて、昏過ぎにアップするといったな

あれは嘘だ。

ご意見・ご感想お待ちしております。

以下雑談、今回の話に違和感を覚えた方のみ閲覧ください。携帯の方は数字キーで読まずに飛べます。

今回、主人公を救うためとはいえ、今までになかったおっぱい描写が入りました。

そりゃロビーで喧嘩してれば止められるのは当然ですので行為自体は問題ありません。

ただ、今までのように少ない描写で淡々と進めてきたのに、このような表現が入ると書いてる私ですら違和感を感じました。過去に指摘され、描写を増やすのは常々必要だと思っていたのが、このような描写が増えていくのは物語を面白くするのか…

ちなみにその描写を抜くと、「グリシー又は身動きできず」という描写で終わりです。今までこんなだったよね。

上手く書きたいとは常々思ってますが、盛大な勘違いに発展することもありえます。その時は、オラに元気をわけてくれ（意見、指摘、批評）。

ではこれにて。

第三十四話 図書カード？いいえ、リングです

「こんにちは。昨日はお世話になりました」

第一印象のせいであまり関わりあいたくない相手だが、失礼な態度をとらないように注意する。

その態度が正解だったのか、相手の方もフレンドリーに話し始める。

「ああ、昨日はすまなかつた。居心地を悪くさせてしまっただろう。君とは関係ない件で少々問題があつて気が立っていたんだ。本当にすまない」

「いえ、気にしてませんので大丈夫です。それより、何か御用でしょうか？」

ローザさんがグリシーヌを連れて行ったのは、おそらく話を聞かれないようにという配慮だろう。

何か聞かれて困ることもあつたのだろうか。

「それなんだが、あの時言ったことはあくまで本心だ。いつそ、魔導書を盗み見て覚えたといつてもらつたほうがよかつたが、本当のことなのだろう？」

「詳細は明かせませんが、盗みなどは決して」

「うちの支部長が信頼してるんだから疑つてはいないよ。ただ、謎を残されたままでは気が済まなくてね。未発見の魔法を使ったという事実を、功績と捉えてしまおうと思つている」

「功績…？」

「うむ。ようは過去のこととは割り切って、有力な研究者が増える可能性に期待する、ということだ。冊子程度でも構わない。真理の追究に役立つ情報が集まれば、いつでも報酬を出そう」

「あの～俺まだ魔法に関しては駆け出しなんで、ご期待に答えることが出来るかどうか…」

「まあ、調査もなく、ぼんぼん魔術理論を更新されては困るからな。『秘密』にされた中に既存の情報以外のものがあれば、我々に提供してほしい。…と、いうことでだな」

そういつて、一つの指輪を取り出す。

緑の宝石が中央にあしらわれたシンプルな銀色の指輪。

この世界だと、メッキ加工とかされていないだろうし、本物の銀で出来ているのだろうか。

「これは？」

「ちょっとした取引だな。この街のギルドが所有する書物を自由に閲覧できる。その代わり、今後編み出した魔法、そしてその魔法に関する詳細な考察を提供することを約束してほしい」

「全て隠さずでしょうか？それだと、受けるのは難しいと思います」

「まあ魔術は強力ゆえ、秘匿性もある。それはギルドが管理するものもあれば、個人の段階で公表しないことで秘匿することもできる。まさかとは思わないが、禁呪クラスのものが迂闊に広まれば手に負えないからな。その匙加減を、すぐに学べというのは酷というもの

だろう。あくまで、君自身で判断し、その後私を通してくれれば構わない」

提示された条件は、おそらくグリシーヌがいたあの部屋ではなく、その隣に続く、より上位の部屋の閲覧権。

さすがに、その禁呪とやらには触れられないだろうけど、魔法を学ぶ上で大きいメリットが得られる。

それ対して、こちらの条件はレポートを提出しろというもの。

詳細な考察ということは、その魔法を使う際に必要となる知識を、他人に解説しなければならぬ。

全てを公表しないといい、ということとは相手を失望させない程度に調整すればこの指輪を取り上げられることもない。

ようは、デイト達と行った魔法交換会の延長だな。

あの時は、うまく伝えられず失敗したが、それを今度は書物を通じて行うことになる。

もうやってしまったことなのだ、そう大事にならないだろうと考え、この取引を受けることにする。

「…わかりました。どこまでお役に立てるかわかりませんが、あなたにお伝えすることを約束します」

その返事を聞いて、ようやくこれまでの悩みが解決されたのか職員は笑顔を浮かべる。

「おお、そうか。これからよろしく頼むよ。さ、受け取ってくれ」

「ありがとうございます、あのお名前をまだ伺ってなかったのです
が」

「おっと、そうだった。私はここの職員で魔導師のギリアンという。」

私に用があるときは、受付にいつてくれればいい。では、これからよろしくなリユウジ君」

「はい、これから勉強させていただきます」

「うむ」

上機嫌で奥へ戻っていくギリアンさんの代わりに、連れていかれたグリシー又が戻ってくる。

今度は無表情で不機嫌を表現している。器用な娘だ

「おかえり」

「…ただいま。ん、その指輪どうしたの？」

ギリアンさんから受け取って、右手の薬指に嵌めた指輪にグリシー又が気づく。

本当のことをいったら、今度は死ぬよりも酷い目に遭いそうなので、適当にはぐらかす。

「この前の事件の報酬を渡し忘れてたみたいで、現物支給だったさ」

「…ふーん。私は疲れたから今日は帰る」

「あれ、もう図書館に行かないの？」

「…魔力を使いすぎたせいで、やる気がしない。帰って寝る」

「本日は真にすいませんでした」

何度目かわからない完璧なお辞儀を決めグリシー又を見送る。

一応彼女の目的は、俺に勉強しろと伝えることだったので、無事達成された。

やっぱりグリシー又でも魔力切れ起こすんだな…等級はイエローだっけ。

使わせた原因の俺がいつでも仕方ないか。

ちなみに、彼女は雨合羽を着用してお帰りになった。

というか、この街で傘はあんまり見かけないのは、雨合羽が安価で使いやすだからだろうか。

これから、どうしよう。

自由にできる時間が大半だと、何を優先したらいいかわからない。

こういうときは…ご飯だな。

朝を抜いているので、そろそろ腹の減りがやばい。

昼には早いけど、空いてるうちに食堂にいこう。

魔術師ギルドを後にし、おんぼろ宿屋への道を歩く。

朝と同様、繰り返し雨よけの魔法を唱える。

『我が身を覆う親和ならざる幕：エフェクトスクリーン』

三分という時間ごとに掛け直すことになるので、適当に好きなアーティストの歌を歌いながら歩いているとびつたりの歌を見つけてしまった。

詠唱の後、その歌を口ずさみながら悠々と歩く。

出歩く人も少なく、傘を差さないため視界もよく他の人との距離を確認できる。

雨の中、傘を差さず踊ってもいい、というのは誰の言葉だったか。まさにそんな感覚で歩き続け、到着した食堂は予想通り空いていた。

「すいませーん。定食お願いしまーす」

「はい、少々お待ちを」

日本語で書かれた看板メニューには大衆向けの料理名が書かれているのだろう。

もっとも、食材名に馴染みがないものがチラホラあるので、そういった物は注文しない。

この世界の島国であるゲツコウから伝わったかは定かではないが、なぜか存在する箸を見るとゲツコウへ行ってみたいという想いに駆られる。

料理が運ばれてくるまで、行儀悪く箸を弄って時間をつぶす。

なかなかしつかりとした木箸で、割り箸のような使い捨てではない。食に対する熱意は、この世界でも技術として大成してるかもしれない。

以前の酒場では、洋風といった食事になったが、この食堂では和洋折衷といった感じの料理が出されている。

ああいう酒場で白米を食べるのはいかにもミスマッチだが、この食堂で出される和食風の食事はいい感じだ。

モンスターが闊歩する世界で農作業は大変なはずだが、どこか安全な農耕地帯が確保してあるのだろうか。

白米と焼き魚にサラダとスープ。

こんなのも悪くない、うんおいしい。

第三十四話 図書カード？いいえ、リングです（後書き）

毎度毎度、適当なサブタイトルですいません。その一話の中から適当に考えてるだけです。

お気に入りが入りが2500件に。いつかは3000、4000と増えていくのでしょうか。

なんにせよ、一見さんも常連さんも読んでくれてありがとうございます。

時間の進みが遅いと、主人公を気絶させて一ヶ月経過とかそんな鬼畜でつまらない考えがふと湧きました。一日の流れで3〜4話使っていると、ドラゴンボールの引き伸ばしを思い出します。

ご意見・ご感想・矛盾の指摘など幅広くお待ちしております。
今回のカッププラタイムに出てきたのはこちら

BUMP OF CHICKEN / ダンデライオン

第三十五話 読書教室（一般常識編）（前書き）

今回から2話程度を主に読書に当てます。

説明文だらけで冒険なし、展開なし。今まで感想とか過去の話でた設定を主人公に確認させます。

第三十五話 読書教室（一般常識編）

「うちそうさまー」

「はい、えーと…御代は50銅になります」

「あ、銀貨でいいですか？」

そんな会話のあと、ふつくらと重くなった財布をしまい再び魔術師ギルドへ向かう。

定食を平らげたあたりで雨はその規模を弱め、店をでた頃には雲の隙間から太陽の光が差し込んできた。

雨に濡れた道を歩くと湿り気を帯びた冷たい風が吹いてくる。

霧の中を歩いたような僅かな冷たさをたまに照らしてくる日差しが紛らわせてくれる。

うーん、雨の後は気持ちがいい。

雨は嫌いだけど、このちよっとした湿り気具合がいい感じに涼ませてくれる。

この時間なら、雨もあがったことだし市場にも人が増えそうだ。

寄り道して財布を軽くするのもありだけど…無駄遣いは厳禁だな。

午後からはさっそく図書館で読書をして、地理や新たな魔法について学ぶとしよう。

魔術師ギルドに入ると、ローザさんに声を掛けられた。

「あら、お帰り。これからお勉強？」

「はい。簡単に一般常識でも見てごようかと」

「そっかそっか。頑張つてね、同業者さん」

「ええ、それじゃ」

図書館に向かって歩き始めると、後ろのほうで声が聞こえた。

「ローザさん、交代ですよー」

「ありがと、じゃご飯いつてくるわ」

「いつてらっしゃーい」

どうやら受付を交代したようだ。

まあ受付を無人にはできないから当然か。

通路の先に到着し、今回も一番右の部屋へと入る。

入り口付近のテーブルには司書さんはいなかったので、そのまま本棚の谷を進む。

前回気づいたのは、初心者向けの魔法や世界地理のようにジャンル分けして整頓されていることだ。

適当に本棚を見つめて、どのような本が置かれているか確認していく。

「…ふーん、こんなのが…お、なんだこれ…」

背表紙を人差し指でなぞる様に、ふと目についたものをどんどん辿っていく。

その中で一つ、『冒険者ギルドの成立』というものが目に付いた。まずはこれを読んでみるか。

この世界の本は、俺がイメージしていた一般的な書籍とは異なり、大きさも小さければ代わりに分厚いわけではない。

言い換えれば、それは手記と言えるものだろう。

それは、持ち運びやすいように重さを考慮したのか、長々と書き続けることができなかったのか：理由は不明だが、大学の図書館でよく目にした厚めの本を見つけることはできなかった。

紙の厚みも、想像よりも遥かに厚く、幼少の頃見た絵本などであったゴツゴツとした紙の厚みに近い。

手にした本もその一冊で、軽く読破できそうだ。

グリシーヌが使っていたテーブル席に座り、ペラペラとページを捲ってみる。

『始めに：この本は著者である私が知りえた情報を統合したものであるが、不明な点については過大な推測に基づいて考察されている。注意されたし』

『冒険者ギルドとは、この世界の各地に存在する自治組織である。その影響力は一つの国家に留まらず、国家の枠組みを越えて全ての人々の生活に深く影響を与えている。私が生まれ育った街も、祖父が生まれる時より以前に存在しており、ギルドに残された情報からも数百年以上昔より今のシステムを維持していると推測される。』

『ギルドが持つその組織運営力は主に二つの要素によって支えられている。一つは、依頼・訓練を通じて育成された次の世代の冒険者達であり、彼らの中にはいずれこの組織の内部に属し、職員としてその責務を全うしていく。そして二つめが、失われた古代の技術である。』

『古代の技術とはすなわち、神が与えた恩恵である。直接的な攻撃力、防御力を持つわけではないが、ギルドでしか確認されていない特殊な魔法が複数存在する。私達が知らないだけで、未確認の魔法が継承されている可能性も大いに有り得る。これらの魔法により、冒険者ギルドは私達の世界を裏から支え、過去の魔物の襲撃から我々を守り続けているのは間違いない』

『冒険者ギルドが果たす役割は、我々人類の存続である。生活圏の確保、拡大、維持。魔物の駆逐、冒険者の育成など様々である。国家との関係については、既に知人がまとめているのでそちらを参考にして頂きたい。なお、調査の甲斐空しくギルドの長であるギルドマスターの存在は、不明のままである。情報が全く出回っておらず、各地の支部長に話を聞いても首を横に振るだけだった。何ゆえその存在を隠蔽されているかは不明だが、重要な役職であるゆえのいざこざを回避するためだと推測する。以上である』

大まかにいって、このような内容である。他にはその調査内容に対する詳しい説明や、発見した証拠、知人達との経歴などが記されていた。触れられていた特殊な魔法というのは、このギルドカードのことだろう。

シグナムさんが使った『イノセントミラー』はあらかじめ、その目的がわかっていなければ思いつかない魔法である。あのような魔法がギルドにいくつも伝えられているのなら、その特殊性は他の組織より一線を隔した物になって当然だ。

それにしても、ギルドマスターが謎の人物ってのはどうなんだ。偉い人だから誘拐とか強盗が怖いのだろうか？

ギルドマスターっていうくらいだから凄く強そうだけど、まあ用心

に越したことはないか。

読み終わった本を元の場所に戻し、別の本を物色する。

ギルドカードについての本も発見したが、これは不明な点が多く、ステータスの数値についての検証結果しか読み取れなかった。

『ステータスとして明記される個々の能力が何によって判断されているかは不明だが、数々の事例を検証した結果わかったことを記す。』

『数値は0から100近い数値まで個人の能力によって変動する。上限が不明なのは、今だ限界に到達したものがいないためであり、過去のSランク冒険者を参考にした、きりの良い数値である100を代用する。日常生活における我々の能力を表せばおよそ20〜40程度であろう。これは年齢によって自然とピークを迎えるものもあれば、特に変動しないものもある。』

『また訓練や経験を通じて成長することで、この数値は大きく改善される。秀でた人物であれば50、60、70と数値は上昇する可能性がある。しかし、現実的な限界として70を超える人物は稀である。また、下限近い数値と上限近い数値での伸び率や、1の数値の変化は大きく異なる』

『筋力が30から35に上昇した結果は、少々持てる重量が変化した程度であるが、60が62に変化した人物はかなりの重量に耐えられるまで変化した。成長については、不可解な点があるため確証はないが、日常の生活では得られない未知の力が、この変化を促しているのではないかと仮説する』

確かに、この世界にきてから筋力が30から31に変化したがあく

強くなった気がしない。

精々が握力が僅かに上がった程度だろう。

知力の上昇がこの本に書かれた例とぴったり一致するんだが、これまた実感する機会がない。

早く、筋力が50くらいにあがらないかなあ…そしたら少しは体つきがしっかりしそうなのに。

その後も、地理や生活に関する蔵書を探して回ったが十分な知識は得られなかった。

街の周辺の地図はあったが、主に人が暮らす村や町を繋ぐルートと危険域を知らせるのが精々で、航空写真で作られた現代の地図のすばらしさを再確認する結果となった。

「…この街から…東にいくとアンナのいる村で、こっちがコズの村か」

アラベル一家が住む村は『リント』という名らしく、果実を栽培しているという『コズ』の村と分かれ道によって結ばれていた。

この街の周辺は伐採によって草原が広がった過去があるようで、ちよとど円形に広がった草原の向こうを森で囲まれている。

もう一つ、この国の全体図を表す地図も発見した。

東に向かい、リントやコズの向こうをさらにいけば、別の自治領が同様に北、南にも同じく大きな街があり、この街がこの共和国の最西端となっていた。

仮に他の地方からの侵略があれば、ここが最初に狙われる可能性が高い。

この立地関係は、以前の事件と決して無縁ではないだろう。

この地図は、この図書館のものだから持っていけないが、この先必

要になるな。

街のどこかでこういう冒険者向けの雑貨を販売するところを探さないといけない。

こういう地図って、作成に命かかっているから予想だと結構高いんだよな…

第三十五話 読書教室（一般常識編）（後書き）

章作成という項目があったので、使ってみました。

次は、魔法に関する読書かな。

説明がお嫌いな方は今しばらく物語が進むまで飛ばしてください。

妄想の段階だった設定を固めるために四苦八苦しております。

ご意見、ご感想お待ちしております。

愚痴：絵が描ければ…自分で地図を形にできるのに…

第三十六話 読書教室と魔術編

巻物状にぐるぐると地図を仕舞い、元あった棚に置く。

このまま、興味があるものを片っ端に調べるのは疲れるので、次は魔法に関するものに絞ろう。

特に、グリシー又が言っていた口頭式と感知式については、俺が使える魔法をより強力にしてくれるはずだ。

グリシー又と一緒に歩いたのは確かこの辺りだったかな。

彼女が本を返した場所を思い出しながら、本棚を搜索する。

程無くして、魔術について記されたコーナーに到達したので、本のタイトルから内容を推測しつつ、目当ての本を探す。

そして、術式という言葉に惹かれ一冊の本を手取る。

タイトルは『術式の応用と魔法の利便性』。著者は…不明？

立ち読みでも読破できるのだが、集中して読むべきだと考えてテールへ向かう。

首をぐりぐりと回して、少し凝った肩をほぐしてから本を開き読み始める。

『まずは、この本を手取った者に一言。希望と絶望は、等しく存在する。故に忘れるなかれ、その選択が導く結果を』

『この本は私が送る、将来への試金石である。内容を理解し更なる高みへと至れば、また別の私の著書に触れることができるだろう』

『努力と研鑽を忘れず、私の元まで来てほしい。未来ある者たちへ』

なんだか出だしから、めんどくさそうな内容だな。

ペラペラと次のページへと移っていく。

『魔法とは、世界を変える力である。これは誰もが知っている。では、誰が、世界を変革しているかを知っているか？単純に答えれば、魔力を用い、魔法を行使する我々自身である。魔力という黒いインクを言葉というペンによつて、声として世界に刻み付ける。しかし、その結果の先、それを読み取るものが確かに存在しなければならぬ』

『それが、我々の信じる神であるのか、この世界そのものかどうかは定かではない。だが、いかにその存在へ我々の意思を伝えるかが、魔法を扱う上で重要なのは理解できるだろう』

『その手段として、利用できるのが口頭式、感知式である。口頭式とは、本来の魔法の詠唱後に更に声を加えることで、魔法の姿を変化させることができる手段である。私はその「声」のことをトリガーと呼ぶ。あらかじめ対応したトリガーに適した魔法であれば、魔力の消費も少なく、その効果は遺憾なく発揮されるが、適さないトリガーを使用する際には問題が付き纏う』

『感知式とは、使用した魔法そのものに自由を与え、意思によって制御する手段である。この魔法の優れたところは、発動した魔法に様々な応用が効くことである。魔法が術者の意思を感じ取り、影響されることから、これを感知式と命名した。一見優れた魔法の術式に思えるが、問題はその魔力消費量の極大化にある。魔法が世界に具現化するとき、その出現位置は肉体から放出される魔力に影響される。正確には、声を通じて行われる魔法の発現は、術者から離れれば離れるほど、消費する魔力量が跳ね上がる。』

『そこで影響してくるのが、自由を与えられた魔法と使用者を繋ぐ

距離である。感知式は、その魔法の継続中、常に術者と魔力を通して繋がっており、魔力は消費され続ける。この魔力が分断されればそれはもう感知式とは言えなくなる。この魔力維持が可能となる者でなければ感知式は扱うことが難しい』

『以下、簡単な例として上記の術式の訓練方法を記すので、勤勉に励んでほしい』

……なるほど、グリシーヌが疲れを訴えたのは納得だ。

複数の氷を操りつつ、俺に当てないように操作し、ついでに俺の命乞いを聞いている間にも魔力は徐々に消費されていたのだろう。

口頭式は、グリシーヌが使った『ブレイク』『シユート』といった英単語か。

あれによって、球体が破裂したり、尖った物を矢のように射ち出すことができるようになる。

ん？でも、魔法名は聞かなかつたが、本日二回も喰らい掛けたあの魔法は感知式のようなだけだ、『シユート』と詠唱を加えていた。もしかして、感知式の最中に口頭式を加えて魔力の消費を抑えたのか？

二通りの術式をさっそく取り入れて、俺という的で実験したのは流石としかいえないな…ほんと。

でも、これだけの内容を書いた人ってどんな人なんだろう。

魔法が上達したらまた会えるって感じのことが書いてあるし、隣の部屋を探せば続きがあるかもしれない。

すっかり、上達してから読むべきなんだけど、この指輪のおかげですぐ入れるんだよなあ…

うーん…なんだか、この本の人に悪い気がする…

魔法を開発もせずにはかかずかと入り浸るのも気がひくし、焦らず勉強していくか。

こうして魔法の知識が一段階あがったわけだし、実践に取り入れなければいけない。

どこか、他人に迷惑にならない場所で訓練していきたいけど、街の外にでもいくか。

謎の著者Aさんに感謝し、本を返却して図書館を後にする。

本を返すとき、棚を整理していた司書さんと目が合ったので軽く会釈しておいた。

図書館ではむやみに声を出すのはやめましょう。

このまま魔術師ギルドを後にしようかと思っただが、グリシーヌが言っていた試験について聞いて損はないと考え、受付の女性に声を掛ける。

「すみません、ランクについて試験があると聞いたんですが詳しく教えてくださいませんか？」

「はい、わかりました。試験については、ギルドカードを提示し今のランクを教えていただければ、あとは適した魔導師の方に個別試験を依頼できます」

「それはいつでもいいんですか？」

「まあ特に制約はありませんが、一応試験に掛かる手数料がございますので、なるべく実力がついてからが望ましいですね。手数料に

ついでにはランク毎に連絡致します」

「そうですか…もしD1が試験を受けたいと申し込んだら費用と難易度はどれくらいか、わかりますか？」

「D1でしたら申し込み料は銀1枚、試験内容は図書館で学ぶことのできる魔術知識を実戦で見せていただくことが多いかもしれせん」

「なるほど。どうもありがとうございます」

「いゝえ」

少しおっとりした感じの受付の女性に見送られ魔術師ギルドを出る。試験については、概ね予想していた通りだった。

ただ、実戦で見せることになるのはもうちょっと後かと思っていたが、さすがにランクの切り替えに差し掛かっただけはある。

次ランクがあがれば、Dランクを卒業してCランクの仲間入りだ。

第三十六話 読書教室（魔術編）（後書き）

冒険がしたい、ちょっとドラゴンにでも街を襲わせるか。

せつかくの指輪の利点を潰そうとしてる主人公ですが、自分は現代知識を持ち込んだに過ぎない小市民だと思っっているため、気が小さいです。

ずうずうしくいければきつと楽なんでしょうね、もったいない。

とりあえずこれではらく図書館を離れて別のことができそうです。

ご意見ご感想お待ちしております、感想欄は雑談でも何でもええのよー。

あと辛口にレビューを書いてくださる方も大歓迎です。

作者の返事を気にしないで、感じてることをばっさり教えてもらえると改善の助けになります。では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462u/>

異世界で我が儘に

2011年12月11日15時28分発行